

駒場

2006



東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部



KOMABA 2006 SUPPLEMENT
GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO KOMABA

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場]2006
SUPPLEMENT



表紙に使われているロゴデザインは、
平成11年に、教養学部創立50周年を記念して、
東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の新たなシンボルとして作成された。
東京大学の伝統的なシンボルであるイチョウを3枚重ねることにより、
学部前期・後期・大学院の3層にわたる教育の融合と創造、
学問の領域を越えて世界に発展する駒場の学問の未来をイメージしている。
制作は(株)榊の石塚静夫氏。

表紙について

光電子増倍管
1983年 50cm×50cm×70cm

岐阜県のスーパーカミオカンデは、ニュートリノの検出でよく知られている。ここでは、超純水を用いてニュートリノを検出している。真空中を光にほぼ等しい高速で動くニュートリノは、水中を、水中の光速よりも大きな速度で通過するため、チェレンコフ光と呼ばれる光を発することが知られているが、この光を光電子増倍管で検出し、ニュートリノの存在を確かめるのである。

光電子増倍管は、光電効果を利用して光電子を発生させ、さらにこの電子を強い電場で加速して二次電子放出面（ダイノード）にあて、より多くの電子を飛び出させる。このようにして次々に電子を発生させ、弱い光を観測できる信号に変換するのがこの機器の特徴である。

表紙の光電子増倍管は、スーパーカミオカンデができる以前の研究施設、カミオカンデにあったものである。カミオカンデは、3,000トンの水タンクにこの光電子増倍管を1,000本設置した実験機器で、1983年より観測を始めた。観測することが目指されたのは、水素の原子核（陽子）が壊れるときに発生するニュートリノ、より正確に言えば、ニュートリノが発生させるチェレンコフ光である。カミオカンデの建設を指揮した小柴昌俊は、精密な測定ができるよう、直径50cmという特別に大きい光電子増倍管を、浜松テレビ（現在の浜松ホトニクス）と共同で開発した。

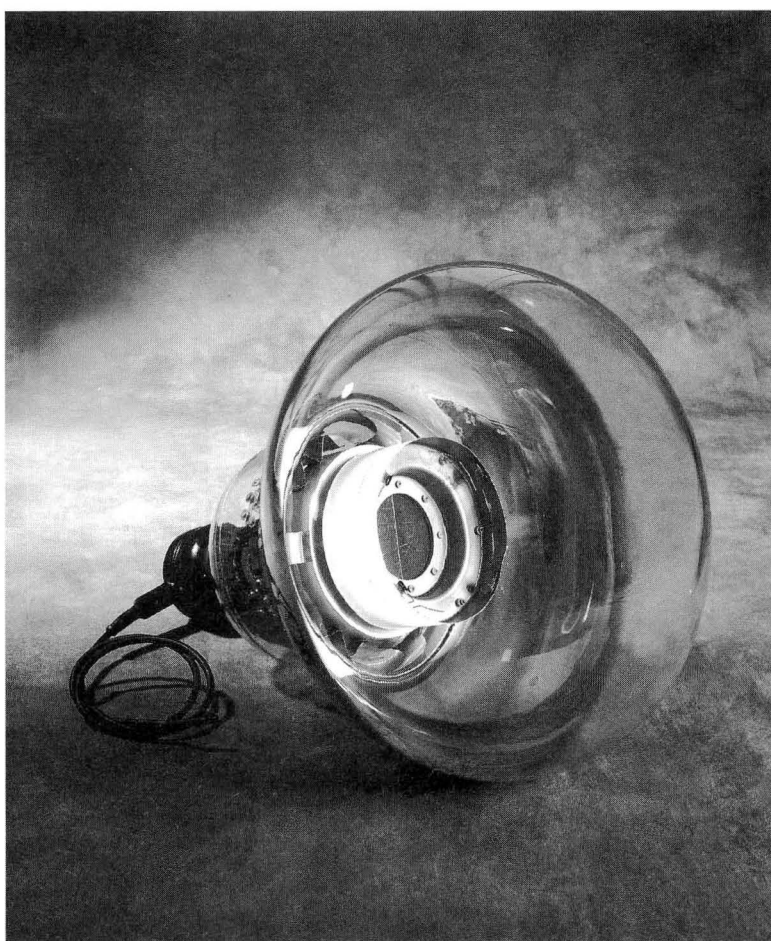
カミオカンデでは、はじめ、陽子の崩壊の観測が目指されていたが、それよりもエネルギーの小さい現象も観測できることが分かり、1984年からは太陽ニュートリノの観測にあわせた装置の改良が行われた。この改良により、1987年2月23日に、大マゼラン星雲でおきた超新星爆発に由来するニュートリノを世界で初めて観測することができた。小柴は、この業績などを理由に、2002年度のノーベル物理学賞を受賞したのである。

カミオカンデは、1996年に役割を終え、新たな研究がスーパーカミオカンデと呼ばれる研究施設で開始されることとなった。この光電子増倍管は、スーパーカミオカンデで再利用することができず、廃棄されたものの一つである。2006年夏には、駒場博物館で開催された特別展「小学生からわかる光の世界 ―ニュートン・アインシュタイン・現代―」で展示された。

なお、小柴昌俊が物理学に進むにあたっては、彼が駒場で過ごした日々が決定的な意味をもっていた。小柴は、1945年4月に旧制第一高等学校に入学したが、戦後の混乱期に第170期の寮委員会の副委員長を務める（ただし食事部会計の使途不明金問題で170期の委員は総辞職した）などの活躍をするうち、成績が下がってしまった。このころ風呂にはいっていると、一高の教師たちが、成績の悪い小柴が物理学科に行くことはないだろうと話しているのが耳に入ってきた。日本の物理学が中間子論などの目覚ましい成果を挙げていることもあり、物理学科に入学するのは難しくなっていたのである。この話を聞いた小柴は奮起し、寮で同室であった朽津耕三（後に東京大学理学部長）に家庭教師を頼み、猛勉強を始めた。そのかいあって、大学では無事に物理学科に進むことができたという。

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場] 2006
SUPPLEMENT



東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部

まえがき

2004年4月1日、国立大学法人東京大学として新たなスタートを切ってから3年目に当たる2006年。大学院総合文化研究科・教養学部は、前期課程カリキュラムにつき、1993年以来の大幅な改革を行い、今年度入学者にたいして実施するという記念すべき年となった。国立大学法人東京大学として、また激動の21世紀にあって、どのような教養教育がふさわしいか、長期にわたって全学的に議論した結果として策定された新カリキュラムの施行である。さらに、今年度入学者については、改定された進学振分け制度も、2007年度に施行される予定である。

2006年度はまた、PFI事業による駒場コミュニケーションプラザが完成した年としても記憶されるべきであろう。本事業の完成によって、旧駒場寮一帯の景観が一新されただけでなく、教職員・学生の福利厚生面での大幅な質の向上がもたらされることになったのである。

本書「駒場2006」は、大学院総合文化研究科・教養学部の「年報」である。「駒場2005」のSUPPLEMENTである本書は、2006年度の活動報告を記した第一章と、06年4月以降に駒場に着任した教員を紹介する第二章を柱とする追補版である。ここには、新たな制度と施設のなかで、より豊かな駒場を目指して試行を重ねる私たちの姿が記録されている。

駒場に集うすべての人々のために、多くの方々の協力を得て、この書物は編まれた。「駒場2005」とともに、より多くの読者の方々に活用されることを願ってやまない。

2007年2月
広報委員会

I

2006年度における大学院総合 文化研究科・教養学部

1 研究科長・学部長の交代にあたって

大学院総合文化研究科長・教養学部長が、2007年2月16日に木畑洋一前学部長から小島憲道に交代しました。木畑前学部長の時代の2年間は、大学院総合文化研究科および教養学部にとって大きな変革の時でした。

教育面では、新学習指導要領のもとで教育を受けた最初の学生が入学する2006年度の前期課程カリキュラム改革、UTask-Webによる教務事務の電算化、教養教育開発機構と寄付部門の設置、「大学教育の国際化推進プログラム」による東アジア・リベラルアーツ・イニシアチブ（EALAI）の設置、「魅力ある大学院教育」イニシアチブによる人間の安全保障プログラムの整備拡充、科学技術振興調整費による科学技術インタープリタープログラムの設置、海外先進教育実践支援プログラムの採択などがありました。

施設面では、文系教員の悲願であった総合研究棟（18号館）の完成、PFI事業による駒場コミュニケーション・プラザの完成とスタインウェイ社製フルコンサートピアノの導入、概算要求による5・8号館の耐震改修、学生のための新ロッカー棟建設、ITを活用した理想の教育のモデル実験教室（Active Learning Studio（ALS））の設置、6・7号館の耐震改修などがありました。このように木畑前学部長の時代に駒場Ⅰキャンパスの教育・研究および施設の整備が大きく進む中、研究科長・学部長の重責を引き継ぐことになりました。私は木畑前学部長の時代に推進してきた駒場Ⅰキャンパスにおける施設の向上を推進するとともに、駒場Ⅰキャンパスの三層構造である教養学部前期課程教育、後期課程教育、大学院総合文化研究科の教育研究面での充実を推進して行きたいと思っております。

日本の多くの大学では、入学時に学部・学科が決まっているのに対して、東京大学では、前期課程教育を終了した後、学部・学科を選ぶシステムを取っています。これは、高校までの知識と興味で将来の進路を決定するのではなく、大学に入学してから様々な分野の最前線の情報に出会い、また幅広い教養を身につける中で、自分の適性を知り、自分の進路を選ぶことが重要であるという理念（late specialization）に立って行なっているものです。

駒場キャンパスの教育システムは、約7,000人の学生が学ぶ教養学部前期課程、約450人の学生が学ぶ6学科で構成される教養学部後期課程、約1,400人の大学院生が研究する5専攻・3系で構成される大学院総合文化研究科の三層構造からなっており、大学院総合文化研究科に所属している多くの教員は三層全てに亘って教育を行なっている特色あるキャンパスであり、このような環境の下で学際的で領域横断的な研究および人材育成が育まれてきました。新しい学問分野の創成や萌芽的な研究は、価値観の多様性を包み込む環境と学風のもとで育まれるものと思っております。私は、教養学部・大学院総合文化研究科が築き上げてきたこのようなりベラルアーツの学風を大切にしつつ、駒場キャンパスの三層構造全てにわたって教育・研究面での充実を推進して行きたいと思っております。

今後の課題としましては、前期課程教育における高度英語習得プログラムの実現、教養学部後期課程教育の改革、複雑系生命システム研究センター事業の推進、図書館Ⅱ期の建設、スポーツ身体運動科学の教員の悲願である研究棟建設、前期課程基礎実験施設を含む理想の教育棟の建設などの実現を目指し、教職員・学生の相互信頼関係による魅力ある駒場キャンパスの発展に努めて行きたいと思っております。

1990年代から2000年代にかけて日本の大学は全国規模での教養部改組、大学院重点化、国立大学の法人化、大学評価機構による外部評価などを経験してきましたが、駒場キャンパスの教員および職員は他部局にはない三層構造の教育に加えてこれらの課題に多くの時間と労力を割いてきました。このため、学問の最前線で活躍するための研究時間、人材育成のための充実した教育に費やす時間が少なくなっていることに危惧を感じております。活力ある創造的な教育研究活動には、没頭する十分な時間と頭脳を遊ばす思索的な時間が大切です。大学院総合文化

研究科に所属する教員が、文系理系を問わず様々な分野の最前線で活躍し、教養学部の前期課程・後期課程および大学院総合文化研究科で特色ある人材育成教育が出来るよう、効率の良い組織の環境を整えて行きたいと思っております。

駒場キャンパスには、豊かな自然、パイプオルガンや駒場美術博物館など教養と文化の香りのする施設が沢山あります。2006年に完成した駒場コミュニケーション・プラザは、駒場キャンパスにおける学生および教職員約1万人の快適なキャンパスライフに寄与する施設です。この施設が創造的な教育研究を生活基盤の側面から支える場として外国人留学生・研究者を含めた学生および教職員の交流が行なえる場として活用されることを願っています。2007年は東京大学創立130周年にあたり、これを記念して本郷・駒場・柏キャンパス全体で130の「知のプロムナード」造りが計画されています。この計画に沿って今後、一二郎池周辺の整備なども行い、駒場キャンパスの恵まれた環境が学生および教職員に最大限に活用され、専門性と豊かな教養が育まれるキャンパスにしたいと思っております。

(小島憲道)

2 運営諮問会議(第2期第2回、第3回会議)

2005年に発足した第2期運営諮問会議は、2006年1月に開催された第1回会議(諮問事項は「教育の国際化について」)に続いて、2006年度は第2回会議と第3回会議が開かれた。(第1期運営諮問会議のまとめと第2期第1回会議の内容は『「駒場」2005』で紹介されている)。

今期の運営諮問会議の委員は下記の方々である。

安藤忠雄(建築家、東京大学特別荣誉教授)

緒方貞子(国際協力機構理事長)

下條信輔(カリフォルニア工科大学教授)

遠山敦子(新国立劇場運営財団理事長)

蓮實重彦(元東京大学総長)

毛利 衛(日本科学未来館長)

森 稔(森ビル株式会社取締役社長)



第2回運営諮問会議

第2回運営諮問会議は、2006年7月19日(火)10時から12時まで、アドミニストレーション棟3階の大会議室で開催された。運営諮問会議から、下條委員、遠山委員、蓮實委員、毛利委員、森委員の5名が出席された。まず木畑研究科長・学部長から「総合文化研究科・教養学部における教育の国際化について」と「総合文化研究科・教養学部における教育と研究の新しい方向」という諮問事項が示され、あらかじめ送付してあった資料に基づいて説明が行われた後、蓮實議長の司会のもと以下のような論点に関して討論がなされた。

諮問事項①「教育の国際化について」

この諮問事項は第1回会議からの継続事項であり、議論に先立って、木畑研究科長から1月の第1回会議以降の経緯と検討状況、そして教育の国際化推進のための募金構想について説明が行われ、それに関する委員の側からの質問の後、特に以下のような点について意見が出された。

○国際化推進のための募金構想について

3、4年生を対象としたAIKOMプログラムのほかに、1、2年生を対象とした海外の大学との交換プロジェクトを立ち上げるために構想された募金活動に関して、プログラム運営のために特定の教員に負担がかからないように、駒場だけでなく、東京大学全体できちんとした組織を作って運営していくべきだという意見が出された。また、募金についても、寄付を求める企業や個人に対して東京大学、そして教養学部として目指していることを明確にし、企業にとってのメリットを説明する必要があること、また部局が特定のプロジェクトごとに個別に外部資金の獲得を目指すのではなく、東京大学全体で組織的に戦略を立てて、外部資金を拡充し、運用していく体制を作る必要があることが指摘された。

○駒場の国際化の戦略について

3、4年生を対象としたAIKOMプログラムの事業は委員たちからも高く評価されたが、同時に運営する教員の負担を緩和し、さらにこの事業を拡大するために外部資金の獲得をAIKOM中心に行ってはどうかという意見が出された。

諮問事項②「総合文化研究科・教養学部における教育と研究の新しい方向について」

この諮問事項については、研究に関しては現行の3つのCOEプログラムについて、教育に関しては、現在教養学部で構想されている〈理想の教育〉プロジェクトについて議論が行われた。

○COEプログラムについて

現行の3つの21世紀COEプログラムの目的と成果、そして将来の課題について、それぞれのリーダーである浅島誠教授、小林康夫教授、長谷川壽一教授から説明が行われ、それぞれに対して質疑応答がなされた。その後、次期COEプログラムに申請予定の案について木村秀雄教授からも説明が行われた。

3つのプログラムの現在の活動については委員から評価され、今後の活動についての期待が表明された。ただ、下條委員からは、現在のように、まずCOEのような資金があって、その受け皿として研究プロジェクトを考えるというのではなく、駒場としてどのような学問を立ち上げるのかという具体的なアイデアから出発すべきであるという意見が出された。また、同委員から、学際的な研究を行うためには、複数の学問の基礎的な知識を古典的なところから身につけている必要があるという指摘もなされた。

○〈理想の教室〉プロジェクトについて

まず、東京大学に蓄積されている知をIT技術を用いて教育に還元することを目指す、このプロジェクトについて永田敬教授から説明が行われた。それに対し、委員の中からは資金面に関する危惧が表明された。また、〈理想の教室〉と教育の国際化のいずれについても、プロジェクトチームを作って、積極的に取り組んでいく必要があること、そしてそこではオリジナルなアイデアと専門性が求められることが指摘された。

第3回運営諮問会議

第3回運営諮問会議は、2007年1月12日（金）14時から16時まで、アドミニストレーション棟3階の大会議室で開催された。運営諮問会議から、安藤委員、緒方委員、遠山委員、蓮實委員、森委員の5名が出席された。まず木畑研究科長・学部長から「総合文化研究科・教養学部における社会連携」という諮問事項が示され、資料に基づいて、総合文化研究科・教養学部で行われている社会連携活動についての説明がなされた後、蓮實委員を議長として、主として次のような論点について、さまざまな意見が出された。

○高校生のための金曜日講座

現在は一部の高校のみを対象に行われているこの講座に関しては、もっと広い範囲の高校生を対象としたものにしていく必要があると指摘された。また、一部の教員の努力によるところが大きいこうした社会連携のための活動においては、教員の負担を少なくするために専任をおく必要があるのではないかという指摘もあった。

○オープンキャンパスなど

オープンキャンパスに関しては、より多くの受験生が参加できるように広く知らせるべきだということ、東京大学の場合、学生を集めるためというよりむしろ、大学教育や学生生活の魅力を知らせるところにオープンキャンパスの意味があるのだという意見が出された。また、総合文化研究科・教養学部が社会に向けて行うさまざまな活動においては、東京大学がどのような活動を行っているのか、東京大学ではどのような学生を求めているのかといったことを、大学自ら社会に向けて広く発信していくことが必要であると複数の委員から指摘された。

（西中村浩）

3 2006年度入学者に対する新カリキュラムと進学振分け制度

1. はじめに

2006年4月に新学習指導要領による高等学校の課程を修了した学生が初めて入学し、この時期に向けて整備してきた学部前期課程の新しいカリキュラムが、施行された。

また、新カリキュラムで学んだ学生を対象として2007年6月～9月に行われる平成20年度の「進学振分け」の詳細もほぼ確定した。

東京大学の学部前期課程教育の実施は、全学の協力・連携の下に、大学院総合文化研究科・教養学部が責任部局として担っているが、カリキュラムや進学振分け制度を含む基本事項は、常に全学的な議論を経て策定される。東京大学21世紀学術経営戦略会議（UT21会議）の教育体制検討委員会（2001年度に設置）における議論から始まった今回の改革は、後期課程各学部とのこれまで以上に緊密な対話のなかで改革案が練り上げられた。

新カリキュラム改革と進学振分け改革の内容については、「駒場2005」にやや詳しく述べられている。前期運営委員会では、詳細な報告書「東京大学学部前期課程2006年度カリキュラム改革報告」を2006年12月にまとめた。この報告書には、今回のカリキュラム改革、進学振分け改革、及び教務電算システムの更新について、それぞれのいきさつと、学部内の前期部会や専攻・系で行われた議論が具体的に記されている。これは、今回の改革の内容とその考え方を知る上で、貴重な資料になると思われる。

2. 新カリキュラム

カリキュラムの主な改訂内容は以下の通りである。

- (1) 外国語の1コマあたりの単位数を1単位から2単位に改め、必修コマ数を削減した。これに伴って、1クラスあたりの定員を55人標準から35人標準に減らした。
- (3) 「情報処理」を「情報」に改めた。
- (4) 「スポーツ・身体運動実習」を「身体運動・健康科学実習」に改めた。
- (5) 文科の基礎科目を科目群「社会科学」「人文科学」「方法基礎」に分類し、文科各類それぞれに特徴のある選択必修の縛りを付けた。
- (6) 理科各類の基礎科目を充実させた。すなわち
 - ・「基礎実験」は、理科一類は「基礎物理学実験」と「基礎化学実験」、理科二、三類は「基礎物理学・化学実験」と「基礎生命科学実験」に改めた。
 - ・理科二・三類の「数学I」「数学II」の必修単位数を、各4単位、計8単位にした。
 - ・「数学I演習」「数学II演習」4単位を理科の全ての科類で必修化した。
 - ・「熱力学」を理科一類の、「化学熱力学」を理科二・三類の基礎科目とした。
 - ・理科一類に基礎科目「生命科学」、理科三類に基礎科目「人間総合科学」を新設した。
- (7) 総合科目の大科目の修正、各大科目内の科目追加や廃止、各科目の講義内容の修正を行った。同時に、全ての総合科目について、責任母体を見直して確定した。また、総合科目の選択必修科目単位数を、18単位から16単位に変更した。
- (8) 主題科目に「全学体験ゼミナール」を加えた。また、主題科目はすべて1コマ2単位とし、その上で、2単位以上を選択必修とした。

3. 履修に対する改定

学生の科目履修の規則についても改定を行った。

すなわち、1年次の履修について、履修単位が基準を満たさなければ留年することにした。これは、自ら留年を希望しない限りすべての1年生が自動的に2年生に進級していた旧カリキュラム比べて大きな変化である。これは、1年目のフレッシュな気持ちを保ってその後の勉学を続ける習慣を育てるための措置である。留年せずに2年生になれる条件は科目群毎に定められているが、概ね1年の間に取得すべき単位の半数である。この条件による2006年度の留年者数は本文執筆の時点ではまだ明らかでない。

もうひとつの改定として、前期課程の履修要件を超えて学生が登録した科目は、期末試験の結果成績が不可でも、あるいは試験を欠席した場合でも、重率0.1で進学振分けの際の平均点に算入されることになった。これは、登録科目を真剣に選び責任を持って履修することを奨励するための措置である。これによって、2006年度の総合科目の履修登録数は減少したが、各科目の1年生の登録者の期末試験受験率は大幅に増加した。

4. 進学振分け

新カリキュラムで学習している2006年度の入学生は、2007年6月～9月に「平成20年度進学振分け」の適用を受ける。2006年度には、それに向けての進学振分け制度の詳細の決定が、古田理事・副学長（教育担当）の下で教育企画室進学振分けWGで行われた。決定の内容は以下の通りである。

- (1) 第二段階の簡素化を目指して調整されてきた、両段階の各指定科類および全科類への進学定員の配分を確定した。
- (2) 第一段階で定数が満たされなかった場合の余剰の定数の扱いについての原則と、申し出による例外的扱いを確定した。
- (3) 2005年度以前に入学した文科一類、文科二類、理科三類の学生が、基本的対応関係にある学部（それぞれ法学部、経済学部、医学部）を志望した時の扱いを定めた。
- (4) いわゆるabc方式について以下のように申し合わせた。
 - ・ 第一段階のabc方式は、単一学科の異なるコースとみなせる範囲でのみ行うことができる。
 - ・ 第二段階のabc方式は要求科目が共通の学科群の間でのみ行うことができる。
- (5) 進学振分け対象者に配付する進学振分けの手引き（「進学振分けについて」と「進学振分け準則」を掲載した冊子）の形式と内容を決定した。

2006年11月29日と12月1日に、それぞれ主に理系と主に文系の学生を対象に、平成20年度進学振分けの説明会を行った。また、引き続いて12月上旬に、希望する各学部が、臨時の進学ガイダンスを行った。

5. UTask-Webの本格稼働

今回のカリキュラム改革および進学振分け改革と並行して更新された教務電算システム（UTask-Web）も、2006年4月からの新学期に向けての教務事務処理から本格稼働した。

このシステムは新旧両方のカリキュラムの運用に対応できるような仕様になっており、ハードウェア、ソフトウェアとも2004年度末に納品されたので、2005年度には旧カリキュラムを部分的に運用しながら、新カリキュラムの運用への試行を行うことができた。2005年度冬学期の旧カリキュラムの運用はUTask-Webの事実上の試運転であったと言ってもよい。

この試行を受けて、2006年4月からは本格的な稼働にはいった。このシステムは、事務職員と教員が従来以上に深く関与し、双方の立場に配慮しながら設計・製作されたが、稼働も、教務課職員、教員、受注業者の協力により、驚くべきスムーズさで行われた。2006年度の2年生は全員旧カリキュラムを履修中であり、平成19年度進学振分けも当然旧制度で行われたにもかかわらず、新システムの運用によって順調に処理された。

4 駒場コミュニケーション・プラザの完成

1. 駒場コミュニケーション・プラザの完成と竣工披露記念式典

2006年10月1日、駒場コミュニケーション・プラザ（KCP）が全館開館した。生協購買部・書籍部と、音楽実習室・多目的教室・舞台芸術実習室・身体運動実習室などからなる北館は、2006年4月に開館したが、食堂・交流ラウンジからなる南館、集会・親睦会・合宿や華道・茶道などに利用できる和室6部屋からなる和館がさらに開館し、これでKCPの全設備が利用できることとなった。

KCPは、駒場で勉学にいそしむ学生と、駒場を職場とする教職員の活動を支える場として、寮を取り壊した跡地に設けられた。設計・建設と維持管理・運営については、特別目的会社「駒場コミュニケーション・プラザPFI株式会社」に発注・委託するPFI方式がとられている。

開館に伴い、10月25日午後3時から、竣工披露記念式典が開催された。式典では、木畑洋一総合文化研究科長・教養学部長および小宮山宏総長の挨拶に続き、文部科学省高等教育局長清水潔氏、廃寮時から実務にあたられた永野三郎名誉教授（現埼玉工業大学学長）から祝辞が述べられた。小宮山総長は、中庭の芝生に学生が寝転んでいる様子を見て、「このような空間が欲しかった。今度は教員があの中に加わっているのを見たい」との感想を語った。清水局長からは、いまの学生がうらやましいとの声があがり、永野名誉教授からは、「廃寮の際には、学生・職員のための福利厚生施設ができるといってもその保証はないではないか、という指摘があったが、実際にはこんなに立派なものが建った。指摘してくださった方々にもKCPの開館を一緒に喜んでほしいと思う」との感想がもたらされた。

次いで、長坂潤一施設部長から「工事概要報告」があり、その後、施工を担当した鹿島建設株式会社、設計を担当した株式会社類設計室には感謝状が贈呈された。

式典後、北館2階の音楽実習室において、スタインウェイのフルコンサートグランドピアノのお披露目があった。このピアノは、(株)松尾楽器商会のご厚意と本研究科の教員有志の尽力により設置がなされたものである。式典では、総合文化研究科のヘルマン・ゴチェフスキー助教授が、ベートーベンの『プロメテウスの創造物』の主題による15の変奏曲とフーガ』変ホ長調（エロイカ変奏曲）作品35より、テーマ・ラルゴ・フーガを演奏した。

式典参加者は、その後、KCP各館の内部を見学したが、和館を見た人々からは、「総長室もここに引っ越したい」との声もあがっていた。

KCPの各設備は、講義・実習などの教育、学生の課外活動、教科書販売等に活発に利用されており、新しくなった食堂や生協購買部・書籍部の評判も上々である。駒場キャンパスの東側には、旧来駒場にはなかった21世紀の大学らしい空間が出現したといっても過言ではない。また、スタインウェイグランドピアノを用いた企画はその後もしばしば行われている。

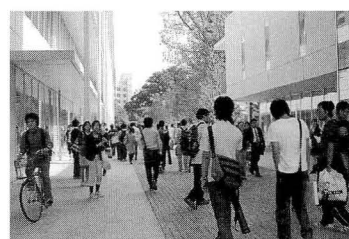
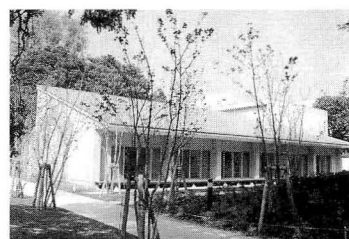
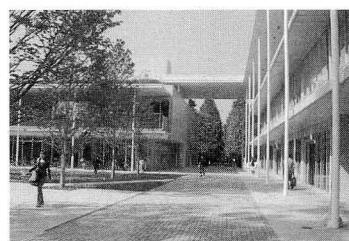
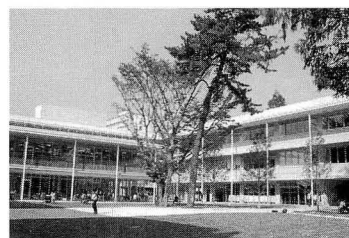
KCPの完成により、かつて学生の生活を支えた寮や寮食堂があった空間に、再び若い歓声が帰ってきた。駒場キャンパスの東側のこの場所には、KCP開館以来、夜遅くまで人通りが絶えることがない。今後も、華やかで開かれた駒場らしい空間として、機能し発展していくことが期待される。

2. 設備の概要

○北館

1階には生協の購買部と書籍部が置かれている。

2階には、伝統芸能・演劇・ダンス・パフォーマンスアートなどのワークショップやレクチャーデモンストレーションや課外活動に利用可能な舞台芸術室、楽器を用いた実習・課外活動の



ための音楽実習室、インターネット・視聴覚教材を活用した講義・デモンストレーション・国際シンポジウムなどのための多目的教室がある。

3階には、身体運動実習室があり、うち一室は、柔道・合気道・日本舞踊などに利用できる畳敷きの部屋である。また、身体運動実習準備室では、専門機器を利用した実習を行うことができる。

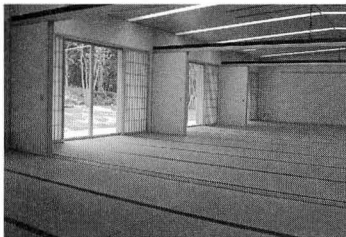


○南館

1階には、メインダイニングのCafeteria若葉（550席）、テイクアウトも可能なカフェ、イタリアン・トマト・カフェジュニア（127席）がある。

2階にはDining銀杏（500席）があり、昼食時間後は学生の交流の場として利用できる。パーティー等の会場としても適切である。

3階には交流ラウンジが設置されている。教職員を中心とした小グループの会合などに、下階から独立して利用できる。



○和館

16畳の和室が6つあり、少人数の集会、華道・茶道、親睦会・合宿などに利用できる。また、和室をすべてつなげて64畳の部屋として利用することや、二つをつなげて32畳の部屋とすることも可能である。

※これらの設備の利用に関する問い合わせ先は以下の通りである。

北館・和館事務室 受付

メールアドレス：komaba@com-pla.com

ウェブサイト：http://com-pla.com

電話：03-5465-8847（内線 48847）

ファクシミリ：03-3469-9054

3. スタインウェイグランドピアノを用いた平成18年度中の催し

10月25日 ピアノのお披露目 ヘルマン・ゴチェフスキー助教授の演奏

11月11日 ホームカミングデー ヘルマン・ゴチェフスキー助教授の演奏

12月11日 小山美稚恵氏による総合文化研究科・教養学部主催の演奏会

1月19日 高雄有希氏（本学学生）による演奏会。小林康夫教授による解説付き

3月 9日 オーディションを経た本学学生5組による演奏会

5 大学院総合文化研究科・教養学部研究外部評価

現在の大学の置かれている状況の中で大学の自治に基づく研究・教育の自由を担保するためには、大学の活動の様々な面にわたり不断の自己点検・評価を行い、その活動を社会的に認知してもらう作業が必要とされるようになってきている。実際、大学院総合文化研究科・教養学部でも、これまでに研究、教育の各方面に渡って多様な自己点検・評価の活動を行ってきた。2000年4月に第三者の評価機関として発足した大学評価・学位授与機構（以下機構と呼ぶ）による全学テーマ別評価「教養教育」の評価の準備段階として、2000年度には「前期課程教育授業外部評価」を化学関連科目、生命化学関連科目、基礎演習、心理・教育学関連科目、人文地理学関連科目などで実施した。これは、それぞれの科目に対し2名程度の外部の評価委員を委嘱し実施したものである。さらにこれらの結果に基づき、2002年度には大学評価・学位授与機構の「教養教育」の評価を受けた。また、2003年度には、大学院総合文化研究科・教養学部が分野別教育・研究評価「総合科学」の評価対象となり、機構による大規模な外部評価を受けた。これは、機構からのコメントを参考にしつつ185頁に及ぶ自己評価書を作成し、それに基づき13人の訪問調査担当委員による3日間に及ぶ訪問調査が行われる、という形式のものであった。評価結果は2003年度末に機構からの評価報告書として送付されてきた。幾つかの問題点の指摘があったものの、全般としては高い評価であった。

このような大学評価・学位授与機構による評価は、しかしながら外部の機関による評価項目、評価基準の設定による評価である。外部機関による評価は、数多くの大学の部局の中で、それぞれの部局が客観的にどのような位置にあるかを位置づけ、問題点を確認するという意義を持ち、それ自体不可欠なものであるが、一方、それだけで多様な大学の部局のあり方を評価しきれものではない。このような考えのもと、部局独自の評価基準によりつつも、外部の評価委員に評価を委嘱することにより客観性を担保した外部評価を実施する必要があるという結論が出された。自主的な外部評価の必要性は、機構による評価の終了直後から提起されていたが、機構による評価からある程度の時間を取ることにした。その結果、研究に関する外部評価を2006年度に、教育に関する外部評価を2007年度に実施するという方針を2005年度に決定し、研究科内の教育研究評価委員会を中心に準備を始めた。

2005年度には、研究評価の基礎資料として総合文化研究科・教養学部の全教員の業績リストを作成することとした。業績としてリストすべき項目とその形式について教育研究評価委員会で議論し、定められた様式の資料の提出を全教員に求めた。2003年度から2005年度までの3年分の業績を収集し、最終的に総ページ数412頁の「東京大学大学院総合文化研究科・教養学部研究外部評価基礎資料所属教員業績リスト」としてまとめた。

2006年度は、上記の所属教員業績リストのとりまとめと並行して、外部評価委員による評価の際の参考資料の収集と、参考資料の要約をまとめた全63頁の「研究外部評価基礎資料」の作成を行った。また、文系・理系、それぞれ2名ずつの外部評価委員を委嘱することを決定し、各専攻・系に委員候補の推薦を依頼した。最終的には、文系の外部評価委員として筑波大学人文社会科学研究科辻中豊教授、京都大学総合人間学部東郷雄二教授、および理系の外部評価委員として、理化学研究所中央研究所茅幸二所長、放送大学星元紀教授の4名に委嘱することとした。

上記の決定を受けて、外部評価委員による実地の訪問評価の日程を、理系は9月27日（水）、文系は10月6日（金）と決定した。8月中旬までに必要資料を各外部評価委員に送付し、事前の評価を依頼した。文系、理系のそれぞれの外部実地評価の当日の日程を以下に示す。

外部評価実地調査日程（文系）

日時：平成18年10月6日（金）午後1時より

場所：18号館4階コラボレーションルーム2

日程

13:00-15:50 主な研究成果の説明会

(18号館4階コラボレーションルーム2)

*出席者：外部評価委員（辻中豊、東郷雄二）、教育研究評価委員会（遠藤泰樹、坂原茂、櫻井英治、井坂理穂、高橋直樹）+専攻主任+研究説明者

[文系4専攻の紹介]

言語情報科学専攻	伊藤たかね
超域文化科学専攻	木村秀雄
地域文化研究専攻	柴宣弘
国際社会科学専攻	高橋直樹

[各専攻の特徴的研究の紹介]

言語情報科学専攻	クリスティン・ラマール
超域文化科学専攻	三角洋一
地域文化研究専攻	若林正文
国際社会科学専攻	丸山真人

[研究プロジェクトの紹介]

COE「共生のための国際哲学センター」(UTCP)	村田純一・信原幸弘
COE「心とことば」	伊藤たかね
アメリカ太平洋地域研究センター	能登路雅子
DESK（東京大学ドイツヨーロッパ研究センター）	森井裕一
ジェノサイド研究の展開	石田勇治
文学・芸術の社会的統合機能の研究	山田広昭

16:00-16:40 学内施設見学

*出席者：外部評価委員（辻中豊、東郷雄二）、教育研究評価委員会（遠藤泰樹、坂原茂、櫻井英治、井坂理穂、高橋直樹）+施設説明者

18号館サウンドラボ	広瀬友紀
18号館メディアラボ1	佐藤良明
アメリカ太平洋地域センター	能登路雅子

16:40-17:30 懇談会（18号館4階コラボレーションルーム2）

*出席者：外部評価委員（辻中豊、東郷雄二）、教育研究評価委員会（遠藤泰樹、坂原茂、櫻井英治、井坂理穂、高橋直樹）+専攻主任+研究説明者

17:30 終了

外部評価実地調査日程（理系）

日時：平成18年9月27日（水）午後1時より

場所：アドバンストラボラトリー4階大会議室（410号室）

日程

13:00 主な研究成果の説明会（アドバンストラボ会議室）

（出席は説明者、専攻・系主任、評価委員）

専攻主任挨拶（菅原 正）	5分
COE「心とことば」（長谷川寿一）	20分
COE「融合科学創成ステーション」（浅島 誠）	40分
複雑系生命システム研究センター（菅原 正）	10分
プロジェクト研究ERATO-SORST（黒田玲子）	10分
その他の代表的な研究の説明	
小宮山進（物性物理）	各12分
遠藤泰樹（物理化学）	
川戸 佳（生物物理）	

酒井邦嘉（脳科学）
豊島陽子（生物）
石井直方（身体運動学）

15:40 学内見学
16:30 懇談会（説明会出席者、専攻・系主任、評価委員）
17:30 終了

文系の実地評価は、質疑応答をすべて最後の懇談会のところでまとめて行うこととしたため、ほぼ予定の時間通り進行することができた。この点ではこの方式は成功であったが、途中で質疑応答を入れるべきであったとの反省も聞かれた。これに対し、理系の実地評価は、途中で質疑応答を入れながら進行了ため、活発な議論が可能であった反面、それぞれの説明時間が延びてしまい、予定していた学内見学の時間がとれず、また、最後の懇談会の時間も極めて短時間になってしまった。また、文系と異なり大型プロジェクトを中心に説明を依頼したため、多少分野に偏りができた点も反省点であった。

実地評価中の質疑応答を要約し、これを文書化したものを以下のような評価依頼項目とともに外部評価委員に送付し、評価報告書の提出を依頼した。

評価依頼項目

- ・総合文化研究科の特徴のある研究がなされているか。
- ・COE等の大型プロジェクトが所期の目的を達しているか、あるいは将来の展望を生み出しつつあるか。また、それ以外にも水準の高い研究がなされているか。
- ・異分野との交流を実現できているか。新しい可能性を見いだしているか。
- ・研究を支えるスペース、施設、あるいは外部との交流、サバティカル制度などを含め、研究環境は十分に整えられているか。
- ・研究環境に格差ができていないか、あるいはその対策はなされているか。
- ・研究成果が教育・社会に還元されているか。
- ・総合文化研究科の研究の将来について。
- ・その他
- ・総合的な判断

本稿執筆時点（1月中旬）では、外部評価委員からの評価報告書をもとに、冊子形式の評価報告書を取りまとめ中である。従って、評価委員からの評価結果を今後の総合文化研究科・教養学部の研究活動の推進や研究環境の整備に生かす作業はこれからである。現時点でも貴重な指摘が多々なされているという印象である。最終的に今回の外部評価についてその成否を判断するのは、もう少し先になるであろうが、外部の組織によって与えられた評価項目に基づく評価に対し、今回のような部局主導の評価が、どの程度部局の主体性を主張することができ、総合文化研究科・教養学部の特徴を生かした評価たり得たかが、今回の評価を検証する上でのキーポイントになるであろう。評価結果のみならず、今回の評価作業全体の検証を充分に行い、今後の評価の参考とする必要がある。

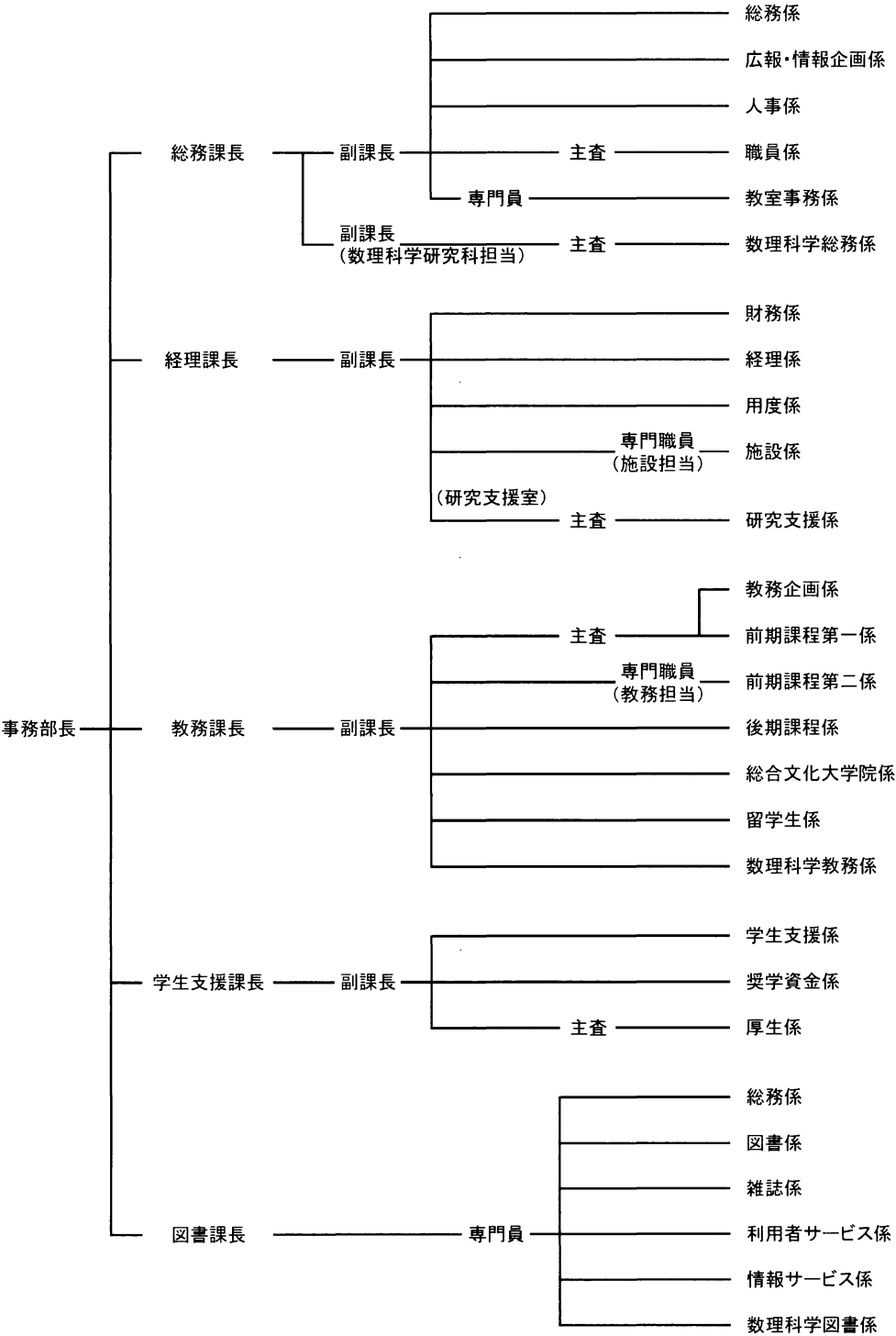
今年度の研究外部評価を受けて2007年度は、総合文化研究科・教養学部の教育の外部評価を予定している。本局は、前期課程、後期課程、大学院の3層に渡る教育活動を幅広く遂行している。また、新しい組織として教養教育開発機構が発足し、様々な活動を開始している。教育の外部評価は研究外部評価に比べ、さらに大規模なものになることが予想される。今回の経験を生かして、有意義な外部評価ができるべく、準備する必要がある。

（研究教育評価委員会委員長・広域科学専攻相関基礎科学系 遠藤泰樹）

6 事務組織の改革

2006年7月1日付けで教養学部等事務部の事務組織を下図のとおり改組した。

事務組織図



改組に当たっては、東京大学アクションプラン2005を受け、法人化後の事務組織及び事務職員のあり方等について、各課の意見聴取・検討会を重ね、グループ制の導入、室の設置等様々な議論があった。結果的には教務課については、新教務電算システムの試行期間であり、その後の後期課程係及び総合文化大学院係における全学的な事務電算化を控えていることを考慮し、今回は見送った。しかしながら法人化後の積極的な意気込み、業務の効率化、学生に対する支援の徹底等、事務機能として明確な方向を示すことが出来たのではないかと期待している。

今回の事務組織の改組は、①最小単位係（係長1、係員1）による弊害を解消するため、係の統合により、係内の協力体制の強化、組織の柔軟化及び幅広業務への対応を図る。②組織全体のコンパクト化、組織名称変更による積極的な業務体制の整備を図る。③責任体制の明確化（係間の業務のキャッチボールを阻止）を図る。の3点を主目的として、具体的には次のとおり改組した。

1. 総務課の庶務係を「総務係」に改めた。
2. 経理課の総務係と予算係を統合し「財務係」に改め、旅費・謝金係を「経理係」に改めた。
3. 学生課を「学生支援課」に改め、学生係と課外活動係を統合し「学生支援係」に改めた。
4. 図書課の受入係と整理係を統合・再編し「図書係」、「雑誌係」に改め、閲覧係を「利用者サービス係」に、参考係を「情報サービス係」にそれぞれ改めた。

事務部においては、職員数が毎年削減されており、職員の負担は一層厳しい状況になっている。このため、事務組織の改組は今回の改組に止まらず、さらなる事務処理体制の合理化を目指し、引続き、検討を重ねていかなければならない。

7 東アジア四大学フォーラム・ハノイ会議

「東アジア四大学フォーラム」は、東京大学、ソウル大学校、北京大学、ベトナム国家大学ハノイ校の4大学が、毎年、交互に持ち回りで主催校となり、大学教育、とりわけ教養教育のあり方を中心に共同討議を行う大学間会議である。北京・ソウル・東京・ハノイの英称にこの順でちなんで、BESETOHAとも呼ばれる。この会議が、2006年はベトナム国家大学ハノイ校の主催のもと、11月3日と4日の両日、ハノイ市内で開催された。今回の会議は、東京大学の主催により1999年に開かれた第1回会議から数えて8回目、すなわち第2ラウンドの最後の会議である。テーマは「文化的多様性と持続可能な開発—高等教育の果たす役割」であった。

この「四大学フォーラム」は、東アジアという、内部に文化的な差異を含み持ちながら、ある種の文化的共通性をも分有している地域の4大学が、その文化的な差異を相互に尊重する一方で共通の基盤を認識し合い、そのことを通じて4大学間の相互的な信頼関係を構築すること、ひいてはそれを東アジア地域内での広範な信頼関係の醸成へとつなげてゆくことを、その発足の当初から指針としている。このため会議も、日本語、韓国朝鮮語、中国語、ベトナム語の4言語で行い、各言語へ同時通訳を付けることを原則としてきた。

今回のハノイ会議に、東京大学からは小宮山宏総長、古田元夫副学長、木畑洋一教養学部長以下、およそ30名の教職員と2名の学生が参加した。上述のような「四大学フォーラム」の趣旨にのっとり、2日間の会期の1日目には、4大学の学長・総長、続いて各大学の代表者が、今回のテーマ設定にもとづいて演説・発表を行う全体会議が開催されたほか、文化的多様性と大学教育の役割に関するパネルセッションと、サステナビリティと大学教育の役割に関するパネルセッションの2つのセッションが開催された。2日目には、「東アジアの未来」をめぐる、4大学の学生間の意見交換を行う学生フォーラムが開催される一方で、4大学の教員が交互に模擬授業を行い、大学教育のあり方に関する認識を深めた。また、2日目の夜にはハノイ・オペラ座において4大学の学生の合唱祭が行われ（東京大学からはコールアカデミーが参加）、オペラ座管弦楽団の伴奏のもと、モーツァルトの『戴冠ミサ』を合同で演奏して、学生レベルでの4大学の連帯関係を強く印象づけた（「四大学フォーラム」における学生合唱祭は今回が3回目となる）。

今回のハノイ会議の成果を挙げるなら、次の2点に要約されるのではないだろうか。第一に、1日目の冒頭、4大学の学長・総長が討議を行う全体会議において「ハノイ宣言」が採択され、各学長・総長による調印式が行われたことである。この「ハノイ宣言」では、東アジア地域における文化的差異の相互的な尊重と文化的共通性の認識という「四大学フォーラム」の趣旨が再確認されるとともに、文化的な差異を除去すべき障害と見なすのではなく、むしろ差異を相互に理解し、相互に補完し合うことによって、東アジアにおける4大学間の共通文化を創造することが目標に掲げられている。また、東アジアを地域的な枠組として出発したこの「四大学フォーラム」が、今後はその協調関係の枠組を拡大し、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカの諸地域との交流も視野に入れて、開かれた正式のネットワークとして展開するよう、その具体的な方策を模索することが約された。

第二は、先述のように、「四大学フォーラム」の公式行事の一環として、4大学の学生同士が意見交換を行う学生フォーラムが開かれたことである。東京大学からは、教養学部後期課程地域文化研究学科と、同総合社会科学科からそれぞれ1名ずつ、計2名の学生が代表として参加した。ここでは英語を媒介言語として4大学の学生が討議を交わしたが、学生フォーラムは今回のハノイ会議においてはじめて実施された試みであり、学生交流を行うことへの学生自身の期待にも対応したものである。東アジアの未来を構想する上での文化的差異の理解の必要性や、経済的な協力関係の可能性など、各国・各学生の視点から問題提起と討論がなされたほか、このような学生交流を今後も維持し、発展させてゆくことについて活発な意見交換が行われた。未決であるがゆえに開かれている、そのような未来に対する学生の真摯な思いが会場を満ち、

濃密な時間の流れる意義深い会となった。

なお、「四大学フォーラム」の公式日程には含まれないが、この機会に合わせて、教養学部とベトナム国家大学ハノイ校付属人文社会科学大学とのあいだで、AIKOM協定更新の調印式が行われたこと、また、大学院総合文化研究科地域文化研究専攻の4名の教員と、ベトナム国家大学ハノイ校ベトナム研究・開発科学研究所の教員により、「地域研究—理論・実践・方法」と題する国際シンポジウムが行われたことを申し添えておく。

(森山 工)

8 駒場における教養教育開発の推進

○教養教育開発機構と「特色ある大学教育支援プログラム」

現代社会における教養教育には、学生の基礎学力の形成を促しつつ、それぞれの個性や能力、キャリア形成のニーズに対応する柔軟な教育プログラムが求められている。このような社会的要請に応えるためには、これまでの教育理念や教育方法にとらわれない斬新な教育のあり方を、社会に開かれた新しい観点から構想し、実現に移していく必要がある。

東京大学は、小宮山総長による『アクション・プラン2006』（2006年11月＝左図）の中で、最重点項目として「理想の教養教育の実現」をあげている。その中心を担うのが「教養教育開発機構」であり、そこでは「先端的研究と学部前期課程教育の創造的な連携」「本学の教養教育モデルの世界的発信」などの事業を具体化し、世界でも先端的と誇りうる多数の取組みを鋭意推進している。

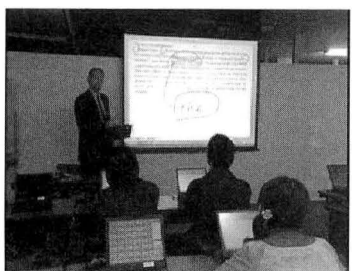
2006年度の主たる成果は、新しい学習指導要領で学んだ高校卒業者が同年春に入学することを想定して実施した前期課程カリキュラムの大規模な改革に見合う教材の開発である。以下の教科書を順次作成・編集・刊行し、全国に発信したことは他に類のない成果と言える。

On Campus (英語、東京大学出版会) / *Campus Wide* (英語、東京大学出版会) / *FIRST MOVES* (英語、東京大学出版会) / *Horizonte* (ドイツ語、CD付、東京大学出版会) / *Einführung in die deutsche Grammatik mit Übungen* (ドイツ語、CD付) / *Promenades* (フランス語、CD付、東京大学出版会) / *Dímelo* (スペイン語、CD付、朝日出版社) / 祭りを生きる (スペイン語、DVD教材) / 中国語読解2006 (中国語、CD付) / 史科学入門 (歴史、岩波書店) / 情報 (情報・図形、東京大学出版会) / 3D-CAD/CG入門 (情報・図形) / 生命科学 (生物、羊土社) / 基礎物理学実験 (物理、DVD付、学術図書出版社) / 基礎化学実験 (化学、DVD付、東京化学同人) / 基礎生命科学実験 (生物、DVD付、東京大学出版会) など。

この中でも特記されるべきは、教養学部の従来の「基礎実験」が今回、「基礎物理学実験」「基礎化学実験」「基礎生命科学実験」の3つに組み替えられ、それぞれに特色のある教科書が新たに作成され、その補助教材として3つのDVD (左図) が作成されたことである。それぞれの動画DVDは、実験に取り組む学生たちの興味を一層引き出し、学習効果が上がるように工夫されており、今後の学生実験の教育資源として広く活用されることが期待される。これについては、12月23日に全国の関係者が集うシンポジウム「大学1・2年次における自然科学実験の特色ある取組み」が開催され、多数の出席者が大学における学生実験の新しい方向性について議論を交わした (引き続き、シンポジウムの記録集を作成し、全国に配布する作業を現在進めている)。

他方、外国語を中心としたライティング・プログラム開発についても、2006年度は大いに進捗があった。駒場キャンパスの105号館2階に設置された新教室において、高度な英語ライティングのための授業が実施され、全学の注目を集めた (左図：ガリー先生による「全学自由研究ゼミナール」)。これは、履修学生すべてが最新のタブレットPCを利用することができる理想的なアクティブ・ラーニング環境の下で実施された授業であり、教育成果の高まりが期待される。これはパイロット授業であるので、今後、教材や教育手法、TAの養成などについてさらに研究を重ねていく。来年度 (2007年) には、海外のライティングセンターの視察や公開シンポジウムを開催する予定である。

本学の教育開発の特色は、文理を横断する豊富なコンテンツにまたがっていること、教育内容のみならず教育手法・FD (教員養成) や新しい教室のあり方 (デザイン) など教育モデルの開発も視野に収めていることがあげられる。さらに、今年度は学生の側の学習能力の向上を図る事業にも着手した。新入生を対象としたオリエンテーションビデオ『ようこそ駒場へ』(約20分) を作成するなど、いわゆる初年次教育の分野の拡充にも着手している。



○「教養教育への囲碁の活用」寄付研究部門の新設

2006年10月1日に、教養教育開発機構において寄付研究部門「教養教育への囲碁の活用」が新設された。寄付者は財団法人日本棋院と株式会社日能研で、期間は2006年10月1日から2009年9月30日までの3年間である。

この研究部門では、創造性、集中力、コミュニケーション能力等を高める教育的効果があると言われる囲碁を、教育ツール（手段）として利用し、教養教育に活用する方策を研究し、実践することを目的としている。具体的には次のような教育と研究を行う。

1. 教養学部 of 全学体験ゼミナールで囲碁入門講座「囲碁で養う考える力」(担当：兵頭俊夫教授)を開講し、初心者向けの教育プログラムを実施する。初心者が囲碁を学ぶ上で最も効果的な教授法を検討し、その成果を書籍などにより広く普及させることを目指す。
2. 特に、本研究で開発されたプログラムを初等・中等教育にも普及させ、囲碁の教育的効用を広く社会にむけて発信する。
3. 囲碁の教育効果を、脳科学的、心理学的測定によって検証する。
4. 囲碁の楽しみ、教育的効果、囲碁文化の歴史などについて、シンポジウムや展覧会を通して紹介する。
5. 中国や韓国など東アジア各国における囲碁教育プログラムと広く交流する。

この研究部門の活動を通じて、東京大学が目指す教養教育の一層の充実が期待できるとともに、我が国が誇る囲碁文化の継承とさらなる発展が可能になると考えられる。活動の一環として、2007年3月10日にプロ棋士らを招き公開講演会「囲碁の魅力－囲碁で養う考える力」を開催する(左図)。また同年7月からは駒場博物館において初心者向け教育プログラムを活用した展覧会「はじめて出会う囲碁の世界」を開催する予定である。



○「学術俯瞰講義」の開講

東京大学では新しい教育モデルの開拓を目的として、「学術俯瞰(ふかん)講義」を、2005年度冬学期から毎学期開講している。これは前期課程の授業であり、高度な専門的学問の基礎の学習と並んで、現代の先端的な「知」の新しい見取り図や構造を理解させることにより、奥深い学びへの動機づけを学生に与えることをめざしている。そのために、学術俯瞰講義は、それぞれの学問分野をリードする世界的に著名な本学教員数名が分担して開講し、1・2年生の学習に大きな刺激をもたらしている。

●夏学期「社会の形成－人間はいかに共生してきたか」(木曜5限/18号館ホールほか)

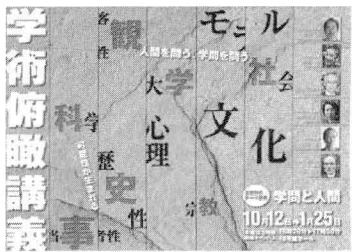
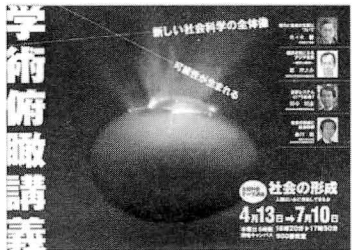
1. 「権力と自由の形態について」佐々木毅 (前東京大学総長)
2. 「経済を軸にみるアジア世界－歴史と現状」原洋之介 (元東洋文化研究所長)
3. 「世界システムという社会？」田中明彦 (情報学環教授)
4. 「社会の形成と社会科学」森田朗 (公共政策学連携研究部長)

●冬学期「生命の科学－構造と機能の調和」(月曜5限/18号館ホール)

1. 「発生生物学からみた生命科学」浅島誠 (総合文化研究科教授)
2. 「分子モーターから観た生命科学」廣川信隆 (医学系研究科長)
3. 「ウイルスからみた生命科学」野本明男 (医学系研究科教授)
4. 「ゲノムから見た生命科学」黒岩常祥 (理学系研究科名誉教授)

●冬学期「学問と人間」(木曜5限/18号館ホール)

1. 「人間を科学する」佐伯胖 (教育学系研究科名誉教授)
2. 「学問と宗教」島蘭進・末木文美士 (人文社会系研究科教授)
3. 「学問と当事者性」上野千鶴子 (人文社会系研究科教授)
4. 「学問と歴史」坂部恵 (人文社会系研究科名誉教授)
5. 「学問・モラルと希望」小林康夫 (総合文化研究科教授)



○大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）の採択

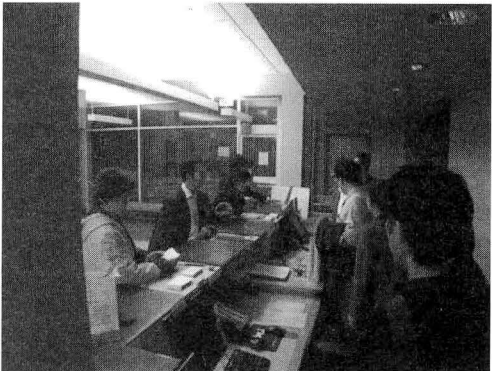
2006年7月、文部科学省の補助事業「大学教育の国際化プログラム：海外先進教育実践支援」に本学の「国際標準の学部初年次教育実現へ向けて」が採択された。

本取り組みの目的は、国際的な競争が激しくなる高等教育の世界で、日本の大学が国際標準を満たす（上回る）教育の質を実現することにある。「世界一の教育」を目指す東京大学が特色ある「教養学部」を拠点として、ハイエンドな学生の動機付け、次世代の国際的リーダー養成を目標として斬新な教育モデルを開発する。

海外の先進事例として注目したのが「学部初年次教育」である。日本の大学では立ち遅れているが、海外の一流大学は精力的に実施しており、新入生が大学とい

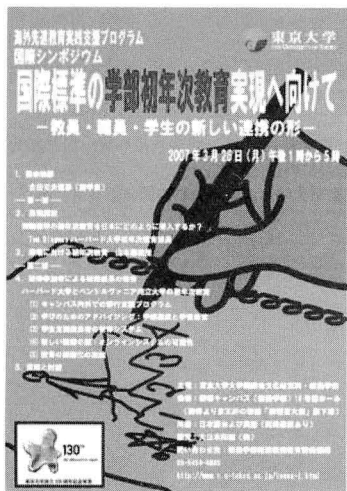
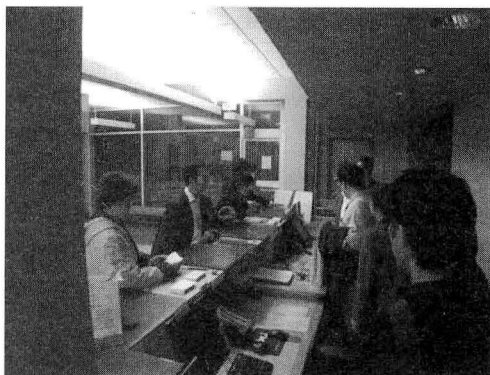
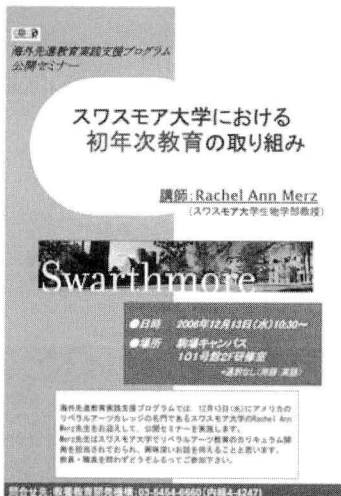
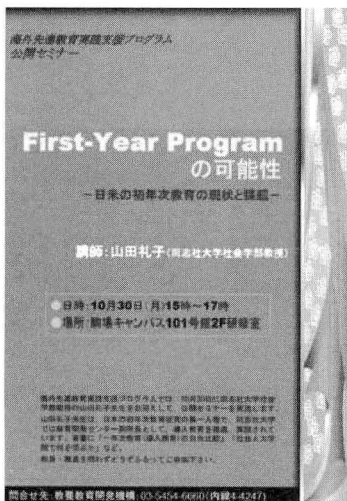
う新しい環境に積極的に適応し、学部4年間に高度な教育達成を実現するように導く1～2年次の包括的なプログラムであり、各大学では総長・学長の強力なリーダーシップの下にその拡充に力を入れている。東京大学教養学部こそが日本の学部初年次教育の最も洗練されたモデルであるが、ここにおける学部初年次教育を、学生支援態勢・教育内容・教育手法を含めて包括的に導入し、21世紀のモデルを提示する意義は大きい。

「国際標準の学部初年次教育実現へ向けて」の採択を受け、通称「みらいプロジェクト」が発足し、教員・職員連携の新しい枠組み（事業モデル）を模索しつつ、学習会と英語レッスンも開始された。10月、研修事前学習のためキャンパス内で連続セミナーを開催し、日本の「初年次教育」の第一人者である同志社大学山田礼子先生、国立教育政策研究所川島啓二氏、オレゴン州立大学サム・スターン教育学部長をお招きして、日本の最新事情や世界の先進的プログラムについての学習会を繰り返し行った。同年11月、教員・職員を中心とする12名の研修チームがハーバード大学とペンシルヴァニア州立大学を訪問し、本格的な研修が実施された。初年次教育において100年以上もの古い伝統のあるハーバード大学と、学生8



万人を抱えながらも高等教育研究の質において全米トップを誇るペンシルヴァニア州立大学はそれぞれに特色のある取組みを実施している。これらアメリカの先端事例においては、入学時のオリエンテーションプログラム、フレッシュマン・セミナー、ラーニング・コミュニティ（勉強仲間）の育成、ライティングセンター、宿舎を活用した学習指導体制の整備など、各大学の特色を意識した多彩なプログラムを展開しており、学ぶべき点が多い。総じて、人と人とのつながり、対面的コミュニケーションの役割を重視しており、教員だけでなく職員や学部学生も事業に幅広く携わっている点にも特色がある。今度ともこれらの特色ある取組みを精査し、東京大学の参考となる事例に絞ってそのノウハウを調査し、具体的な調査・研修活動を展開していく。

本プログラムの成果として、3月26日には、研修成果を公表し、日本での初年次教育のモデルについて討論する国際シンポジウムを開催する（左図）ほか、3月末から4月初頭にかけて学生・職員・教員一体型の新入生歓迎イベント「FRESH START@KOMABA」（講師：遠山敦子氏）、新入生歓迎特別講演会（講師：緒方貞子氏）を開催するなど、東京大学における初年次教育モデルの開発と実践を推進していく。



9 生命科学構造化センターの発足とその活動

生命科学構造化センターの発足

21世紀に入り、生命科学は多種多様な生物種のゲノム解読から爆発的成長を遂げ、さらに年々膨大な研究が行われ、大きな進歩をしている。また生命科学研究はゲノム創薬など医療や産業への影響も大きく、またES細胞やクローン技術など最新の展開は、我々の社会を支える生命倫理や生命哲学への影響も大きい。このため大学は膨大な最新の生命科学の研究によって得られた知識や情報を構造化して示し、基礎的素養としてわかりやすく教育する必要に迫られている。

生命科学構造化センターはこうした急速に展開する生命科学の知を構造化し、大学における教養としての生命科学を基礎におきつつ、専門課程への橋渡し、さらに社会への発信と啓蒙を行うことを目的として、2006年4月に発足した。

生命科学構造化センターの活動

生命科学構造化センターの主な活動として、急速に進展しつつある生命科学知識を構造化し、大学における教養としての生命科学と専門家育成の基礎となるような生命科学の教科書を作成し、教育内容を明確にしていくことが挙げられる。すなわち、世界の生命科学の動向を把握し、変わりつつある生命科学教育のあり方について世界をリードしていくことが生命科学構造化センターの主要な目的の一つなのである。

本年度の活動としては、東京大学の教養学部学生に向けた生命科学教科書の作成が挙げられる。東京大学教養学部理科I類、主として工学系の学生向けの教科書「生命科学」（こちらは既に出版されている）、及び文科系向け教科書を作成している。これらの教科書は大学における教養として、また社会のニーズに応えるための基本知識が身に付くことを目指している。

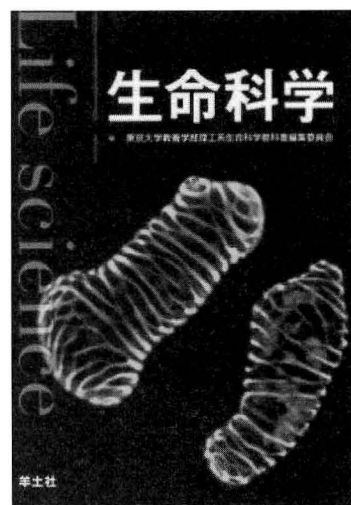
また、教養学部の理科II・III類、主として生命系の学生向けの通年科目である「生命科学」のための教科書「理系総合のための生命科学」を作成した。この教科書は24章からなり、理科II・III類の将来生命科学を専門とする学生が1年生の間に学ぶべき内容を網羅している。

これらの教科書は、東京大学のみならず、全国の教育機関で広く用いられていくことを想定している。

さらに、最先端の生命科学知識を構造化し、世界の新しいスタンダードとなる、専門家育成の基礎となる教科書の作成を目指している。

これ以外に、学内にある様々な生命科学系のプログラムと協力し、学内で行われる講義やシンポジウムを収録し、そのとき用いられたプレゼンテーション資料とともにデジタルアーカイブ化する事業を支援し、多様化・複雑化する生命科学の知識を構造化していくという活動も行っている。

(センター長 浅島 誠)



教養学部理科I類向け教科書「生命科学」
(東京大学教養学部理工系生命科学教科書編集委員会/編)



教養学部理科II・III類向け教科書「理系総合のための生命科学」
(東京大学生命科学教科書編集委員会/編)

10 CPAS

アメリカ太平洋地域研究センターの活動

アメリカ太平洋地域研究センターは北アメリカとオセアニアを中心とする太平洋地域の研究を推進するとともに、関連図書の収集・公開をその主たる活動としている。研究内容や成果を社会に広く発信することはセンターの重要な使命であるが、2006年度はこの点で大きな進展が見られた。

まずは昨年度に実施した初めての外部評価に関して、報告書を取りまとめ、刊行にいたった。評価委員会は大学附属のアメリカ研究センターの代表者、国際交流の実務家、日米教育委員会および豪日交流基金の代表者からなり、当センターの研究実績と戦略、学術交流のあり方などについて積極的な評価と示唆に富む助言を受けることができた。報告書は冊子による配布のほか、センターのホームページでも全文公開されている。

さらに10月に行なわれた駒場の文系外部評価の実地調査においても、当センターの研究活動を紹介する機会があり、併せてセンター施設を視察していただいた。外部評価は自己点検のための貴重な契機でもあり、センターが従来の国民国家の枠を超えた「太平洋世界」という対象地域を設定したことで何が解明できるかという問題意識を新たにすると結果となった。

日頃の研究成果を発信する最重要イベントとして、今年度は9月30日に「日米関係のコンテクスト」と題する公開シンポジウムを開催した。主要新聞でも事前に報道され、研究者、学生、一般市民を含めて約200名の参加を得た。テーマは日米というバイラテラルな関係を扱っているように見えて、実はその関係を外交、安全保障、経済など多様な角度から、そしてアジア太平洋のコンテクストから論じて、従来は見えてこなかった相貌を浮き彫りにするという内容であった。小寺彰センター教授が司会役をつとめ、パネリストとして青山学院大の山本吉宣氏、拓殖大の森本敏氏、在日米国商工会議所会頭のチャールズ・レイク氏、本学法学政治学研究科の久保文明氏に加え、韓国国民大学校の李元徳氏、当センター助教授の岡山裕氏がコメントを行なった。

今回で13回目を迎えた公開シンポジウムであったが、すでに常連の参加者も多く、質疑応答やアンケートにも熱心な反応が寄せられた。4時間近い長丁場であったが、水準が高い発表、具体的な提言が評価され、各報告をもっと長くして欲しいといった要望も多く寄せられた。今後のテーマについても、「イラク戦争」「一国主義の歴史的系譜」「日米関係から見た中国」「日・米・加・豪の間の文化理解と誤解」などさまざまな提案をいただいた。

公開シンポジウムと同日の午前には、やはり当センター主催の専門家会議“US Cultural Diplomacy in Asia: Strategy and Practice”が開催された。これは能登路雅子センター長が代表者をつとめる科研・基盤研究A「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」の成果報告会であり、津田塾大の藤田文子氏、ブラウン大のスーザン・スマリアン氏、コロラド大のトーマス・ザイラー氏がそれぞれアメリカ文化外交の地域的展開、占領期のハリウッド映画の影響、野球を通じたグローバル文化戦略など、政治・文化・経済の接点をめぐる問題性を論じ、多方面の専門家や外交実務家を交えたディスカッションも刺激的であった。この日の公開シンポジウムと専門家会議の内容は今年度末発行の『アメリカ太平洋地域研究』に掲載される。

2006年7月に開催したユウジ・イチオカ教授追悼シンポジウム「ユウジ・イチオカと移民研究」も特筆すべき活動であった。日系アメリカ人史研究者としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で長年教鞭をとり、1999年には駒場の地域文化研究専攻客員教授をつとめたイチオカ氏は2002年に逝去されたが、その遺稿集の公刊を機にイチオカ氏の太平洋を架橋する研究活動を再検討することが企画の主眼であった。UCLA関係者をはじめとするアメリカからの参加者も交えて全国の大学から100名近い研究者や院生が参集して新しい形態の日米コラボレーションが実現したことは、当センターの歴史にとっても画期的出来事であったといえる。

国際的な研究拠点として、センターは2000年度よりオーストラリア研究客員教授制度のもと

で多彩な研究者を迎えている。今年度はヴィクトリア工科大のレスリー・テリー教授が5月16日にオーストラリアの多文化主義に関するセミナーを担当し、ラトロブ大のデイヴィッド・デイ教授が12月13日にオーストラリアを例に異なる集団の収奪のプロセスとして世界史を見直すという斬新な内容のセミナーを行なった。

今年度はオーストラリア研究の充実化をはじめ、アジア系アメリカ人研究をめぐる学術交流、ハワイの世界史的意義を論じた5月のコロンビア大教授ゲイリー・オキヒロ氏のセミナー、アメリカ占領期のフィリピンにおける人種戦争を扱った6月のジョンズ・ホプキンス大準教授のポール・クレマー氏セミナーなど、アメリカを広い地域的文脈から相対化するという当センターの試みが多様な展開を見せた。これらの実績とネットワークを今後の研究活動にさらに生かすことがアメリカ太平洋地域研究センターのこれからの課題である。

当センターの活動の原動力となる駒場内外からの支援、特にアメリカ研究振興会、また今年度到大規模な図書寄贈を賜った東京アメリカン・センター、カナダ大使館、豪日交流基金のご協力に深く感謝する次第である。

(アメリカ太平洋地域研究センター長 能登路雅子)

11 東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ(EALAI)の活動

リベラルアーツの理念を東アジアの諸大学と分かち合い、東アジアに共通の教養教育の展開を目指して東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ(EALAI)は、教養学部がその運営を担うプロジェクトとして、2005年10月に発足した。その活動が本格化した2006年は、本プロジェクトの基礎となる東アジア四大学フォーラムを始めとして、リベラルアーツの東アジアへの発信と着信を軸に、次のような活動が展開された。

(1) 東アジア四大学フォーラムへの参加

1999年に始まる東アジア四大学フォーラムは、東アジアの主要な大学間で共通の教養教育を展開することを、ひとつの課題として検討を重ねてきた。2006年の東アジア四大学フォーラムは、11月3-5日にベトナム国家大学創立100周年を記念してハノイで開催され、学長基調講演、「文化の多様性と大学教育の役割」と「大学教育の役割とサステナビリティ」の二つのセッションに加え、四大学の各教員による模擬授業、四大学の学生によるフォーラム「アジアの未来」および合唱祭が行われた。同フォーラムの詳細な報告は、その項を参照されたい。EALAIは、ハノイでのフォーラム開催に合わせて、分科会の設定や模擬授業の企画等の実務を担当し、『教養のためのブックガイド』(小林康夫・山本泰編、東京大学出版会)のベトナム語版をベトナム国家大学から刊行した。2007年の東アジア四大学フォーラムは11月に本学で開催される予定である。

(2) 教養教育の東アジアへの発信

リベラルアーツの東アジアへの発信として、EALAIは中国での重点展開を目指している。とりわけ南京大学においては、2004年に開設された東京大学リベラルアーツ南京交流センターを通じて、リベラルアーツ関連学科の新設を支援している。2006年3月には東京大学教員数名によるリレー形式の表象文化論の集中講義が行われた。この集中講義は、2007年3月に「東京大学リベラルアーツ・プログラム」の一環として、その第二回目が南京大学の単位認定の正式科目の形で実施され、同時に、本学の派遣教員による南京大学の大学院生向けの講演会も開催される。

リベラルアーツに関する教育交流は、2006年4月に中国・アモイ大学、5月にベトナム国家大学ハノイ校、11月に香港中文大学で、それぞれ本学教員を派遣する形で実施され、今後の教育交流の発展に向けて、意見交換を行った。

(3) 教養教育の東アジアからの着信

東アジアの連携校からの受け入れ教員を軸に、前期課程学生の国際的なキャリアの育成等を目指して、テーマ講義を夏・冬各学期に二つずつ開講した。まず夏学期は、本学のアジア研究者の学内ネットワークであるASNETとの共催で、「アジアから考える世界史」(担当教員：羽田正)と、山形国際ドキュメンタリー映画祭の協力を得て「東アジアのドキュメンタリー映画——個人映像から見える社会」(担当教員：刈間文俊)を開講した。冬学期には、科研特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」との共催で「海の東アジア——海域交流から見た日本」(担当教員：小島毅・齋藤希史)と2005年度に続けて「東アジアの公論形成Ⅱ」(担当教員：三谷博)を開講した。東アジアの連携校からの受け入れ教員に加えて、学内の教員ネットワークや先端的な研究組織さらには学外の諸機関との連携によって、従来にはない新しい視点による講義を開催することができた。多くの熱心な受講生

の参加を得て、4つのテーマ講義は盛況であった。各講義の概況及び学生の反響は、講義の進行に合わせてホームページに掲載された。

また、海外の連携校からゲストを迎えて講演会等の活動を実施した。2006年7月には教養教育開発機構と協賛の形で、ソウル大学校国際大学院の教員・学生を迎えて「日韓合同セミナー」を実施し、11月には南京大学国際関係研究院院長の朱瀛泉（Zhu Yingquan）教授による講演「Economic Globalization and International Relations」、また上記のテーマ講義「海の東アジア——海域交流から見た日本」に関連して、寧波市文物考古研究所所長の林士民氏による講演「宋代明州と日本平泉の友好往来」を開催した。

今年度の大きな作業として、2006年12月にはアメリカ・スウォスモア大学よりRachel Ann Merz教授を招いて、EALAIの事業に対する中間評価を実施した。これは、東アジアとの交流事業に対して、リベラルアーツ教育に豊かな経験を持つ同大学から助言を得ることで、より効果的な事業の実施を目指すものである。同教授からは肯定的な評価を得るとともに、交流範囲の拡大や授業の実施方法等、多くの具体的な提言をいただいた。次年度以降のプロジェクトの実施のなかで、大いに参考とし、よりいっそう事業の改善を図っていくこととなろう。

なお、EALAIの活動の詳細は、ホームページ（<http://www.ealai.c.u-tokyo.ac.jp/>）に随時紹介されており、これを参照されたい。

（EALAI執行委員長 刈間文俊）

12 ドイツ・ヨーロッパ研究センターの活動

2006年10月に総合文化研究科とドイツ学術交流会（DAAD）の間で、ドイツ・ヨーロッパ研究センターの助成に関する合意文書が調印された。ドイツは、世界各国との今後の関係をにらみ、将来的に政治、経済、文化、学術などの諸分野で活躍することが期待される学生に現代のドイツとヨーロッパについての最新の知識と知的トレーニングを重点的に提供するために、各国の拠点大学にドイツ・ヨーロッパ研究センターを設置し、DAADを通じてその財政支援を行っている。東京大学がこの支援プログラムによるアジア初の拠点大学に選ばれ、ドイツ・ヨーロッパに関する研究・教育活動のための組織が駒場キャンパスに作られたのは2000年10月であった。当初、寄付講座「ドイツ・ヨーロッパ研究」を核として発足した「DESK（ドイツ・ヨーロッパ研究室）」の活動を発展的に継承したのがドイツ・ヨーロッパ研究センターであり、合意文書は日独間のこの協力関係を一層発展させることを改めて確認するものであった。

DAADによる支援プログラムの主旨でもあるように、ドイツ・ヨーロッパ研究センターは学生に対する教育活動を重視している。例年、夏学期にはヨーロッパ研究の最先端の研究成果を紹介するテーマ講義（前期課程）を企画してきた。また、ヨーロッパを研究対象とする個々の学生に対しては、論文執筆のためにヨーロッパ各地で調査研究を行う際に奨学助成金を供与している。また、とくに2006年度からは大学院修士課程で「欧州研究プログラム（ESP）」という新しい履修プログラムが開始された。ESPでは、現代ヨーロッパに関する学際的な研究手法を身につける必修科目、現代ヨーロッパについての基礎知識を習得する選択必修科目、応用的な知識とより深い洞察力を獲得する展開科目を中核とした学修プログラムが組まれている。ESPに所属する学生は、修士論文作成のための現地調査、EU機関や企業におけるインターンシップ等をヨーロッパで行うことが奨励されており、その際、センターの奨学助成金制度を優先的に利用できる。

さらに2007年秋には、ASKOヨーロッパ財団の協力により、欧州統合に関心をもつ学生を対象としてEUの法、政治、経済、文化に関するセミナーをヨーロッパで開催し、EU諸機関の見学や関係者へのインタビューなどをあわせて行う予定である。同じく2007年秋にはドイツのマールティン・ルター・ハレ・ヴィッテンベルク大学（ハレ大学）でもドイツ現代史、現代政治、現代社会に関する学生セミナーを共催する。総合文化研究科は2006年7月にハレ大学との間で学術交流協定を締結した。ドイツ・ヨーロッパ研究センターとハレ大学は、すでに2003年、2005年の2度にわたってドイツ現代史に関する短期学生セミナーを共催してきたが、学術交流協定の締結を受け、今後、その協力関係を一層強めることができるものと考えられる。

そのほかにもセンターは様々な講演会、シンポジウムを主催しており、2006年度も、ドイツ連邦共和国A・シャヴァーン教育研究大臣、M・ライテラー駐日欧州委員会代表部公使らを迎えて講演会を開催したほか、J・オスターハンメル教授（コンスタンツ大学）、M・テロ教授（ブリュッセル自由大学）、H・ヴォルマン教授（フンボルト大学）など、各国のヨーロッパ研究者による学術講演会も行った。とくにヴォルマン教授は、アジア第二のDAADセンターとして北京大学に設置された「ドイツ研究センター（ZDS）」の客員教授を務めている。このような交流をはじめとして、国内外のヨーロッパ研究機関との学術協力を今後も発展させていきたい。

研究面では、現在、二つの研究プロジェクトを中心に研究が進められている。第一は、EUとその構成国がアメリカ、日本、国連などとの関連でどのようなグローバルな秩序形成をめざして具体的な各政策分野で行動しているかを明らかにする「EUとグローバルガバナンス」、第二は、第二次世界大戦後のヨーロッパにおける地域和解とドイツの信頼回復を促した要因ならびにその進展のプロセスを歴史的に検証する「欧州和解—対立から協調へ」である。これらの研究プロジェクトの成果は、Hoon Jaung and Yuichi Morii (eds.), *Cooperation Experiences in Europe and Asia* (Tokyo 2004)、森井裕一編『国際関係の中の拡大EU』（信山社2005）、木畑洋一編『ヨ

ヨーロッパ統合と国際関係』(日本経済評論社2005)、廣田功編『現代ヨーロッパの社会経済政策』
(日本経済評論社2006) などとして刊行されている。

(ドイツ・ヨーロッパ研究センター 川喜田敦子)

13 21世紀COEプログラム

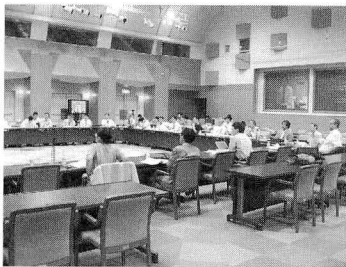
共生のための国際哲学交流センター(UTCP)

総括の一年

2006年度は、世界の哲学の第三極の形成を目指す「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP) のプログラム最終年度であり、四年半を総括する事業展開となった。UTCPの従来の事業の各分野に於いて、これまでのまとめとなる活動が展開された。

海外からの研究者を招聘してのシンポジウム、セミナー等の開催は、UTCPの基幹的な活動であった。とりわけ、国際シンポジウムは、その中核を成すもので、2002年度には開設シンポジウム「哲学を変えるのか、哲学が変わるのか」が、2003年度には、ヒラリー・パットナムらを招聘しての「21世紀におけるプラグマティズムと技術の哲学」シンポジウムや「バルト・共感覚の地平」シンポジウム等が、2005年度には、「認知言語学の哲学的基礎」(「心とことば」COEと共催)、「共生のための技術哲学」、「東アジアにおける法・歴史・暴力」、「天草プレアニズムと近代の超克」のそれぞれをテーマとするシンポジウムが開催された。これらのシンポジウムは、いずれも、大きな成果をあげてきた。

その集大成とも言えるのが、2006年9月の第二回東アジア現象学会議の開催である。二年に一度開催される東アジア諸国の現象学者を中心とするこの国際会議を日本現象学会と共催したが、実質的にはUTCPが単独で運営を行った。日本、中国、台湾、韓国の東アジア諸国のみならず、アメリカ、オーストラリア、ドイツからの招聘者を含めて今までで最大の約30名の講演者による発表及びその他の出席者を交えての活発な議論がなされた。この会議は、東アジア諸国の研究者とのネットワークの確立に多大な貢献を為し、且つ世界的な規模での現象学研究者の交流に大きく寄与した。この会議の開催については、一年前からUTCPの第一、第二部門(それぞれ「自然との和解」、「新しい認知パラダイム」をテーマとする)を中心に周到な準備を進めており、開催期間中は、事業推進担当者と若手研究者とが一丸となって、問題なく四日間の会議を終えた。国内でのシンポジウムとしては、他には、2007年1月に開催された東アジア女性哲学ネットワーク会議等があった。



東アジア現象学会議



「こころ」シンポジウム

シンポジウムのような大規模行事に加えて、UTCPの国際交流の地道な中心となってきたのが、連続講演会／セミナーや単発の講演会である。2002年度のヒューバート・ドレイファス連続講演会、2003年度のアンヌ・マリー・クリスタン連続講演会、クロード・ジフレ連続講演会、2004年度のチャールズ・テイラー、ヒューバート・ドレイファスを招聘してのセミナー・講演会、李泰鎮連続講演会、2005年度のジョン・マクダウェル連続講演会、アラン・プロサ連続講演会等々、数え切れない程の講演会が開かれ、充実した議論が交わされてきた。2006年度には、連続講演会としては、ベルナル・フォール連続講演会(仏教学)、アルバ・ノエ連続講演会(知覚の哲学)、金山椿連続講演会(天使論)、トーマス・メッツィンガー連続講演会(脳科学・意識の哲学)等が開かれた。そして、ブルーノ・クレマン、アンヌ・マリー・クリスタン、ミハイル・イアンボルスキー、崔賢徳等を招聘しての、様々な単発の講演会も開催された。さらに、2007年3月には、UTCPの活動を総括する意味で、マイケル・フリードマンその他の何人かの哲学者を海外から招聘して講演会を実施する予定である。

国外での、他大学・学術団体との研究交流・提携も又、UTCPの国際交流の一つの柱であった。2004年度のヴァンクーバーでの技術哲学についてのワークショップを皮切りに、海外での交流・提携はさかんに行われ、2005年度には、北京大学での「科学と文化」ワークショップやパリ第七大学での「文字とイメージ」ワークショップが行われた。この海外提携の総括とも言うべきものが、日独センターとの共催でベルリンで2006年11月に開催された国際シンポジウム:「こころ」であった。ここでは、「こころ」の概念についてのUTCPを中心とした日本側の発表者と、米、独、仏の発表者との間で充実した議論が交わされた。他には、ウィーン、ブラ

ハ両大学での宗教哲学についてのシンポジウムが第五部門により2006年6月に開催され、ニューヨーク大学で第三、四部門中心の芸術哲学関連のワークショップが2007年1月に開催された。

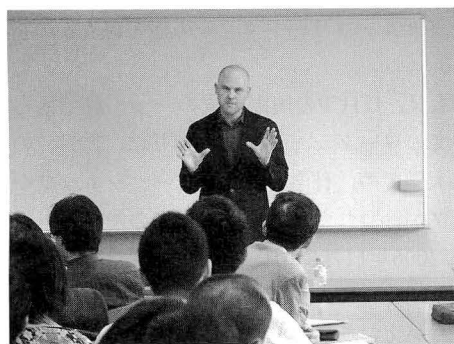
UTCPは、哲学に於ける国際的な交流を推進すると共に、大学院以上のレベルでの哲学教育活動をも積極的に展開してきており、2004年度以降は若手研究者による研究会がいくつか組織され、自発的な研究活動が行われてきた。本年度は、「科学における言葉の運用」、「神経倫理」、「言葉とイメージ」、「政治哲学」、「東アジアにおける複数の近代」をテーマとする若手研究者の研究会が組織され、活発な活動が展開された。

若手研究者の活動の成果発表としてのワークショップ、シンポジウムも例年いくつか開催されてきた。本年度では、UTCPが確立した海外との提携関係を利用してそれを拡大するような形で、若手研究者のワークショップも開催された。2006年11月にパリで、従来からUTCPと研究交流があったフランスの国際哲学コレージュと、若手研究者を中心とする「哲学と教育」フォーラムを共催した。UTCPからは第三部門の若手研究者が参加し、フランス、イギリスの若手研究者と共に充実した議論を交わした。又、2007年2月には、韓国でソウル大学の大学院生、若手研究者とUTCPを中心とする東京大学の大学院生、若手研究者との交流ワークショップも開かれる。他方、国内では、「科学における言葉の運用」研究会が、外部団体のSTS Network Japanと共同して、「科学的知識の伝達・理解・発見」についてのシンポジウムを2006年12月に開催した。

さて、UTCPの研究活動と教育活動とが連携して、相乗効果が見られることもあり、例えば2005年度での「認知言語学の哲学的基礎」シンポジウムと若手研究者による「科学に於けるメタファーとエンボディメント」ワークショップとが挙げられる。今年度には、第二部門の事業推進担当者と若手研究者とが中心となって、神経倫理プロジェクトを、従来の若手研究者による研究会の枠を越えて展開した。このプロジェクトでは、まだ誕生して間もない分野である神経倫理の研究を包括的に行ったが、国内の他の学術組織の神経倫理研究者たちとの研究交流や海外からの神経科学の哲学者を招いての非常に充実したセミナーも行われた。最終的には神経倫理の教科書の執筆を目標としたが、さしあたって今年度の研究成果をUTCP研究論集の神経倫理特集号に反映させた。

UTCPの活動の結果を反映するものとして、*UTCP Bulletin*及びUTCP研究論集が毎年発行されてきた。前者は、欧文その他の外国語の論集であり、後者は、(多くは若手による投稿が中心の)日本語の論集である。最終年度の2006年度には、かつてない程多数の*Bulletin*及び論集が刊行される。*UTCP Bulletin*は、Vol.VII-Xが、UTCP研究論集は、第8-10巻が刊行される。

UTCPの出版活動は、他にも単行本やUTCP叢書シリーズがある。昨年刊行された第一巻『哲学とは何か』に続いて、UTCP叢書第二巻として、『共生のための技術哲学—「ユニバーサルデザイン」という思想』が、2006年度には出版された。同書は、2006年3月開催の国際シンポジウム「共生のための技術哲学」での諸講演に由来するものである。これらに加えて、何人かの事業推進担当者の成果論集(外国語論文集)も編纂中である。



14 21世紀COE 融合科学創成ステーション 平成18年度(最終年度)報告

I. はじめに

この百年の間に見られる自然科学の発展は著しく、その進歩は単に研究者のみならず、一般社会の人々にも大きな影響を与えてきた。その中で、自然科学は数学、物理化学、生物へと細分化され、それぞれが、大きな学問領域を形成するまでになった。しかし一方で、学問があまりに細分化したため、一つの専門分野では解明できない課題が浮かび上がってきている。その一つに、生命とは何かという問いがある。東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻では、かねてから、生命システムの本質を自然科学の各分野を融合することで解明しようという気運が盛り上がっていた。このような研究の流れを飛躍的に推進させるべく、平成14年度～18年度に文部科学省・日本学術振興会による21世紀COEプログラムの助成を受け、新しい研究拠点『融合科学創成ステーション』が形成された。平成18年度はこのプログラムの最終年度であり、ここで全体をまとめて報告しておきたい。

自然科学において、17世紀～20世紀に発展した還元主義は、物質に係わる現象を対象とする物理学や化学においては大変有効であり、分子、原子、さらには素粒子の発見へとつながった。これらの粒子の振る舞いを詳しく調べることで、自然界の深い理解がもたらされたのは、周知の事実である。

では、生命システムの振る舞いも、還元主義で解き明かされるだろうか？——答えは否である。社会から個体へ、細胞へ、さらには細胞内小器官へ、生体高分子へと細かく要素を分けていっても、「生命とは何か？」という問いに答えることは出来ないだろう。むしろ、要素間の関係に注目し、複数の要素を統合することで、上位の階層が示す「生命らしさ」を理解する手がかりが得られるのではないか。例えば、膜分子の自己組織化を利用して中空の袋状の会合体（膜胞：ベシクル）を創り出し、その膜胞が自己複製するのを目の当たりにする瞬間、そこに「生命らしさ」が浮かび上がってくる。もう一つ例を挙げよう。レーザーと光ピンセットを使ったマイクロファブリケーション技術により1細胞培養系の観測が可能となった。そこでは心臓細胞が個々に自ら末端を伸ばして連結し、ネットワークができ上がっている。繋がったすべての細胞の拍動が同調した瞬間、細胞集団から組織という上位の階層へと、階層を貫く原理が働いていることを実感できる。このように、下位の要素を組み合わせることで、上位の階層で「生命らしさ」を創発（エマージェンス）させるアプローチを、全体論（holism）という。——まさに、要素還元主義に対する正反対の思考である。

私たちの21世紀COEプログラム『融合科学創成ステーション』では、数理・物理・化学・生物学といった自然科学の諸分野を連携・融合し、「創って、測って、モデルで理解する」という方法論を駆使することで、生命の謎に迫ってきた。融合科学は新しい科学であり、21世紀に相応しい挑戦的な学問である。ここでは、『融合科学創成ステーション』の5年間の成果の全貌を報告したい。

II. 「融合科学創成ステーション」の全体成果

基本的な自己複製モデルを創ることで、細胞のダイナミズムの理解が深まり、さらに、卵から個体への形態形成過程について、大きな成果が得られた。また、新しい分析手段を用いることで、細胞内、細胞間の情報伝達や細胞内共生の仕組みが解明され、ミクロからマクロへと階層を縦断する多くの研究成果により、生命システムの理解大きく前進した。

- (1) まず、膜分子が自己組織化し袋状の会合体であるベシクルを形成し、さらに内部の反応場で膜分子を生産し複製能を獲得することで人工複製系が誕生した。またベシクル内でDNA

- の相補的複製も起こることがわかった（菅原）。
- (2) それを受けて、DNAコンピュータを構築する研究が行われた。その結果、細胞内部の情報処理の仕組みを抽出して作られたDNAコンピュータが、翻って細胞の機能を構成的に理解する上で重要なことが示された（陶山）。
 - (3) さらに、その細胞の中身を一部取り替えたり除去したりするセミインタクト細胞の技術によって、細胞周期に依存して大きく変化するゴルジ体や小胞体などのオルガネラ形態やオルガネラ間のタンパク質輸送の制御機構（これは、細胞内の情報伝達制御の仕組みそのもの）の本質が、初めて明らかになった（村田）。
 - (4) また新しい技術（マイクロファブリケーション）として、1細胞培養系をオンチップ・セミマイクロ計測で測定を行うことで、細胞の機能が詳細に解明され、数理モデルの基盤がつけられた（安田、平成17年度末に他大学へ転出）。
 - (5) それを受けて、1個の細胞の機能とその細胞集合のネットワークの分析が進展した。細胞の構成と細胞間のコミュニケーションの様相が分かってきたので、細胞から器官、そして個体へと攻め上がることができるようになった。1つの受精卵の情報発現から個体が出来上がるまでのボディ・プランの研究を通じて、たった2、3種類のシグナル分子（アクチビン、レチノレイン酸など）の濃度勾配により、個々の器官の形態形成を作り分けられることがわかった（浅島）。
 - (6) さらに個体間の共生の研究も行なわれた。細胞の内部に異種の細菌が生息している細胞内共生の研究を契機として、自然界での共生細菌の寄生から相利共生へと関係性が逆転する様相が実験的に検証され、これをもとに細胞内代謝系に立脚した数理モデルで解析することができた（嶋田）。
 - (7) このような実験系の成果に伴い、生命システムを包括的に捉えることができる複雑系の理論的研究も大きく進展した。例えば、進化の筋書きとして、細胞集団の中で、サイズや内容物の量に関してゆらぎが発生しつつも安定な複製が行なわれている内に、揺らぎの大きい細胞や個体の存在が、進化に結びつくという数理モデルが完成した（金子）。

また、脳の高次機能と認知科学においても、「創って、測って、モデルで理解する」という融合科学創成ステーションがスローガンとして掲げた方法論の有効性が発揮され、ユニークな成果が得られた。

- (8) 脳におけるアルツハイマー病の発症機構を分子レベルで明らかにすると共に、植物にそのワクチンを合成させ、動物実験で実際に発症を防げることが確かめられた。将来ワクチン入りの野菜を食べることで、アルツハイマー病が予防できるかもしれない（石浦）。
- (9) それと同時に、個体の成長のシグナルとなる性ホルモンが、記憶・学習に与る脳の神経細胞を活性化することが、実験的に明らかになった（川戸）。
- (10) さらに、脳の高次機能解明の一環として、言語機能が取り上げられた。赤ん坊が長じるにつれ、どのように言語を獲得するか、また外国語の学習の場合はどのようなプロセスを経るかが、MRIを用いた計測により明らかにされた（酒井）。
- (11) 最後に、知覚、特に触覚のモデルとして、センサーをもち自律的に物体を触りながら、手に触れた物体の形を認識する数理モデルが構築された。将来、知覚をもつロボットが誕生することを想定して、このようなモデルを構築しておくことは重要である（池上）。

紙面の都度でここでは割愛せざるを得なかったが、他にも融合科学の視点から異分野連携をはかった多数の共同研究が展開された。

III. 発生と形態形成の融合科学としての研究成果

この節では、代表・浅島の研究成果について、少し詳しく述べておきたい。浅島の研究は、「融合科学創成ステーション」に参画した多数の教員との共同研究で成し遂げられたものであり、まさに、このような融合科学を推進する拠点形成を具現化したものといえる（図1）。

○化学的分野からの器官形成のアプローチ

脊椎動物の発生ではもともと1個の細胞である受精卵から細胞分裂を繰り返してやがて胞胚期（哺乳動物では胚盤胞）になる。この頃の胚は細胞数が1,000から10,000個の細胞集団になる。このような時期に胚の中の一部に未分化細胞の領域がある。カエルやイモリでは動物極側近くのアニマルキャップと呼ばれる部分が、この未分化細胞であり、鳥類では外胚盤葉、哺乳類では内部細胞塊がそれである。このような未分化細胞をシャーレの中に取り出して、そこに様々な化学物質を入れることによって器官形成や細胞分化を制御するという研究のアプローチがある。そのような実験で同定された化学物質は様々なものが知られている。レチノイン酸とその修飾した化合物、アクチビンやFGF（繊維芽細胞成長物質）などの成長因子、インスリンやフェリチン、数々のペプチドなど様々な化合物をその未分化細胞に与えると器官形成や細胞分化がおこる。そのような時、与える物質は一般的に分化誘導物質と呼ばれるが、その化合物の性質と濃度によって分化の方向は著しく異なる。ツメガエルの未分化細胞にアクチビンやレチノイン酸を加えることによって得られた器官形成の様子を示したのがその例である（図2）

○工学的分野からの器官形成・細胞分化のアプローチ

・スキャホールドとマイクロファブリケーションを用いた培養系（安田との共同研究）

スキャホールド（支持体）を用いた培養系は、目的とする構造への三次元的分化を目指すだけでなく、細胞単独レベルでの挙動を解析する実験系としても利用可能である。マイクロファブリケーションといわれる手法では、レーザーによって基盤素材に微細加工をして、一つの穴に一つの細胞を入れることが出来る。例えば、分化誘導して作った心筋細胞を一つずつ入れると、心筋細胞はやがて各々の小穴の中で拍動を始める。この細胞は細胞ごとにバラバラのリズムで拍動を行っているが、支持体のアガロースにレーザー加工し、各細胞間をつなぐようにすると、それまで隔離されていた個々の細胞は、新しくできた通路を通して互いに細胞をのばしていき、やがて多くの心筋細胞のネットワークが出来上がる。このネットワーク状の細胞では、拍動が一斉に同期することが分かった（図3）。

・3次元クリノスタットを用いた培養系

地球上の全ての生物は何らかの意味で重力の影響を大きく受けていると言える。そこで地球上にて、模擬微少重力を作ることが出来ないかと考えられたのがこの3次元クリノスタットである。このクリノスタットでは、中央の培養容器が2軸で回転し、重力の統計的合算値がゼロになるように調節されている。そのような中、シャーレ等に細胞や細胞塊を入れることによって、細胞分化や三次元構造を持つ器官を作ることが出来ないであろうか。実際、このクリノスタットの装置を用い、腎臓由来のA6細胞の形態形成と遺伝子発現を研究した所、微少重力に応答する遺伝子*NDRG1*を見つけることが出来た。

○脳科学における情報分子（アクチビン）の働き（川戸との共同研究）

脳は極めて特殊かつ高度に発達した構造を持つ器官であり、学習や運動、記憶など高次の神経活動の中核である。この領域における記憶という現象を解明する生物物理学的アプローチにおいて、大きな技術的ブレイクスルーが行われた。それは分子イメージングという新しい手法の開発であり、記憶に関わる細胞の動態を可視化することでもある。川戸らはそのような中で、記憶と海馬の神経細胞における樹状突起数が記憶の保持と関係があることを発見した。さらにその過程で、アクチビン処理を行うと神経突起が増えることを見出した。アクチビンは海馬の

中にも存在することから、その生理的な役割は大きいと考えられる。

○数理モデルからのボディパターン形成メカニズムの検討（金子との共同研究）

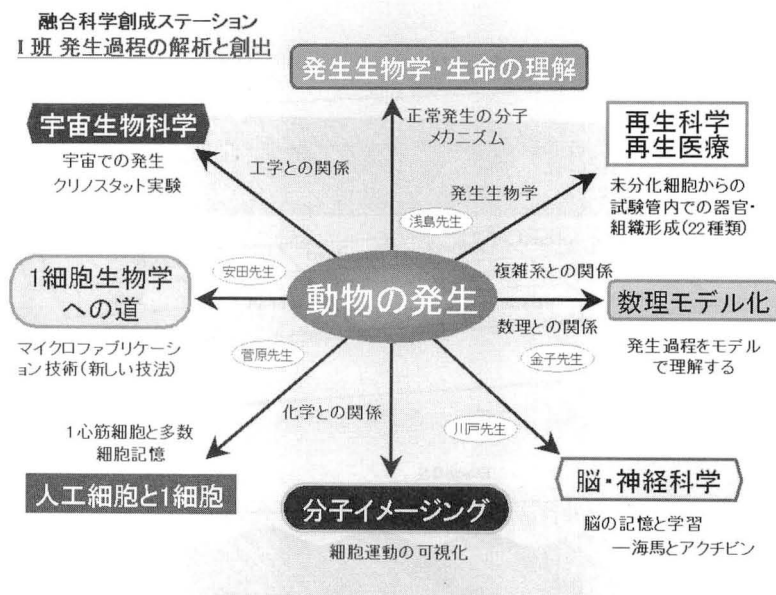
初期胚の基本的なボディパターンは、背腹軸、前後軸、左右軸の3つからなる。H.シュペーマンとH.マンゴルドによるオーガナイザーの発見以降、特に背腹軸と前後軸の決定機構について多くの研究がなされてきた。その過程で、ボディパターンの決定機構説明するモデルとして、C.H.ウォディントンによる「水路モデル」（キャナリゼーション・モデル）がある。アクチビンによる器官誘導に関して多くの成果が挙げたのを契機として、金子との共同研究で、「改変水路モデル」が創られた（図4）。

IV. まとめ

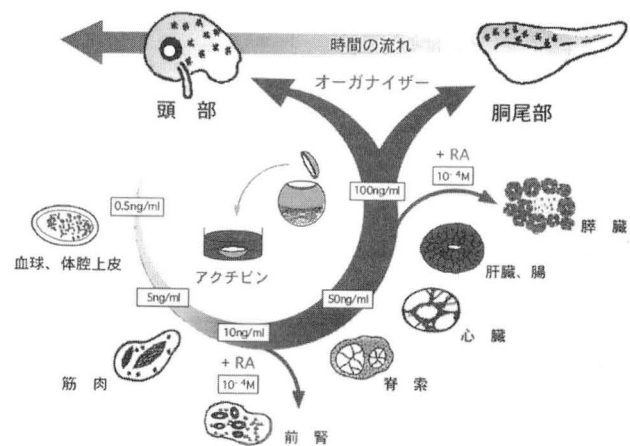
以上のように、アクチビンやレチノイン酸などの生体分子を細胞集団に直接投与することにより、細胞の分化を引き起こすだけでなく、細胞の集合体である種々の器官を作ることにも可能となった。また、培養法の工学的発展による新たな展開と、この発生過程制御系を理解するための数学的モデルに関して述べた。さらに脊椎動物発生において細胞分化に大きな影響を与え得る生体分子が、脳における機能的構造の可塑性という側面でも働いていることが分かった。このような研究成果は、単に生物学だけで挙げることはできない。物理学、化学、工学、数学などを統合し、融合科学として取り組むことで初めて挙げることができたといえる。

最後に、拠点形成として「融合科学創成ステーション」の教育への波及効果について述べておきたい。私達はこの5年間に、前期課程（1～2年生）「融合生命科学－細胞のダイナミズムと進化」、後期課程（基礎科学科、生命・認知学科、広域科学科の3～4年生）「融合科学概論Ⅰ、Ⅱ」、大学院「融合科学特論Ⅰ、Ⅱ」を開講してきた。また、広域科学専攻の博士課程の院生延べ67名（事業推進担当者の研究室の院生を除く）を選任して、リサーチアシスタント（RA費）を援助してきた。このような若手人材育成は、平成19年度から始まる新しい「グローバルCOE」プログラムの申請へと受け継がれていくことになるだろう。

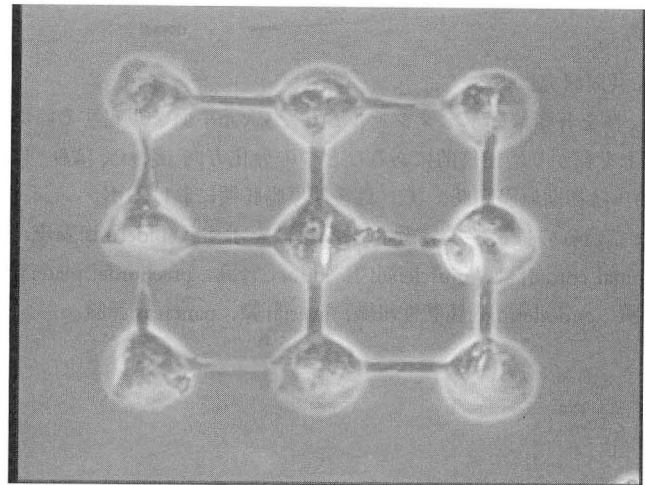
（生命環境科学系 浅島 誠）



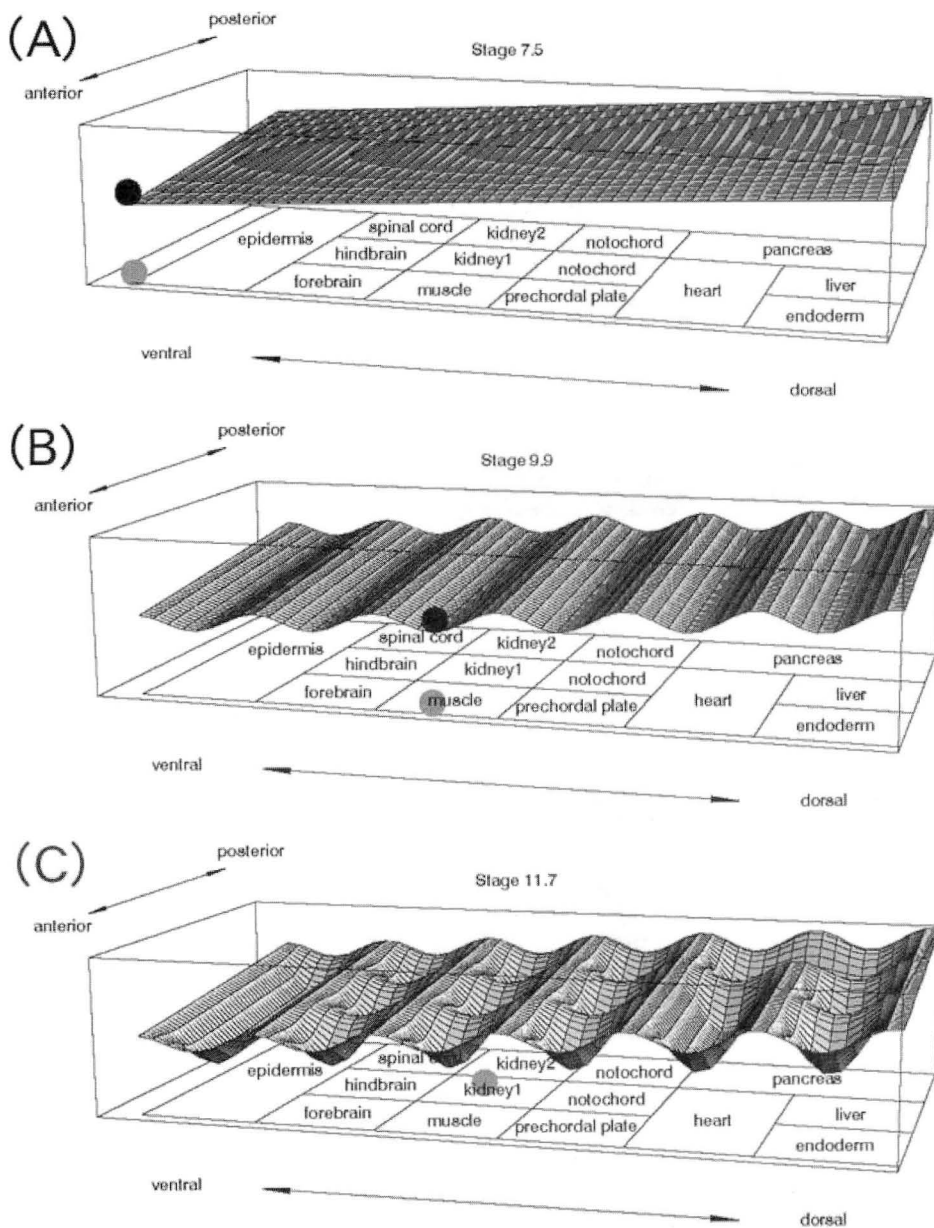
(図1) 動物の発生を起点とした融合科学的アプローチの例



(図2) ツメガエルアニマルキャップ細胞へのアクチビン処理による器官誘導模式図



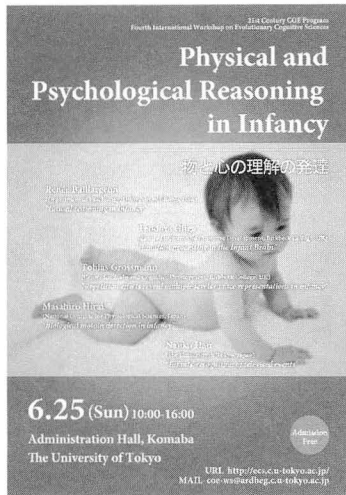
(図3) マイクロファブリケーションによるアガロースチャンバーを用いた心筋細胞の接続同調実験。各チャンバー内の心筋細胞が各通路を経由して接続すると拍動の同期が観察される。



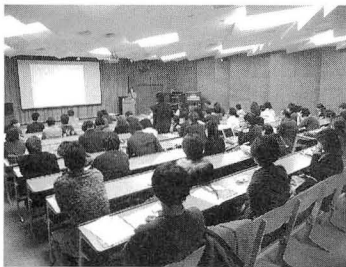
(図4) 改変水路モデル (金子との共同研究による)

x 軸に背腹方向、 y 軸に頭尾方向、 z 軸を各領域のポテンシャルとした3次元平面を規定する。ある一つの部域を示すボールが平面上を転がり、最終的にあるひとつの分化方向(深くほみ)に落ち込む。(A)は中期胞胚期、(B)は初期原腸胚期、(C)は後期原腸胚期におけるポテンシャル変化を示す。 xy 平面上にかかっているのは最終的に分化する組織を示す。epidermis:表皮、forebrain:前脳、hindbrain:後脳、spinal cord:脊髄、muscle:筋肉、kidney:腎臓、prechordal plate:脊索前板、notochord:脊索、heart:心臓、endoderm:内胚葉性組織、liver:肝臓、pancreas:膵臓。

15 21世紀COEプログラム 心とことば—進化認知科学的展開



国際ワークショップ“Physical and Psychological Reasoning in Infancy”のポスター



国際ワークショップ“Social Cognition”の講演会場



同、ポスター発表会場

平成15年（2003年）度にスタートした本COEプログラムは、人間生物学、認知科学、言語科学の分野の研究について、進化的視点をふまえて領域横断的に取り組み、新しい人間統合科学の構築を目指している。プログラムも4年目となり、研究ステージで言えば収穫期に入った。事業推進担当者、プログラム協力教員、特任研究員（PD）、研究支援員（RA）が、それぞれのプロジェクトで過去3年間の蓄積を結実させるべく調査、研究に取り組んでいる。

平成18年（2006年）度の本COEの組織体制の概要をご報告すると、事業推進担当者22名、プログラム協力教員5名、拠点形成特任研究員17名、研究支援員15名である。この体制は、前年度と比べてほとんど変わらないが、昨年の特任研究員のうち3名が他の研究機関に新しい研究ポスト（大学教員2名、研究機関研究員1名）を得た。本年度の予算は108,200千円で、これも前年とほぼ同じであり、予算の約60%が、人経費として特任研究員、支援員の若手研究支援費として使われている。32の公募型研究が、総合文化研究科を中心に、理学研究科、農学生命科学研究科、人文社会科学研究科、総合研究博物館に分かれて行われている。COEの中核にあたるオフィスとラボは、駒場Iキャンパスの17号館1階に置かれている。

2006年の大きなイベントとしては、まず3月に“Social Cognition: Evolution, Development, and Mechanism”（社会的認知：進化・発達・メカニズム）、6月に“Physical and Psychological Reasoning in Infancy”（乳幼児の推論能力）、そして7月に“Human Sentence Processing and Production”（文処理と文生成）という3つの国際ワークショップを主催した。いずれも150名規模の集会であるが、若手研究者が中心となって企画運営にあたる催しであった。また、2006年に本COEメンバーが実行委員長を務めた国際学会としては、3月に第16回意味論・言語理論学会（Semantics and Linguistic Theory）と、9月に第4回国際構文理論学会（The Fourth International Conference on Construction Grammar）があり、それぞれ海外から多くの参加者を迎えた。その他、日本進化学会（動物の社会性）、日本動物行動学会（性的対立）、日本心理学会（心の進化）、日本認知療法学会（社会不安障害、PTSD）等の各学会大会で国際シンポジウムやワークショップを開催した。

研究としては、今年度は全部で33の公募型研究プロジェクトが5つの研究部門に分かれて行われている。その一部を紹介すると、

- ・動物音声科学：社会的信号としての音声
 - ・パーソナリティ・意思決定スタイルに関する神経行動内分泌学的研究
 - ・覚醒チンパンジーを対象とした事象関連電位測定
 - ・ゲノム解析に基づくヒトと大型・小型類人猿の比較研究
 - ・音楽の構造的聴取に関わる脳磁界活動の計測
 - ・パーソナリティ特性に及ぼす遺伝と環境の相互作用の影響
 - ・動詞語彙概念構造レキシコンの構築
 - ・人間の語彙処理と統語処理についての多角的・複合的な実験的検討
 - ・空間移動の言語化に関する対照研究
 - ・韓国手話における非手指動作に関する研究
 - ・認知言語学の観点からの言語の多様性についての統合的理解の構築
 - ・言語データに内在する単語の切れ目と分岐エントロピーの関係に関する研究
 - ・NIRSとEEGを用いた乳幼児脳活動計測：発達認知神経科学アプローチ
 - ・精神病理の発生メカニズムと治療的介入についての認知行動アプローチ
- などである。

これらの研究内容については、年3号のペースで発行するニューズレター（今年度は、8号、9号、10号）で詳しく紹介している。また、特任研究員の研究成果は、学会発表、論文発表する

他に、研究室紹介（6月）、オープンキャンパス（8月）、公開研究発表会（12月）といった機会を通して一般の方々にも公開している。

COEでは次世代の研究者を誘う上でも、学部生向けの教育プログラムにも力を注いでいる。今年度は、昨年度に引き続き、2つのオムニバス講義（1、2年生向けのリレー講義と専門課程生向けの進化認知科学連続セミナー）を開講した。普段の授業では聞くことのできない先端研究や、英語による講義など、受講者からは刺激的な内容であったとの感想が多く寄せられた。

本COEのホームページは、<http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp/>

（拠点リーダー 長谷川壽一）

16 美術博物館の活動

2006年度に開催した3度の特別展は以下の通りである。

特別展「江戸の声—黒木文庫でみる音楽と演劇の世界—」

2006年3月27日（月）から5月7日（日）まで、教養学部国文学漢文学教室との共催で開催した。

東京大学の駒場キャンパスには、黒木文庫という演劇書コレクションがある。旧制東京高等学校教授黒木勘蔵氏（1882-1930）が築いたもので、約3千点の資料から成る。黒木氏は教授職のかたわら、各地へ出向いて、音楽文献を調査した。関東大震災後には、近世日本音楽研究を一箇の独立した分野に押し上げるほどの功労があった人で、一代の目利きであり、関係書のコレクターでもあった。

戦火をくぐった黒木氏の蔵書は、やがて新制・東京大学教養学部文学部国文学漢文学教室へと移り、以来半世紀以上の間、研究者のあいだでは知られていたが、広く活用される機会もないまま、銀杏並木を臨む静かな一室で眠っていた。本展覧会では、黒木文庫と国文学漢文学教室の関連資料から、音曲の正本（演奏記録）と稽古本、浄瑠璃正本、そして近世から近代に至る歌舞伎など、さまざまなジャンルの資料の中から、選りすぐりの百余点を初公開した。また、有数の近世音楽コレクションである国立音楽大学附属図書館・竹内文庫から数十点の文献と錦絵、国立国会図書館、東京都立中央図書館、国文学研究資料館、早稲田大学演劇博物館、南山大学図書館等からの多様な作品を併せて陳列し、音楽と演劇が織りなす世界を表現した。

なお展覧会と同時に「電子版黒木文庫」（<http://kuroki.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>）を公開した。この「電子版黒木文庫」は、近世日本演劇と音楽資料を中心とする黒木文庫および林又一郎舞台資料を全点「書誌」「分類」および「上演」状況にしたがって検索し、その結果を画像と書誌データ両方から閲覧できる画像データベースである。

また4月23日（日）には数理科学研究所大講堂にて、講演・シンポジウム「江戸の声：日本の音楽が語りえたもの」、および常磐津「勢獅子（きおいじし）」の演奏会をおこなった。

展示に合わせて、黒木文庫特別展実行委員会編の図録「江戸の声—黒木文庫でみる音楽と演劇の世界—」を東大出版会から刊行した。また21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」（UTCP）の共催を得た。

会期中にのべ2,650人（1日平均70人）の来館者を迎えることができた。

特別展「聖書に生きる—トーラーの成立からユダヤ教へ—」

2006年5月25日（木）から7月23日（日）にかけて、文学部宗教学研究室の協力を得て開催した。

この展覧会は、イスラエル博物館（エルサレム）所蔵のユダヤ教民族文献資料パネル、在日本イスラエル大使館所蔵の写真パネル、及びユダヤ教関連の発掘出土物を通して、聖書を生みだし、かつ聖書を生き抜いてきたユダヤ人の生活の跡をたどる試みであった。

ユダヤ教にとっては、キリスト教という旧約聖書の最初の五書、創世記・出エジプト記・レヴィ記・民数記・申命記は、唯一神が預言者モーセに直接語りかけた天啓の書として、今日に至るまで教えの根幹となる最重要の経典と位置付けられている。この「モーセ五書」のことを、ヘブライ語では「トーラー」と呼び、それは「教え」を意味する。

聖書、とりわけトーラーは、なぜ、そしてどのようにして生まれたのかを探っていくと、中近東の沙漠の厳しい自然環境とイスラエル民族の亡国・宗教的迫害という悲劇に行き着く。生死の限界状況におかれた古代イスラエルの民に生きる力を与えた「宗教」の計り知れない重要性に思いをいたさざるをえない。



では、トーラーとは、ユダヤ教を奉じる人びとにとって何を意味していたのだろうか。ユダヤ人は、祖国を奪われ、エルサレム神殿を破壊されて、世界各地へ離散していく中で、トーラーの教えを守りながら民族としての同一性を守り続けた。ユダヤ人にとってはトーラーのあるところに、失われた神聖な神殿が存在し続けたのである。

本展示は、キリスト教とは異なるユダヤ教の信仰世界を伝えるものだが、ユダヤ教の理解が深まれば、キリスト教の理解も深まり、そしてまたユダヤ教のトーラーに対する理解が深まれば、イスラームの信仰への理解も深まることになる。

本展示では、パネル化されたヘブライ語の宗教民族史料すべてに翻訳と解説を付した。これらは本学大学院生の研究と勉学の成果であり、会場で冊子としても無料配布され、それを補助教材にパネルを鑑賞することもできるようになっていた。毎週土曜日には、大学院生によるギャラリートークもおこなわれた。

関連企画として、6月5日（月）駒場博物館セミナー室にて、研究セミナー「聖書はいかにしてユダヤ教の聖典となったのか」を開催した。また6月24日（土）には教養学部学際交流ホールにて、シンポジウム「生活の中の祈り：一神教における神との交わりとの諸相」をおこなった。

会期中の総入館者数は3,887人（1日平均73人）を数えた。

一高校長森卷吉とその時代—向陵の興廃この一遷にあり—

2006年10月7日（土）から12月3日（日）にかけて開催した。

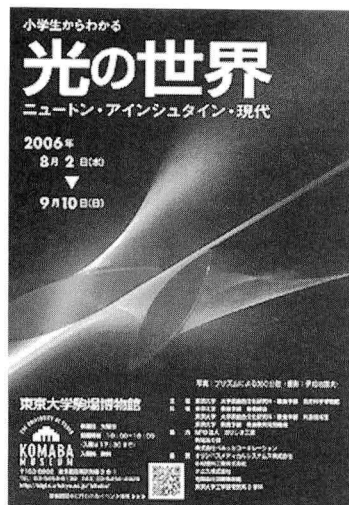
森卷吉（もりけんきち）は、1929年から1937年までの間、第一高等学校校長を務めた教育家で、教師としては英語を担当していた。校長在任中の1935年に、当時本郷の現農学部にあった第一高等学校と現駒場Ⅰキャンパスにあった東京帝国大学農学部との間で敷地交換が行われたが、森は、校長就任以前からその実現に向けて尽力したことで知られている。この敷地交換は、職員・生徒など一高関係者全体の団結を示した出来事として、一高の歴史を語る際には外すことのできない位置を占めている。生徒たちは自分で編集した新聞で特集号を組み、日本海海戦時（1905年）の連合艦隊司令長官東郷平八郎の督励の言葉「皇国の興廃此の一戦にあり」に倣って、「向陵（第一高等学校）の興廃この一遷にあり」と唱えた。会場では、全一高生が森を先頭に隊列を整えて、本郷から駒場まで行進した模様を収めた映画がビデオ上映された。

この展覧会は、森の残したノート、日記、書簡、写真などを通して、一高および戦前の日本の高等教育について理解と関心を深めていただくことを目的に企画・制作された。森が東京帝国大学英文科在学中に受けた恩師夏目漱石、そしてラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の講義ノート（森自筆のもの）も展示された。なお展示の主要部分は、森卷吉のご遺族にご寄贈いただいた遺品の数々によって構成された。

会期中には、多数の一高同窓会のメンバーを含む、のべ3,627人（1日平均70人）の来館者があった。



17 自然科学博物館の活動

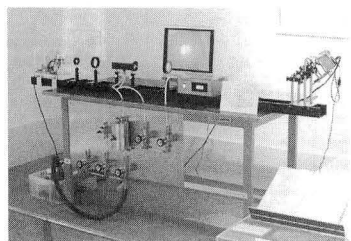


特別展「小学生からわかる光の世界—ニュートン・アインシュタイン・現代—」

2006年8月2日（水）～9月10日（日）の期間、「小学生からわかる光の世界—ニュートン・アインシュタイン・現代—」展を、1階美術博物館展示室も含めた全館スペースを使用して開催した。本特別展は自然科学博物館主催のもと、物理部会、共通技術室、教養教育開発機構との共催でおこなった。また、NPO法人ガリレオ工房、駒場友の会、株式会社ベネッセコーポレーションにご協力いただき、オリンパスメディカルシステム株式会社、中村理科工業株式会社、ケニス株式会社、有限会社浜野顕微鏡、HOYA株式会社ビジョンケアカンパニー、本学工学部電気系3学科からも協賛を得た。

本学教養教育開発機構の客員教授である滝川洋二氏、NPO法人ガリレオ工房、共通技術室、物理部会には、企画の最初段階から全面的に関わっていただいた。2006年に国際基督教大学付属高等学校から招かれた滝川教授は、理科教育の改善そして発展のために精力的に活動されており、2つのNPO法人、「ガリレオ工房」と「理科カリキュラムを考える会」の理事長を務めている。

昨年度に続く、自然科学博物館主催の夏休み企画として、通常より若干対象年齢を引き下げた展示内容とした。この特別展のねらいは、物理教育の中でも、教育指導要領の改訂により学習する機会が少なくなった“光学”の分野に焦点をあて、広く若年層に光の世界を知ってもらうことであった。光の物理的な性質や、光に関する研究の歴史的な流れを、難解な概念を直感的に理解するのに適した実験や、かつて旧制第一高等学校で使われた教育用実験機器、現代技術の先端で使われている装置の実物などを用いて、できるだけわかりやすく解説した。あわせて2階展示室において、現代の光を対象とした科学研究を理解していただくために、各研究室からの協力を得て、東京大学駒場キャンパスでおこなわれている最先端の研究を紹介した。

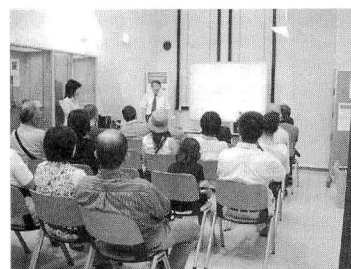


8月2日（水）のオープンキャンパスに際し、「フーコーの回転鏡で光の速さを測定する」と題して、105号館1階において実験・デモンストレーションをおこなった。1850年にフーコーによっておこなわれた、高速で回転する鏡を用いた光の速さを測定する実験を再現し、実験の結果より準備の過程を多くの高校生にも見てもらえるように、繰り返し実演をおこなった。また、その実験の様子は記録撮影し、展示室にて上映できるようにした。

関連企画として、滝川教授を含めたガリレオ工房のスタッフにご協力いただき、2階展示室の特設コーナーにおいて、土日を中心にミニ実験ショーをおこなった。この企画は大変好評を得た。また、中小小学生の子供を持つ保護者を対象に、滝川教授による講演会「理科好きな子どもを育てるためには」を実施した。子供の理科に対する好奇心を伸ばすためには、保護者がどのようなサポートができるかを、参加者と共に考え、意見交換をおこなった。

通常の来館者層とは異なる、小学生を含む親子連れなどに多数ご来場いただき、会期中の来館者数はのべ3,995人（1日平均111人）を数えた。本展の内容は1冊の図録にまとめられ、都内の図書館などに寄贈した他、現在でも博物館にて無料配布している。

なお、この「駒場2006」の表紙を飾る光電子増倍管は、本展に際して石崎喜治氏よりご寄贈いただき、展示されたものである。



上記の特別展開催期間以外は、本館の所蔵品である、旧制第一高等学校の理化学実験機器類を中心とした展示をおこなった。

18 オープンキャンパス2006 駒場地区の企画

2006年8月1日（本郷キャンパス）、8月2日（駒場キャンパス）の2日間、東京大学の企画であるオープンキャンパス2006が開催された。オープンキャンパスという名称は、同種の企画が多くの大学で行われていることもあり、すでにご存知の方も多いと思われるが、高校生を主たる対象とし、東京大学の受験を目指す学生に向けて大学を紹介する企画である。

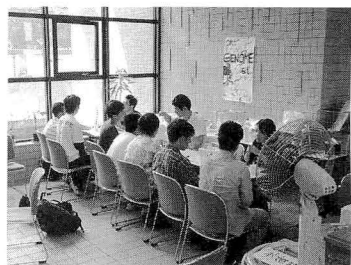
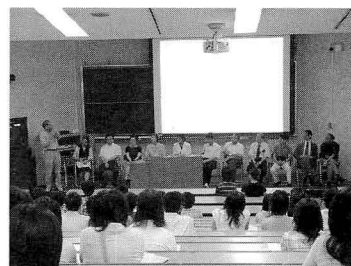
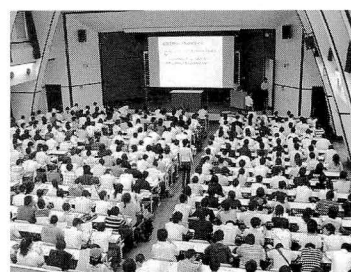
教養学部としては4度目の開催であったが、昨年までと異なり、事前申込をした方はすべて受け入れ、申込なしで当日参加の方も可能な限り受け入れるという方針で臨んだ。基本的な方針は他学部でも同様であったが、教室の収容人数に応じて実質的な人数制限を行った部局もあった。申込なしの方もなるべく受け入れるようにしたのは、ウェブ上での事前申込の数が予想を大きく超える勢いで増えたために、あらかじめ告知していた申込期間の途中で受付を締め切ってしまったという事情もあってのことである。

申込受付はオープンキャンパス実施の3週間ほど前に締め切られたが、その時点で、教養学部への企画の事前申込者は約1,700名にも上り、全てが実際に来るわけではないにせよ、当日参加者や引率の先生方・父母が加わることを考えると、申込済の方から900番教室の定員分（立ち見もいれて700名程度）の人数を抽選して受け入れていた昨年に比べて、2倍から3倍の人数を収容する準備が必要であることが明らかになった。

準備作業は実施の直前まで続いたが、最終的には、午前中は、主企画（学部長挨拶、キャンパス紹介など）については同じものを2会場（900番教室と1323教室）で行うこととし（講演者は2回同じ話をするようになる）、さらに900番教室の様子を18号館ホールに中継して引率者・父母が視聴できるようにしたうえ、1313教室では、申込なしの参加者を対象に、小柴昌俊先生の学術俯瞰講義の放映に続いて教員との懇談会を実施することとした。キャンパス紹介などが終わったあとは、参加者が会場を移動できるよう15分から30分の長めの休憩を入れ、900番教室では文系の、1323教室では理系の総合講演を開催した。午後は、6つの模擬講義を2つの時間帯に分け3会場で行って実施し、理系・文系の教養学部3・4年生が対応する質問コーナーと、学生有志による一般的な質問コーナーを設けた（後者は学生の提案によるもの）。ほかに、16・17号館および105号館1階（旧生協購買部）では午前中からデモ実験を実施し、博物館・図書館・情報教育棟の見学も午前中から受け入れることとした。なお、駒場博物館では、オープンキャンパスにあわせ、8月2日より「小学生からわかる光の世界——ニュートン・アインシュタイン・現代」展を開催したほか、21世紀COEによる企画として、「心とことば—進化認知科学的展開」、「融合科学創成ステーション」による展示も行われた。

8月2日当日は、受付開始予定時間（9時30分）の1時間ほどまえから参加希望者が並び始めていたため、受付を15分ほど早めに始めたが、当初告知していた受付場所が変更されたことに伴う混乱がややあったほかは大きな問題もなく、1人の病人・けが人もないまますべての企画が無事に終了した。参加者は、申込済が約1,000名、申込なしが約700名、引率者・父母は正確にはわからないが5、60名ではなかったと思われる。見込みよりやや少なかったとはいえ、教養学部としては未経験の人数に対処して特に問題が生じなかったのは、模擬講義などの企画とその準備にご協力を惜しまなかった先生方、献身的に企画を支えてくださった事務の方々、昔の自分を思い出しながら参加者に対応してくださった学生の皆さん、父母・引率者への対応を買って出た駒場友の会の皆さんのご尽力があつてのことである。深く感謝申し上げたい。詳細は省くが、アンケートの回答を見る限り、参加者の満足度も高かったようである。

今年度の実施状況から分かったことがいくつかある。学部長挨拶などの企画が終わった時点（11時すぎ）でやや長めの休憩をとったが、好みの総合講演を選んでほしいという開催者側の意図に反して、多くの参加者がそのまま生協食堂へと流れた。総合講演が昼食と競合するかたちとなったが、昼食時間の分散化という点では意味があったかもしれない。また、模擬講義は大



教室から割り振っていったが、聴講者400名という講義もあったので、大きい教室から使うようにするのがよいようである。

来年度以降も、オープンキャンパスは事前に申し込んだ方はすべて受け入れる方式で実施されるのではないかとされる。最後に、今年度の経験に基づいて、企画を立てる際の工夫をいくつか提案させていただくことにしたい。

- ①東京大学が受験生を集める上で比較的優位な立場にあることもあって、オープンキャンパスの目的・意義についての理解が学内で共有されている状況にない。教養学部は、特に高校と直結する前期課程を抱えているという大きな特色にあわせて、独自に目標を設定していく方向を探っても良い。
- ②複数の企画を並列して行い、参加者が好みに応じて選べるようにする。
- ③勉強・生活の実態を紹介する映像などがあると便利である。映像は複数会場で使える。
- ④今年は後期課程の学科を単位に企画をたてたが、部会その他の単位で企画を実施していただくのもよい。参加者すべてが入学するわけではないが、オープンキャンパスは、1・2年生の教育を担当する各部会から、入学前の学生たちになにごとかを訴えることのできる数少ない機会の一つである。
- ⑤事前に企画を広く募る。今年度は実施前ぎりぎりになってから学部内で企画や協力者を募ったために、せっかく名乗り出ていただきながら、残念なことに準備が間に合わないという例もあった。
- ⑥学生企画を活用する。今年度のオープンキャンパスでは、在学生一人が、おそらく出身の高校の後輩であろうが、三列縦隊の高校生を引き連れて自前のキャンパスツアーを実施している姿が見られた。ほかに、サークルの紹介などがあってもよいかもしれない。

(岡本拓司)

2006年度の総合講演

井上健「文学者たちの一高：芥川龍之介など」；浅島誠「生命科学—生命のもっている美しさと最先端科学」

2006年度の模擬講義

米谷民明「アインシュタインと21世紀の物理学」；石井洋二郎「毒書への誘い—高校生が読んではいけない本」；川合慧「情報の科学と計算的思考」；後藤則行「地球温暖化問題への国際的対応と日本の役割」；池内昌彦「光と生命」

2006年度のデモ実験など

霧箱；気体の性質を体感しよう；光を分ける・光によって色が変わる分子；変幻自在な光が解き明かす分子の世界；巻貝の巻型はどうやって決まるの？；生物と光；これが貴方のDNA!；フーコーの回転鏡で光の速度を測る（21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」の成果の一部）

19 ホームカミングデーの開催

卒業生やその家族・友人を大学に迎え、よりいっそうの親睦をはかるため、「東京大学ホームカミングデー」が11月11日（土）に本郷・駒場両キャンパスで開催された。駒場キャンパスでは駒場友の会との共催のイベントとして、卒業生やその家族等に加え駒場友の会会員も対象として行われた。当日のプログラムは以下のとおりである。

10:30～12:30	本郷キャンパスの行事のインターネット中継@数理科学研究科棟大講義室
13:00～13:30	駒場キャンパスオープニングセレモニー@コミュニケーションプラザ
	①木畑洋一・大学院総合文化研究科長・教養学部長挨拶
	②スタインウェイ・グランドピアノの披露演奏(ヘルマン・ゴチェフスキ助教授)
13:30～15:00	駒場の樹木をめぐる講演会とイベント@コミュニケーションプラザ
	①講演会「カエデ学ことはじめ」(梶幹男・農学部北海道演習林長)
	②駒場の樹木をめぐるイベント
15:10～16:40	21世紀COEシンポジウム「生命のダイナミズムから学ぶ―駒場COEの問い―」@900番教室
15:10～16:40	研究室訪問
17:00～18:30	レセプション@駒場ファカルティハウス
終日開催	
特別展示@駒場博物館「一高校長 森巻吉とその時代」	

まず、本郷キャンパスでの行事のインターネット中継では、坂村健・大学院情報学環教授と藤本隆宏・大学院経済学研究科教授による「世に問う！～時代の先頭に立つ～」と題したシンポジウム、及び小宮山宏総長による記念式典の様子が中継された。

引き続き、駒場キャンパスでのオープニングセレモニーが、この秋オープンしたばかりのコミュニケーション・プラザで開催された。木畑洋一・大学院総合文化研究科長の挨拶に続き、ヘルマン・ゴチェフスキ助教授によるスタインウェイのグランドピアノの披露演奏が行われ、会場に詰め掛けた観客を美しい音色で魅了した。続いて開催された「駒場の樹木をめぐる講演会とイベント」では、梶幹男・農学部北海道演習林長により、秋を代表する樹木「カエデ」についてその仲間の名前や形態、人とかかわりについての講演が行われ、こちらも多くの聴衆を集めた。もっとも、あいにくの雨により駒場の木々をめぐるイベントの方は残念ながら中止となった。

その後、21世紀COEシンポジウム「生命のダイナミズムから学ぶ―駒場COEの問い―」と研究室訪問が並行して行われた。シンポジウムは駒場で行われている3つの21世紀COEプログラム、すなわち「共生のための国際哲学交流センター（UTCP）」、「融合科学創成ステーション」、「心とことば―進化認知科学的展開」について、その研究成果を紹介しながら、生命、自己、そして社会を考えていくもので、内容の濃い、しかしながら楽しいシンポジウムになった。また研究室訪問では研究室の後輩である教員達が先輩を迎えて談笑する姿が見られた。

最後のレセプションでは大学院総合文化研究科・教養学部、大学院数理科学研究科の大先輩からごく最近卒業された方々まで多くの方々が集まり、和やかな雰囲気歓談されていた。以上のイベントにはあいにくの雨にもかかわらずあわせて200名程度の方々にご参加を頂き、大変

盛況であった。

とはいえ、来ていただいているのは多くの卒業生のごく一部に過ぎない。より多くの卒業生やその家族・友人、あるいは友の会会員の方々に来ていただけるようにしていきたい。

(清水 剛)

20 社会連携への取り組み

社会連携委員会―「高校生のための金曜特別講座」について

社会連携委員会は、総合文化研究科・教養学部における社会との連携・協力活動について、情報を集約し、それらの関係づけを容易にするためにできた組織である。元来、固有の業務を持っていないが、例外的に「高校生のための金曜特別講座」は、直接、これを主宰してきた。2005年度からは教養教育開発機構の発足に伴い、これと密接に提携しつつ運営している。

この講座は、毎週金曜日の夕方6限に、東京大学教養学部の教員とその協力者が、高校生のために開いている連続講義である。教室・設備などで学部の全面的な支援を受けているが、講師はすべてヴォランティアとして無報酬で担当している。

この事業は、元来は、理科系の学部教員が、2002年度から実施された「ゆとり教育」が高校・中学での理科系カリキュラムを大幅に縮小し、その結果、大学教育にも支障が生ずるのではないかという危惧の下に始めたものであった。当時、諸大学・諸高校の教員が始めた、学習指導要領からはずされた分野のテキストの作成や高校への出前授業、科学技術コンテストなどといった試みの一環であったと見て良いだろう。現在はしかし、中等教育カリキュラムの見直しが日程に上りつつある一方、講座運営のなかで気付いたこともあって、講座の意義は別の方面に見出されるようになっていく。その共通理解とは、中等教育が強く縛られている受験体制に解毒剤を与えること、すなわち大学入試が自由で楽しい知的営みを子どもたちの中に培養する点でマイナスに機能している現状を憂え、高校の先生方と協力しつつ、大学自身が積極的にそれに対処しようというものである。大学で我々が日常的に行っている知的営みのエッセンスを、高校生たちの目の前で展開し、その楽しさ、重み、知的興奮を味わってもらおう。それはまた、大学教員の側では、予備知識に乏しい聴衆を前にいかに自分の仕事を説明するかという難問への挑戦でもあって、自身の教育技能の開発や研究の意義の反省にも役立っている。

2006年度では、前年度にひきつづき、教養教育開発機構のサポートを得、改良された1106教室および専用ウェブ・サイト (<http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/index.html>) を活用して、事業を展開した。特筆されるのは、前年度後半に試行した講義の同時遠距離配信を、アリコ・ジャパンから寄贈された多地点双方向通信システムBizmate Proによって拡張し、夏学期に四国・中国地方を中心とする高校数カ所と試行を行ったのち、冬学期からは全部で12の高校と同時中継を始めたことである。この装置は、同時に50カ所まで配信可能で、双方向の質疑も、同時に1カ所ではあるが、駒場会場から許可を与えれば順次行える能力を持っている。この講座は、毎回、60-70分の講義のあと、高校生が直接に講師と質疑を交す形で運営してきたが、幸い、高校生はこれに敏感に反応し、質疑時間を20-30分ほど延長することがしばしばである。その生き生きとしたやりとりに、駒場会場だけでなく、遠隔地の高校生も参加できるようになったのである。現在は、質疑権を1回ごとに4・5校に限り、それを順次交代してもらって、対話の流れを円滑に維持している。この遠隔配信は、大学を持っている県庁所在地などの高校より、むしろその便宜を持たない中小都市や離島の高校の方にメリットが多いかと思われる。現在の参加校は中小都市の受験校が主であって、システムの利点がまだ十全に発揮されているとは言えない。

なお、駒場会場への参加者は、成人の聴講者も含め、多いときで170人、少ないときで60人ほどである。近隣以外からの参加者も年々増えているので、概ね成功していると言って良いだろう。また、2005年度の講義については、『高校生のための東大授業ライブ』として教養教育開発機構から出版し、さらに東京大学出版会から市販することにした。

2006年度の金曜特別講座は、コーディネーターを下井守教授、司会を教養教育開発機構の長田洋輔助手が務め、これにベネッセ・コーポレイションからの吉本真代研究員、およびTA若干名が協力した。講師とその題目は下記のとおりである。

〈夏学期〉

第1回	4月14日	石浦章一（生物学）	頭のよさとは何か、脳を調べて考える
第2回	4月21日	トム・ガリー（英語）	language、languages、そして辞書
第3回	4月28日	佐藤良明（表象文化）	エレキギターは何故しびれるのか：文明的アプローチ (引き続き「寺内タケシとブルージーンズによるハイスクールコンサート」を開催)
第4回	5月5日	ロバート・キャンベル(国文学)	江戸の声－駒場美術博物館で開催中の「江戸の声」展会場内でのギャラリートーク－動物の形づくりの謎を解く
第5回	5月12日	浅島 誠（生物学）	
第6回	5月19日	大島利雄（数理科学）	有理数に近い無理数と有理数から遠い無理数
第7回	5月26日	小寺 彰（法・政治）	国際法、そして国際社会とどう付き合うか？
第8回	6月16日	真船文隆（化学）	クラスターの科学－ナノメートルサイズの原子・分子の特異性
第9回	6月23日	加藤道夫（情報・図形）	建築図から見た建築の変遷
第10回	6月30日	有田 伸（地域文化）	韓国の社会と教育制度－比較社会学の視点から
第11回	7月7日	松井哲男（物理）	物質の極限状態－原始クォーク物質の探求

〈冬学期〉

第12回	10月6日	跡見順子（スポーツ・身体運動）	身体運動から生命を知る・人間を知る
第13回	10月13日	下井 守（化学）	変な元素・ホウ素の化学
第14回	10月20日	岡本拓司（科学史）	第一高等学校校長森巻吉の生涯：やりやあやれるんだ
第15回	10月27日	細矢治夫 (お茶の水女子大学名誉教授－化学)	宇宙の中のサッカーボール
第16回	11月10日	斎藤文子（スペイン文学）	小説読むべからず－フィクションの魔力－
第17回	11月17日	遠藤 貢（国際関係論）	現代アフリカとその課題
第18回	12月1日	斎藤兆史（英語）	英語達人の法則
第19回	12月15日	齋藤希史（中国文学）	浦島太郎はどこへ行くのか
第20回	12月22日	安達裕之（技術史・図学）	鎖国と造船制限令－鎖国意識の成立－
第21回	1月12日	陶山 明（生物物理学）	DNAでコンピューターをつくる

現在、「高校生のための金曜特別講座」は順調に運営されている。しかし、問題もなしとしない。まず、総合文化研究科・教養学部で日頃多種多様な業務に追われている教員から、ボランティアを捜すのが難しいこと。講義の内容については、講師の側がどうしても高いレベルの予備知識を前提してしまうので、聴講者の主力をなす高校1・2年生には理解困難なことが多いこと。高校生の側の問題としては、高校の学習と直結する英語学習法などには熱心だが、大学側が重視する見慣れないジャンル、理科系や文理融合型の授業への参加者がさほど多くないこと。また、大学側が学問の最新の姿を伝え、できれば進路選択の参考としてもらおうと意図しているのに対し、高校側では東大ブランドとの繋がりに関心を向けがちだというズレがあること、等々である。

教養学部の教員の業務負担がますます大きくなる中で、この事業を意義あるものとして継続するには、大学と高校が協力して目的をきちんと再定義し、遠隔地配信、出版、その他、具体的な工夫を重ねつつ、新たな体制を築くことが必要と思われる。

21 キャンパスの整備

2006年度の施設・環境整備の概要

2006年度の施設・環境整備については、駒場コミュニケーション・プラザの完成、8号館の耐震改修工事の完成及びこれに伴う周辺整備、6号館および7号館の耐震補強の完成、バリアフリー支援の一環として1号館エレベータの設置、ITを活用した理想の教育のための実験教室（Active Learning Studio（ALS））の設置（17号館2階）が挙げられる。

1. 駒場コミュニケーション・プラザ

旧駒場寮跡地に建設された「駒場コミュニケーション・プラザ」はPFI事業として計画され、2004年度に「実施方針の公表」、「特定事業の選定・公表」、「入札説明書公表」、2回にわたる「質問受付」と「質問回答公表」を経て、「事業者による提案書の受付」、「ヒヤリング」の後、落札者が選定された。本施設はPFI事業の性格上、最終判断は民間事業者の意思にまかせることとなるため、「入札説明書」の一部を構成する「要求水準書」を作成し、大学の希望を条件として記述することが求められた。「要求水準書」の作成に当たっては、総合文化研究科内にWGを設置し検討を進めるとともに、学生の要望を聞き、可能な限り学生および教職員の要望が反映されるよう配慮した。この間の詳細は東京大学ホームページ(http://www.u-tokyo.ac.jp/fac01/b07_03_01_j.html)を参照されたい。

本契約の後、具体的な設計を経て2005年4月に着工され、教育施設と購買部からなる北館が2006年3月に、食堂からなる南館、および和館が2006年9月に完成し、2006年10月25日に竣工披露式典が行なわれた。

駒場コミュニケーション・プラザは、駒場Ⅰキャンパスにおける学生および教職員約1万人の生活基盤を支援し、快適なキャンパスライフに寄与する施設であり、福利厚生施設としての南館（レストラン）および和館、教育研究施設としての北館（一部を福利厚生施設に利用）で構成されている。これは、「駒場地区キャンパス再開発・利用計画要項」における「開かれた大学」の理念を実現するために、駒場Ⅰキャンパス東部ゾーンに建設されたものであり、研究成果を地域と共有し、学外に発信する場として、また創造的な教育研究を生活基盤の側面から支える場として地域との交流も目指している。

2. 8号館の改修

8号館の改修については、教養学部後期課程（文系）および大学院総合文化研究科（文系）の教室として運用するため概算要求を行なってきたが、耐震改修の対象として2005年度の補正予算で認められ、具体的な設計を経て2006年8月に着工、2007年3月に完成した。8号館改修工事に伴い、銀杏並木の外灯・点字ブロック・駒場コミュニケーション・プラザ前の道路等の整備を行なった。

なお、8号館改修と併せて概算要求を行なってきた9号館の改修については、2006年度の概算要求・補正予算では採択されなかったため、引き続き概算要求を行なうことになった。9号館の改修によってスポーツ・身体運動関係の教員研究室が整備されれば、駒場Ⅰキャンパスにおける教員研究室の老朽狭隘問題は一応の解決をみることになる。

3. 6号館および7号館の耐震改修

6号館および7号館は耐震強度が低いため、2006年度の特別措置として耐震補強工事を行なった。7号館耐震補強工事については2006年10月に完了、6号館の耐震補強工事については2007年3月に完了した。

4. 1号館の改修

1号館については、バリアフリー対策の一環としてエレベータの設置が認められ、2006年3月に着工、2006年9月に完成した。これにより、容易に車椅子で進学情報センターおよび学生相談所に行くことが可能になった。

5. 理想の教育に向けたモデル教室（Active Learning Studio (ALS)）の設置

「理想の教育に向けたモデル教室の構築」は、教養学部が情報学環・大総センターとの協力によって、〈理想の教室・理想の教育棟〉のモデルとなる学習空間を駒場Ⅰキャンパスに設置し、ICT（インターネット・コミュニケーション・テクノロジー）支援の強化による教育・学習環境の飛躍的な向上を目指した教育モデルの開発・導入を図るものである。2006年度の特別措置として17号館2階に理想の教育に向けたモデル教室（Active Learning Studio (ALS)）の設置が認められ、2007年3月に完成した。

前期課程教育で開講されている授業の中から「ICT支援によるActive Learning」に適したものを選択してモデル教室で開講し、PRS（Personal Response System）やTablet PCなどのICT手法を導入することにより、〈理想の教室〉を目指したモデル授業を試行する。「基礎演習」、「方法基礎」、「外国語」、「情報」を始めとする多数の授業が対象となり、その効果が全学生に及ぶことが期待される。

22 山内昌之教授「紫綬褒章」受章記念講演会

総合文化研究科の山内昌之教授が、2006年春の紫綬褒章を受章されたことを記念して、6月23日に数理科学研究科大講義室で特別講演会が開催された。会場は約300人の聴衆で満員となったため、聴衆の一部は中継が見られる隣の2教室に移った。

講演に先立ち、木畑洋一研究科長が挨拶に立ち、受章のお祝いの言葉を述べられた。

山内先生の講演では、まず冒頭でこれまでのご自身の研究の軌跡を4つに分けて話された。第1は第一次世界大戦後のオスマン帝国の解体と中東新秩序形成をソビエト・ロシアとの関係で明らかにすること、第2はロシア帝国とソ連の内部に存在した「忘れられたイスラーム」の歴史と政治の研究、第3は「帝国」としてのソ連の変質や解体を、ロシア人とムスリム系諸民族との相互関係のダイナミズムから明らかにすること、第4は現代イスラームの政治社会現象を解剖する基礎研究である。

この後、第一次世界大戦後に各帝国が解体していく様態の中に今日に至る国際的な紛争と混乱の基本要因があるとの基本的立場から、ご自分の研究の概要を説明された。オスマン帝国はイスラームを共通項として多民族を包含した帝国であり、民族や階級や時には宗教にも関わりなく能力によって官僚・軍人を登用する包摂型の帝国であった。しかしこの帝国は、世俗主義とナショナリズムで武装したヨーロッパ列強が「庇護された啓蒙の民を包含するパクス・オットマニカ」という政治秩序原理を内と外から揺るがすにいたって、危機に瀕することになった。そしてギボンの言う「抑制の精神」を失ったオスマン帝国は、不利な戦争を重ね、第一次大戦の敗北によって解体されていくことになる。その際の秩序再編成において、たとえばオスマン帝国時代の3つの異なった州がイギリスによって人工的な領域に統合されたことが、今日のイラク問題の遠因を作った。また、オスマン帝国の領土を無理な線引きによって分割したことが、パレスチナ問題やケルド問題といった複雑な民族領土問題を生み出したのである。

山内先生によれば、オスマン帝国の衰退と解体および新秩序の形成という問題は、列強間の競争と協調、すなわち国際関係史と密接に結びついている。いわゆる「東方問題」はヨーロッパ列強の対オスマン政策の全体を指す言葉だが、オスマン帝国の領土をめぐるヨーロッパ列強間の競争とかけひきが事の本質だったという意味で、「西方問題」だったともいえる。また「グレートゲーム」もオスマン帝国の旧版図を含むカフカースから中央アジアやアフガニстанを経て、インドにいたる地域で英露両帝国が繰り広げた戦略ゲームだった。ソ連の解体によって「ロシア帝国」も最終的に解体することになったが、その際ソ連がオスマン帝国から切り取っていたカフカースとその周辺にも独立と不安定化の波が押し寄せ、中央アジアとともに、新たなパワーゲームの舞台になっている。以前と違うのは、21世紀に入ってますます米国の存在感が増していることである。

山内先生は、以上のような分析を踏まえ、狭義の中東地域からカフカースひいては中央アジアの一部を包含するイスラーム地域を「メガロ中東」「ネオ中東」の概念で統合的に把握することが必要だと、ソ連解体直後にすでに指摘なさっていた。9・11同時多発テロ以後は、これにアフガニスタンや中央アジアを含めて「大きな中東」として再定義なさっている。

最後にオスマン帝国解体後のトルコに注目した山内先生は、当時のトルコにムスタファ・ケマル・パシャやキャズィム・カラベキル・パシャのような国際関係のリアリズムを理解する軍人政治家がいたことが、トルコの独立の維持とその後の発展を可能にしたと指摘され、英仏とソビエト・ロシアとの確執を利用しようとした2人の政策の応酬を示すオスマン・トルコ語の電文を史料の見本として示され、丁寧に説明された。

「結び」として山内先生は、ご自分の研究の特徴が、国際関係史研究における従来の英仏中心史観に、中東内部からの視点と大国ロシアという要素を入れたこと、戦争や外交を国家間関係だけでなく、それに関わる個人の歴史的役割に注目して分析することにあると述べられた。山



内先生は、ご自分は基本的に歴史学者ではあるが、感性として社会科学にもひきつけられてきたこと、叙述と理論を統合しようとしてきたこと、学者・教育者として仕事を進める使命感と、専門領域をもつ市民として外交にも必要な提言や批判をおこなう義務感との間の葛藤に悩んできたことを率直に話され、「老後の初心」として、中東国際関係史研究の新たな構図を実証的にまとめていく決意を、世阿弥の「年々去来花」という言葉に託して、90分の講演を終えられた。

(学内広報No.1341より一部変更の上転載)

(恒川恵市・西中村浩)

23 ファイサル・ハサン・トラッド サウジアラビア大使講演会

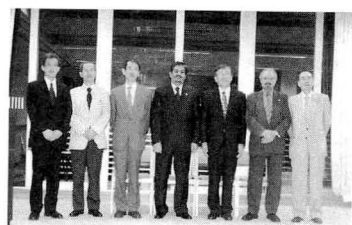
2006年7月10日、サウジアラビアと日本の国交樹立50周年を記念し、相互理解と学術交流を促進するために、駐日サウジアラビア大使のファイサル・トラッド氏による講演会が数理科学研究科棟大講義室で開催された。「サウジアラビアとイスラム 寛容と多文化」と題されたこの講演会は、二部で構成され、16時20分からの前半は、サウジアラビア大使館制作のDVDによってサウジアラビアの現状と日本とのかかわりについてレクチャーが行われ、17時10分からの後半は、大使ご自身による講演（同時通訳）が行われた。講演では、イスラム社会においてサウジアラビアが果たしてきた歴史的役割が、寛容と多文化の観点から語られ、同時に、基層文化を異にする日本とサウジアラビアが今後どのような友好関係を結びうるのかについて、多くの示唆に富む提案がなされた。参加者は120名を超え、質疑応答も熱心に行われた。

講演会に先立って、トラッド大使と木畑研究科長との懇談も行われたが、大使は駒場におけるアラビア語教育やイスラム研究の現状について強い関心をもたれており、また、研究科長も、中東・イスラム世界に対する学生の理解を深めることが重要な課題であることを強調し、今後、両者の協力関係を推し進めていくことが合意された。

講演会の後、ファカルティハウスセミナールームにてレセプションが行われ、トラッド大使やアラブ・イスラーム学院学院長兼サウジアラビア文化担当参事アブジール博士などを交え、和やかな中にも活潑な交流が行われた。

日本社会全体としてはもとより、教養学部設立以来国際関係に深い関心を寄せてきた駒場においても、中東・イスラム世界に対する理解と関心は、欧米やアジア諸国に対するそれに比べると、いまだに啓発が必要な段階であることは否めない。世界情勢を見ても、イスラム世界への理解なしに国際関係を語ることはほとんど不可能であるが、日本におけるイスラム研究の拠点は、その重要性に比して多いとはいえない。サウジアラビアとの国交樹立が50年の節目を迎えたことを機とし、大学院総合文化研究科・教養学部による行事としてこの講演会が企画実行されたことは、今後の駒場の可能性を探る上で、じつに意義深いと言えるだろう。

(齋藤希史)



24 グローバル時代における教育と研究

ドイツ連邦共和国アネッテ・シャヴァーン教育研究大臣講演会



アネッテ・シャヴァーン大臣

2006年10月31日に、総合文化研究科とドイツ・ヨーロッパ研究センターの主催により、ドイツから来日したアネッテ・シャヴァーン連邦教育研究大臣による講演会が数理科学研究科棟大講義室にて開催された。

シャヴァーン連邦教育研究大臣は、1995年から2005年にかけてドイツのバーデン＝ヴュルテンベルク州で文化・青少年・スポーツ大臣の任にあった。ドイツでは教育は州の管轄事項である。各州のあいだの調整・協力のために連邦レベルには、教育・研究・文化を担当する各州の大臣による常設文部大臣会議が設けられており、シャヴァーン大臣は、バーデン＝ヴュルテンベルク州での在任中、2001年にはこの機関の議長も務めた経験をもつ。現在、教育行政に関してドイツでも有数の見識と経験ある政治家として知られるシャヴァーン大臣は、こうした実績により、2005年秋のアンゲラ・メルケル政権発足にあたり、ドイツで技術革新と成長のための教育研究振興を担当する連邦教育研究省の大臣に就任した。

「グローバル時代における教育と研究」と題した講演では、国際競争と大学改革のさなかにあって、今、大学に求められるものは何なのかがテーマとなった。シャヴァーン大臣が強調したのは、今日、学術研究の進歩と革新のためには国際的な協調と競争が不可欠であること、また産学連携や技術革新が叫ばれるなかでも今日の進んだ技術をいかに扱うかという倫理的な判断と価値基準の基盤として古典的な意味での教養や伝統的な知がおろそかにされてはならないこと、その意味で幅広い教養と細分化された専門的知識の双方を備えた人材が必要とされていること、そのために知が新しく形を変えつつも世代を超えて継承されていく環境が制度として整えられなければならないことであった。大臣による講演の後にはフロアから活発な質問が出され、講演会は予定していた時間を大幅に延長して行われた。講演会には本学教職員・学生等約250名が参加し、盛会であった。



合意文書に調印する木畑洋一研究科長とイ・ヤンゼンDAAD東京所長

今回の講演会の冒頭では、シャヴァーン大臣と小宮山宏総長の立会いの下、「ドイツ学術交流会（DAAD）と東京大学の間の東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターの助成に関する合意文書」への調印式が行われた。総合文化研究科とDAADの間では、ドイツ・ヨーロッパ研究センターの前身である「DESK（ドイツ・ヨーロッパ研究室）」の時期を含めて、東京大学におけるドイツ・ヨーロッパに関する教育・研究プログラムの支援に関して、2000年以降、これまでに二度の合意文書が交わされている。今回の合意は、シャヴァーン大臣の来日を期に、国際的な学術交流の場としてのドイツ・ヨーロッパ研究センターのさらなる発展に尽力することについて両者が改めて合意したものである。今回は、とくに2006年4月に総合文化研究科に開設され、センターがコーディネートを担当している大学院修士課程コース「欧州研究プログラム（ESP）」の充実が合意の重点として盛り込まれた。

シャヴァーン大臣の今回の来日に際しては、I・アイグナー、Th・オバーマン、M・クレチュマーの3名のドイツ連邦議会議員に加えて、ドイツ研究協会のE-L・ヴィンアカー会長、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ協会のE・リーチェル会長、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団のG・シュッテ事務総長ら、ドイツの主要な学術団体の代表が同行していた。講演会の際には、シャヴァーン大臣以下総勢20名を超える随行団が、2006年夏に着任したばかりのH-J・デア新駐日ドイツ大使とともに駒場キャンパスを来訪した。シャヴァーン大臣、随行団と小宮山総長の間では講演会に先立って懇談が行われ、日独の大学教育とそれを取り巻く環境について意見交換があった。そのほか、講演会終了後には、大臣に随行した学術関係者に総合文化研究科の研究の一端を紹介する意味で浅島誠教授の案内により、アドバンスト・リサーチ・ラボラトリーの見学が行われた。また次いで、広域科学専攻から菅原正教授、小宮山進教授、ドイツ・ヨーロッパ研究センターから山脇直司教授、森井裕一助教授など、ドイツに関連

の深い教員を交えた懇談の席も設けられ、そこでも日独における研究の現状についての情報提供や意見交換が行われ、意義ある学术交流の機会となった。

(ドイツ・ヨーロッパ研究センター 川喜田敦子)

付属資料1

2006(平成18)年度授業日程表

4月10日(月)～7月19日(水)	第1・3学期授業
7月20日(木)～7月31日(月)	第1・3学期試験前半
8月1日(火)～8月31日(木)	夏季休業
9月1日(金)～9月5日(火)	第1・3学期試験後半
9月6日(水)～10月5日(木)	秋季休業
10月6日(金)～12月22日(金)	第2・4学期授業前半
12月23日(土)～平成19年1月8日(月)	冬季休業
1月9日(火)～2月1日(木)	第2・4学期授業後半
2月2日(金)～2月15日(木)	第2・4学期試験

教養学部 of 授業時間

1時限	9時00分～10時30分
2時限	10時40分～12時10分
3時限	13時00分～14時30分
4時限	14時40分～16時10分
5時限	16時20分～17時50分

2006(平成18)年度志願・合格・入学状況

教養学部前期課程

科 類	試験日程	志願者	受験者	合格者	入学者	定員外		入学者総数
						特選第1種	国費	
文科一類	前期	1,581	1,130	382	382	1	4	430
	後期	923	207	43	43			
二類	前期	1,115	990	331	331	4	2	375
	後期	672	187	38	38			
三類	前期	1,538	1,298	439	437	2	6	499
	後期	981	247	54	54			
理科一類	前期	2,726	2,565	1,048	1,044	5	16(5)	1,188
	後期	2,084	568	125	123			
二類	前期	2,179	1,720	512	508	3	2(1)	575
	後期	639	278	62	62			
三類	前期	440	318	80	80	0	0	90
	後期	175	43	10	10			
計	前期	9,579	8,021	2,792	2,787	15	30(6)	3,157
	後期	5,474	1,530	332	329			

定員外・国費欄の()内は外国政府派遣・日韓共同理工系学部留学生を内数で示す。

教養学部後期課程

学 科	平成18年度進学者	学士入学者等
超域文化科学科	27	
地域文化研究学科	38	
総合社会科学科	32	
基礎科学科	34	
広域科学科	13	
生命・認知科学科	16	1
計	160	1

大学院総合文化研究科

専 攻	修士課程			博士後期課程		
	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者
言語情報科学	84	30	30	42	20	20
超域文化科学	140	36	32	48	21	21
地域文化研究	95	38	37	57	29	29
国際社会科学	156	24	22	41	11	10
広域科学	244	127	114	85	78	75
（生命環境科学系）	(88)	(52)	(42)	(35)	(32)	(31)
（広域システム科学系）	(44)	(26)	(26)	(25)	(21)	(20)
（関連基礎科学系）	(112)	(49)	(46)	(25)	(25)	(24)
計	719	255	235	273	159	155

2007(平成19)年度進学内定者数

2006年10月3日

学 部 学 科	定数	内 定 者							数	外国人留学生(定数外)内訳				
		文一	文二	文三	理一	理二	理三	小 計		A	B	C	D	計
法	415	417<5>	1	6	6	1		431<5>	432<5>	3	1	1		5
		1						1<0>						
								0<0>						
医 学	100				1	10	90	101<0>	101<0>					0
								0<0>						
								0<0>						
健康科学 ・看護学	40			4		16		20<0>	28<0>					0
				2		3		5<0>						
						3		3<0>						
工	945		1	5	588<27>	48		642<27>	942<27>	12	1	6	8	27
			1	1	291			293<0>						
					7			7<0>						
文	416		7	244<3>	2	3		256<3>	345<3>	3				3
		1	2	68	6	12		89<0>						
								0<0>						
理	287				147<7>	52<1>	2	201<8>	316<8>	5		3		8
					60	53		113<0>						
						2		2<0>						
農	290		1	8	18	155<1>		182<1>	289<1>			1		1
				3	6	96		105<0>						
						2		2<0>						
経済	365		332<5>	8	4	3		347<5>	359<5>	2		3		5
			12					12<0>						
								0<0>						
教養	183	7	15	41<4>	19	23		105<4>	171<4>	4				4
		2	6	26	6	19		59<0>						
				2	3	2		7<0>						
教育	97	2	1	56<1>	6	4		69<1>	105<1>	1				1
				29	4	3		36<0>						
								0<0>						
薬	80				14	42<1>		56<1>	92<1>				1	1
					3	33		36<0>						
								0<0>						
計	3,218	426<5>	358<5>	372<8>	805<34>	357<3>	92<0>	2,410<55>	3,180<55>	30	2	15	8	55
		4<0>	21<0>	129<0>	376<0>	219<0>	0<0>	749<0>						
		0<0>	0<0>	2<0>	10<0>	9<0>	0<0>	21<0>						
総 計	3,218	430<5>	379<5>	503<8>	1,191<34>	585<3>	92<0>	3,180<55>	3,180<55>	30	2	15	8	55

備考 1. 〈 〉は外国人留学生（定数外）で外数
2. 上段：第一段階 中段：第二段階 下段：再志望
3. A：日本政府（文部科学省）奨学金留学生 B：外国政府派遣留学生 C：外国学校卒業学生特別選考第1種 D：日韓共同理工系学部留学生

定員の推移 2001(平成13)年度～2006(平成18)年度

教養学部前期課程入学定員

年 度		平成13 2001		平成14 2002		平成15 2003		平成16 2004		平成17 2005		平成18 2006	
科 類	文科一類	605		605		605		415		415		415	
	文科二類	365		365		365		365		365		365	
	文科三類	495		485		485		485		485		485	
	理科一類	1,147		1,147		1,147		1,147		1,147		1,147	
	理科二類	551		551		551		551		551		551	
	理科三類	90		90		90		90		90		90	
計		1,465		1,455		1,455		1,265		1,265		1,265	
		1,788		1,788		1,788		1,788		1,788		1,788	
		3,253		3,243		3,243		3,053		3,053		3,053	

教養学部後期課程受入定員

年 度		平成13 2001		平成14 2002		平成15 2003		平成16 2004		平成17 2005		平成18 2006	
学 科	超域文化科学科	20		20		20		20		20		20	
	地域文化研究学科	35		35		35		35		35		35	
	総合社会科学科	10		10		10		10		10		10	
	基礎科学科	40		40		40		40		40		40	
	広域科学科	20		20		20		20		30		30	
	生命・認知科学科	15		15		15		15		15		15	
計		140		140		140		140		140		140	

大学院総合文化研究科入学定員

年 度		平成13 2001		平成14 2002		平成15 2003		平成16 2004		平成17 2005		平成18 2006	
課 程		修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士
専	言語情報科学	30	24	30	24	33	26	37	27	37	27	37	27
	超域文化科学	41	29	41	29	41	29	41	29	41	29	41	29
	地域文化研究	43	27	43	27	43	27	47	28	47	28	47	28
	国際社会科学	34	23	34	23	34	23	38	24	38	24	38	24
攻	広域科学*	100	61	102	62	102	62	106	63	106	63	106	63
	(生命環境科学系)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)
	(広域システム科学系)	(25)	(15)	(27)	(16)	(27)	(16)	(31)	(17)	(31)	(17)	(31)	(17)
	(相関基礎科学系)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)
計		248	164	250	165	253	167	269	171	269	171	269	171
		412		415		420		440		440		440	

*印 広域科学専攻は3系からなり、各系の入学定員は目安である。

2006(平成18)年度クラス編成表（１年）

(2006年５月１日現在)

	文科一類		文科二類		計
	入学	留年	入学	留年	
1 A	2		1		3
2 C	3		4		7
3 E	3		1		4
4 G	9		5		14
5 I	5		3		8
6 H	21		19		40
7 H	21		19		40
8 H	21		19		40
9 H	21		18		39
10 F	19		18		37
11 F	19		18		37
12 F	19		18		37
13 F	19		18		37
14 F	19	1	18		38
15 F	19		17		36
16 F	18		18		36
17 F	18		18		36
18 B	19		16		35
19 B	19		15		34
20 B	18		16		34
21 B	18		16		34
22 D	17		13		30
23 D	17	1	13		31
24 D	16	1	14	1	32
25 D	16		14		30
26 D	17		13		30
27 D	17		13		30

(合計809)

	文科三類		計
	入学	留年	
1 A			
2 C	3		3
3 E	2		2
4 G	16		16
5 I	16		16
6 K			
7 H	34	1	35
8 H	34		34
9 F	35		35
10 F	35	2	37
11 F	35	1	36
12 F	34		34
13 B	28		28
14 B	28		28
15 B	28		28
16 B	27		27
17 D	36	1	37
18 D	36		36
19 D	36	1	37
20 D	36	1	37

(合計506)

- A：ドイツ語既修クラス
B：ドイツ語初修クラス
C：フランス語既修クラス
D：フランス語初修クラス
E：中国語既修クラス
- F：中国語初修クラス
G：ロシア語初修クラス
H：スペイン語初修クラス
I：韓国朝鮮語初修クラス

総計3,199名

	理科一類		計
	入学	留年	
1 A			
2 C	4		4
3 E	4		4
4 G	26	2	28
5 I	20		20
6 I	20	1	21
7 H	35		35
8 H	36		36
9 H	35		35
10 H	33	1	34
11 F	34		34
12 F	34		34
13 F	35		35
14 F	33		33
15 F	35		35
16 F	35		35
17 F	33		33
18 F	33	1	34
19 F	33	1	34
20 B	34		34
21 B	34		34
22 H	34		34
23 B	34		34
24 B	33	1	34
25 B	33	1	34
26 B	35		35
27 B	33		33
28 B	33	1	34
29 B	33		33
30 B	33		33
31 B	33		33
32 B	33	1	34
33 B	33	2	35
34 D	33	1	34
35 D	33		33
36 D	35		35
37 D	35		35
38 D	32		32
39 H	34		34

(合計1,201)

	理科二類		理科三類		計
	入学	留年	入学	留年	
1 A					
2 C	1				1
3 E	1				1
4 G	7		2		9
5 I	9	1	3		13
6 H	31		6		37
7 H	31		6		37
8 H	31	4	5		40
9 F	32		3		35
10 F	32	2	3		37
11 F	32	1	3		36
12 F	31	2	3		36
13 B	32		4		36
14 B	31	1	4		36
15 B	32		4		36
16 B	31	2	5		38
17 B	31		5		36
18 B	31	2	5		38
19 B	31	2	4		37
20 B	32		4		36
21 D	28		8		36
22 D	27	1	8		36
23 H	31		5		36

(合計683)

2006(平成18)年度クラス編成表（2年）

(2006年5月1日現在)

文科一類		文科二類		計
進級	留年	進級	留年	
1 A	1			1
2 C	4	1		5
3 E		1		1
4 F	22	3	26	54
5 F	22		26	50
6 F	22	1	26	52
7 F	22		25	50
8 F	23	3	25	55
9 F	22	2	26	52
10 G	6	2	1	10
11 H	22	1	25	53
12 H	21	3	25	50
13 H	11	1	13	25
14 I	14	1	7	27
15 B	26	2	19	48
16 B	26	3	19	51
17 B	26		19	47
18 B	13		9	22
19 D	26	1	18	47
20 D	27	1	18	47
21 D	27	4	18	49
22 D	28	3	16	48
23 D	13	1	9	23

(合計867)

文科三類		計	
進級	留年		
1 A	2	2	
2 C	5	5	
3 E	3	3	
4 F	51	4	55
5 F	51	1	52
6 F	27	6	33
7 G	15	1	16
8 H	46	3	49
9 H	23	1	24
10 I	12	3	15
11 B	46	8	54
12 B	46	5	51
13 B	23		23
14 D	42	5	47
15 D	41	4	45
16 D	40	8	48
17 D	20	3	23

(合計545)

A：ドイツ語既修クラス

B：ドイツ語初修クラス

C：フランス語既修クラス

D：フランス語初修クラス

E：中国語既修クラス

F：中国語初修クラス

G：ロシア語初修クラス

H：スペイン語初修クラス

I：韓国朝鮮語初修クラス

総計3,530名

	理科一類		計
	進級	留年	
1 A	2	1	3
2 C	5		5
3 E	3		3
4 F	49	11	60
5 F	49	10	59
6 F	49	7	56
7 F	48	6	54
8 F	48	8	56
9 F	47	15	62
10 F	23		23
11 G	19	2	21
12 H	51	10	61
13 H	52	5	57
14 H	51	3	54
15 I	35	8	43
16 B	49	7	56
17 B	48	6	54
18 B	48	12	60
19 B	48	7	55
20 B	48	5	53
21 B	48	10	58
22 B	48	5	53
23 B	46	5	51
24 B	48	4	52
25 B	46	8	54
26 D	39	6	45
27 D	41	10	51
28 D	40	10	50
29 D	40	7	47
30 D	20	5	25

(合計1,381)

理科二類		理科三類		計
進級	留年	進級	留年	
1 A	1			1
2 C	1	1		2
3 E	3			3
4 F	42	7	4	53
5 F	42	7	4	53
6 F	40	7	3	50
7 G	12	4	1	17
8 H	41	9	9	59
9 H	43	3	9	55
10 I	14	2	1	17
11 B	40	4	7	51
12 B	41	5	7	53
13 B	41	4	7	53
14 B	39	7	7	53
15 B	40	5	7	52
16 B	39	9	7	55
17 D	31	2	7	40
18 D	31	9	7	48
19 D	16	2	3	22

(合計737)

研究生

総合文化研究科大学院研究生，外国人研究生数

(2006年11月1日現在)

専 攻	大学院研究生	外国人研究生	計
言語情報科学	4	12	16
超域文化科学	2	22	24
地域文化研究	5	8	13
国際社会科学	5	5	10
広域科学	8	4	12
計	24	51	75

大学院研究生の出願資格は，総合文化研究科修士課程修了，博士後期課程修了，同課程満期退学又は同程度の学力を有する者。
外国人研究生の出願資格は，外国籍を有し，大学を卒業又は外国において，学校教育における16年の課程を修了した者。

教養学部研究生数

(2006年11月1日現在)

後期課程	4
------	---

研究生の出願資格は，4年制大学卒業又は同程度の学力を有する者。
(前期課程には，学部研究生制度がない。)

留学生

(2006年11月1日現在)

国 名	学部 学生	大学院学生		短期 交換 留学生	学部 研究生	大学院 外国人 研究生	大学院 研究生	大学院 特別研 究学生	計
		修士	博士						
ネパール	1								1
スリランカ			1						1
タイ	9	2							11
マレーシア	3			1					4
シンガポール			1	1					2
インドネシア	5			1					6
フィリピン	(1) 1	1		1					(1) 3
中国（香港）			3			2			5
韓国	19	20	55	2		17			113
モンゴル	(1) 4								(1) 4
ベトナム	15			1					16
中国	(1) 39	11	27	3		3	1	1	(1) 85
カンボジア	2								2
ラオス	2								2
マカオ	1								1
台湾		6	11			1			18
イラン	1	1							2
トルコ	(1) 1		1						(1) 2
イスラエル						1			1
エジプト			1						1
タンザニア	1								1
オーストラリア	3		1			1			5
ニュージーランド			1	2		1			4
カナダ			2						2
アメリカ合衆国			1	2		6		1	10
メキシコ			1						1
ブラジル	4					3			7
パラグアイ	1								1
チリ				1					1
フィンランド	1								1
スウェーデン	1								1
イギリス			1	2					3
ルクセンブルグ			1						1
オランダ			1						1
ドイツ			1	1		3			5
フランス			2	3		4			9
スペイン						1			1
イタリア			1						1
スイス				1					1
ポーランド		2							2
チェコ						1			1
ハンガリー	(1) 1		1			1			(1) 3
ルーマニア		2				1			3
ブルガリア	3		2						5
ロシア			5			4			9
エストニア		1							1
スロバキア		1							1
ウズベキスタン		1							1
カザフスタン	(2) 3								(2) 3
スロベニア			1			1			2
計	(7) 121	48	122	22	0	51	1	2	(7) 367

※学部学生数の（ ）付数字は後期課程学生を内数で示す。

※国・地域名は東京大学概要の表記方法に従った。

付属資料2

シンポジウム

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
国際シンポジウム 「ジェノサイド後の社会の再編 成 平和のためのコミュニティ ー・ミュージアム」 スペイン語(通訳つき)	国立民族学博物館第4セミナー 室 2006.3.11	狐崎知己(専修大学)「国家補償と地 域社会」, フェルナンド・モスコソ (グアテマラ NGO Historial para la Paz代表), バッサム・イード(Director of PHRMG-Palestine Human Rights Monitoring Group), 飯島みどり(立教 大学), 石田勇治(東京大学), 佐藤安 信(東京大学), 渋谷賢(東京農工大), 久松佳彰(東洋大学), 平井京之介(国 立民族学博物館), 関雄二(国立民族 学博物館)	日本学術振興会「人文・社会科 学振興プロジェクト研究事業」 領域Ⅱ-1, 「ジェノサイド研究 の展開」(CGS)	
国際シンポジウム 「暴力／ジェノサイドの記憶— 平和構築過程におけるその意 味」 日本語, 英語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.3.18	フェルナンド・モスコソ(NGO「平 和のための歴史」代表, グアテマラ ・シティ), 狐崎知己(専修大学), マ リンダ・ロワリー(ハーバード大学), マルコ・ハイディニャク(少数派・ 異文化間関係研究国際センター, ソ フィア), テオドル・ハンフ(ユネ スコ国際人文科学研究所, ビプロス), 石田勇治(東京大学), 古矢旬(北海道 大学)	日本学術振興会「人文・社会科 学振興プロジェクト研究事業」 領域Ⅱ-1「平和構築」	
「江戸の声：日本の音楽が語り えたもの」 日本語	駒場キャンパス 数理科学研究科棟大講堂 2006.4.23	竹内道敬(前国立音楽大学教授)「江 戸の三味線音楽」, 兵藤裕己(学習院 大学文学部教授)「身体近代化と歌 舞伎の音楽性」, 松岡心平(東京大学 大学院総合文化研究科教授)「能の音 楽から歌舞伎へ」, 司会：ロバートキ ャンベル(東京大学大学院総合文化 研究科助教授)	駒場国漢フォーラム	
新入生歓迎シンポジウム「生死 を超えて—ふたたび仏教を問 う」	駒場キャンパス 学際交流ホール 2006.4.24	末本文美士(UTCP), 小林康夫(UTCP), 中島隆博(UTCP), 竹内整一(DALS)	21世紀COE共生のための国際 哲学交流センター	共催： 21世紀COE「生命の文化・価値をめぐる死生学の 構築(DALS)」
認知言語学の歴史的背景と考え 方の特徴 日本語	本郷キャンパス 法文2号館1番大教室 2006.5.6	坂原茂(東京大学), 井上京子(慶応義 塾大学), 西村義樹(東京大学), 大堀 壽夫(東京大学)	人文社会系研究科言語学教室/ 言語情報科学専攻	

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
新入生と考える〈教養〉問題 日本語	駒場キャンパス 数理科学研究科棟大講義室 2006.5.12	爆笑問題(太田光・田中裕二), 小林 康夫(東京大学)	東京大学教養学部附属教養教育 開発機構	協力: NHK
「人間の安全保障」と「持続可 能な開発」 日本語・英語	駒場キャンパス 学際交流ホール 2006.5.31	吉村幸雄(世界銀行副総裁兼駐日特 別代表), スティーン・ジョーゲンセ ン(世界銀行持続可能な開発担当副 総裁代理), 牧野耕司(国際協力機構), フィロメノ・サンタ・アナ(Social Watch), 牧野耕司(国際協力機構), 山形辰史(日本貿易振興機構アジア 経済研究所)	東京大学大学院総合文化研究科 「人間の安全保障」プログラム 世界銀行東京事務所, 日本貿易 振興機構アジア経済研究所	
モンゴルの演劇と映画 in Komaba モンゴル語・日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2007.6.22	ダムディンスレンギーン・ツェドマ ー(モンゴル国立演劇博物館館長), ブレブドルジーン・ツェレンダグワ (モンゴル国立ドラマアカデミック 劇場), ダグワドルジーン・メンドバ ヤル(モンゴル国立ドラマアカデミ ック劇場), ドグミディン・ソソルバ ラム(チェイノム名称ひとり劇団「オ ドテアトル」主宰)他	東京大学大学院総合文化研究科 表象文化論研究室+早稲田大学 演劇博物館21世紀COE「演劇 の総合的研究と演劇学の成立」	
「生活の中の祈り：一神教にお ける神との交わりの諸相」 日本語	駒場キャンパス 教養学部学際交流ホール 2006.6.24	市川裕(東京大学教授, 大学院人文社 会系研究科・基礎文化専攻・宗教学 宗教史学), 嶋田英晴(東京大学大学 院宗教学博士課程), 山本伸一(東京 大学大学院宗教学博士課程), Her- man Gottschewski(東京大学助教授), 杉田英明(東京大学教授, 大学院総合 文化研究科・地域文化研究専攻)	21世紀COE拠点形成プログラ ム 生命の文化・価値をめぐる 「死生学」の構築(大学院人文社 会系研究科)	
Yuji Ichioka: His Life, Works, and Legacy in Immigration Studies 「ユウジ・イチオカ」と移民研究 英語・日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.7.16	東栄一郎(University of Pennsylvania), 飯野正子(津田塾大学学長), 桑井輝 子(白百合女子大学教授), 村上由見 子(作家/慶応大学講師), 庄司啓一 (城西大学教授), 富田虎男(立教大 学名誉教授), 米山裕(立命館大学教 授), 油井大三郎(東京女子大学教授), 能登路雅子(東京大学アメリカ太平 洋地域研究センター長), Brian Niiya (University of Hawaii), Karen Umemoto (University of Hawaii), Tritia Toyota (UCLA), Edward Park(Loyola Mary- mount University), Don Nakanishi (UCLA)	アメリカ太平洋地域研究センタ ー, UCLAアジア系アメリカ研 究センター	後援: 移民研究会, UCLA日本同窓会

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
第17回21世紀COEプログラム セミナー「シンボルグラウンディング問題とembodiment」 日本語	アドバンストラボ410 2006.7.21	池上高志(東京大学), 森本元太郎(東京大学)	21世紀COE融合科学創成ステーション	
近代東亜の知識生産と転換 中国語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.7.21	梅家玲(台湾大学教授), 陳平原(北京大学教授), 王中忱(清華大学教授), 白永瑞(延世大学教授), 山口守(日本大学教授), 黄英哲(愛知大学教授), 尾崎文昭(東洋文化研究所教授)	大学院総合文化研究科 村田雄二郎	
HYI Alumni Meeting Japan 2006 歴史学とアジアの近代的学問編成 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.7.22	辛島昇(東京大学名誉教授, 大正大学), 岸本美緒(東京大学), 大塚和夫(東京外国語大学), 小谷汪之(学術会議), 陳 遠(中央研究院), 白永瑞(延世大学) 王中忱(清華大学), 中島隆博(東京大学), 村田雄二郎(東京大学), 遠藤泰生(東京大学)	日本ハーバード・イェンチン研究所同窓会	共催: 日本学術会議, 東方学会, 東京大学アメリカ太平洋地域研究センター 協賛: 国際交流基金
第18回21世紀COEプログラム セミナー「脳の新規ホルモンと記憶・情動・睡眠の制御: アクチビン・オレキシシン・性ホルモン」 日本語	アドバンストラボ410 2006.7.29	井ノ口馨(三菱化学学生命科学研究所), 桜井武(筑波大学), 川戸佳(東京大学)	21世紀COE融合科学創成ステーション	
The Fourth International Conference on Construction Grammar (ICCG4) 英語	駒場キャンパス I 数理科学研究科棟大講義室 18号館コラボレーションルーム1 2006.9.1-3	Collin Baker, Charles J. Fillmore, Adele Goldberg, Yukio Hirose, Knud Lambrecht, Yo Matsumoto, Jan-Ola Ostman, Masayoshi Shibatani, Michael Tomasello	21世紀COE「心とことば—進化認知科学的展開」, 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」	
2nd International Conference of Phenomenology for East Asian Circle	国立オリンピック記念青少年総合センター 2006.9.22-25	Chan-Fai CHEUNG (The Chinese University of Hong Kong), Kah Kyung CHO (State University of New York at Buffalo), Zae-Shik CHOI (Kangnung National University), Steven CROWELL (Rice University), Lester EMBREE (Florida Atlantic University), Jung-Sun HAN HEUER (Methodist Theological Seminary), Seong-Ha HONG (Woosuk University), Kuan-Min HUANG (Hua-fan University), Kohji ISHIHARA (Hokkaido University), Shunsuke KADOWAKI (UTCP, The University of Tokyo), Tetsuya KONO (Tama-gawa University), Tze-wan KWAN (The Chinese University of Hong Kong), Kwok-ying LAU (The Chinese University of Hong Kong), Jong-Kwan LEE (Sung Kyun Kwan University),	21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」	共催: 日本現象学会

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
		Nam-In LEE (Seoul National University), Li Zhongwei (Peking University), Dieter LOHMAR (Husserl-Archiv, Universitaet zu Koln), Ping-Keung LUI (The Polytechnic University of Hong Kong), Jeff MALPAS (University of Tasmania), Junichi MURATA (UTCP, The University of Tokyo), Shinya NOE (Tohoku Institute of Technology), Yukiko OKAMOTO (Tokyo Kasei-Gakuin University), Tetsuya SAKAKIBARA (The University of Tokyo), Masayoshi SOMEYA (UTCP, The University of Tokyo), Cheng-Yun TSAI (National Sun Yat-Sen University), Wen-Sheng WANG (National Chengchi University), Zhihua YAO (The Chinese University of Hong Kong), Chung-Chi YU (Soochow University), ZHU Gang (Sun Yat-Sen University), ZHANG Xian-glong (Peking University)		
U.S. Cultural Diplomacy in Asia: Strategy and Practice 英語	駒場キャンパス I 18号館コラボレーションルーム I 2006.9.30	Yasuo Endo (University of Tokyo), Susan Smulyan (Brown University), Fumiko Fujita (Tsuda College), Thomas Zeiler (University of Colorado, Boulder), Discussant: Masako Notoji (University of Tokyo)	アメリカ太平洋地域研究センター	共催： 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻， 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻， 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」， 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」
「日米関係のコンテキスト」 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.9.30	山本吉宣(東京大学名誉教授・青山学院大学国際政治経済学部教授)，森本敏(拓殖大学海外事情研究所長)，Charles D. Lake II(在日米国商工会議所会頭)，久保文明(東京大学大学院法学政治学研究科教授)，李元徳(韓国国民大学校教授)，岡山裕(東京大学アメリカ太平洋地域研究センター助教授)，小寺彰(東京大学アメリカ太平洋地域研究センター教授)，能登路雅子(東京大学アメリカ太平洋地域研究センター長)	アメリカ太平洋地域研究センター	共催： 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻， 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻， 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」， 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」
New Perspectives on the Future of Europe 英語	駒場キャンパス 数理科学研究科棟大講義室 2006.10.12	遠藤乾(北海道大学)，Frank Schmelfennig(チューリッヒ工科大学)，Gunther Hellmann(フランクフルト大学)，岩間陽子(政策研究大学院大学)	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター	

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
東京大学シンポジウム：近現代 中国と東アジアの公共性——自 由と統合をめぐる 中国語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.10.14-15	薛化元(国立政治大学・教授), 若林 正丈(東京大学・教授), 久保亨(信州 大学・教授, 白永瑞(延世大学・教 授), U・Bulag(ニューヨーク市立大 学・助教授), 麻国慶(中山大学・教 授), 水羽信男(広島大学・助教授)	大学院総合文化研究科(村田雄 二郎), 台湾国立政治大学歴史 学系(唐啓華)	
天使と現代—思想的, 文学的, 美術的, 比較宗教的観点から—	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションル ーム1 2006.10.20	末本文美士(UTCP)「仏教における 天」, 金山椿(西江大学校哲学科助教 授)「キリスト教的天使の理解」	21世紀COE「共生のための国 際哲学交流センター」	
翻訳の言語態——モーリス・ブ ランショ, 文学, 言語 フランス語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションル ーム1 2006.10.21	ジゼール・ベルクマン(パリ第7大 学), ドミニク・ラバテ(ボルドー大 学), 湯浅博雄(東京大学), 上田和彦 (関西学院大学), 安原伸一郎(東京大 学), 郷原佳以(東京大学), 西山雄二 (東京大学)	「翻訳の言語態」研究(学術振興 会科学研究費による基盤研究 B)	
検証! カンボジア和平協定か ら15年を振り返る—貧富の格差 の縮小と民主的社会的実現に向 けて 日本語・英語	駒場キャンパス 数理科学研究科棟大講義室 2006.10.22	今川幸雄(元駐カンボジア特命全権 大使), 明石康(元国連事務次長/元 国連カンボジア暫定統治機構国連事 務総長特別代表), ヨーン・サン・コ マー(カンボジア農業開発研修セン ター), チュット・ソム・アート(カ ンボジアNGOフォーラム), リー・ テリー(子どもヘルスケア・センタ ー), トウン・サライ(カンボジア人 権開発協会), チア・ヴァンナート (社会開発センター), 田坂興亜(カン ボジア市民フォーラム), 河野雅治 (外務省総合外交政策局), カウ・ク ムフォン(カンボジア王国外務国際 協力省)	カンボジア市民フォーラム	共催者: 東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」 プログラム, 平和構築研究会, 日本学術振興会「人 文・社会科学振興プロジェクト研究事業」領域Ⅱ- 1「平和構築に向けた知の展開」・「ジェノサイド研 究の展開」グループ
ワークショップ「雑誌メディア における視覚文化」 日本語	駒場キャンパス 18号館コラボレーションルーム3 2006.11.10	竹内信夫(総合文化研究科教授), 三 浦篤(同), 今橋映子(同研究科助教 授), 前島志保(同研究科博士課程), 韓程善(同), 陳岡めぐみ(早稲田大 学人間科学学術院)	比較芸術フォーラム(超域文化 科学専攻・比較文学比較文化研 究室)	
拡大EUのフロンティア —トルコとの対話— 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.11.10	八谷まち子(九州大学), 間寧(アジア 経済研究所), 森井裕一(東京大学)	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研 究センター	
〈正義〉のさまざまな顔—普遍 か特殊か、裁きか赦しか 日本語・英語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.11.11	マイケル・オティム(ウガンダ・グ ル県NGOフォーラム), 榎本珠良(国 際社会科学専攻・「人間の安全保障」 プログラム博士後期課程), 高橋哲哉 (超域文化科学専攻・「人間の安全保 障」プログラム), 柴宜弘(地域文化	東京大学大学院総合文化研究科 「人間の安全保障」プログラム (文部科学省研究拠点形成費等 補助金《「魅力ある大学院教育」 イニシアティブ》事業)	

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
		研究専攻・「人間の安全保障」プログラム), 森山工(地域文化研究専攻・「人間の安全保障」プログラム)		
「比較文学研究の最前線——南米・インド・日本」 Cutting Edge Approaches to Comparative Literature: Latin America, India, Japan 英語	駒場キャンパス 18号館コラボレーションルーム2 2006.11.20	エドゥアルド・クティニーニョ Eduardo Coutinho(リオデジャネイロ大学教授), ドロシー・フィゲイラ Dorothy Figueira(ジョージア大学教授), 川本皓嗣(本学名誉教授, 大手前大学学長), 上垣外憲一(帝塚山学院大学教授)	超域文化科学専攻・比較文学比較文化研究室、東大比較文学会	共催: 日本比較文学会国際活動委員会
歴史を学ぶということー「人間の安全保障」と地域秩序 日本語	駒場キャンパス 学際交流ホール 2006.11.24	入江昭(ハーヴァード大学名誉教授・元米国歴史学会会長), 原田明夫(財団法人国際民商事法センター理事長・元検事総長), 木畑洋一(総合文化研究科研究科長), 石井明(国際社会科学専攻), 山影進(国際社会科学専攻・「人間の安全保障」プログラム), 大江博(国際社会科学専攻・「人間の安全保障」プログラム)	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(文部科学省研究拠点形成費等補助金《「魅力ある大学院教育」イニシアティブ》事業)	
第14回東京大学大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻シンポジウム人種と人種主義を問う～地域文化研究の視点から～	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.11.25	石田勇治(地域文化研究専攻, DESK, CGS), 近藤光博(中央大学総合政策学部), 齋藤成也(国立遺伝学研究所), 矢口祐人(地域文化研究専攻), 石橋純(地域文化研究専攻), 奥那覇潤(地域文化研究専攻・博士課程), アルヴィ宮本なほ子(地域文化研究専攻), 増田一夫(地域文化研究専攻), 弓削尚子(早稲田大学法学部), 村田雄二郎(地域文化研究専攻)	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻	共催: 東京大学大学院総合文化研究科アメリカ太平洋地域研究センター(CPAS), 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK), 日本学術振興会「人文・社会科学振興プロジェクト研究事業」領域Ⅱ-1, 「ジェノサイド研究の展開」(CGS)
第19回21世紀COEプログラムセミナー「構造生物学の最前線: 試料調製、X線、NMR、電子顕微鏡、計算機シミュレーション」 日本語	アドバンストラボ410 2006.12.2	栗栖源嗣(東京大学), 北尾彰朗(東京大学), 高木純一(大阪大学)	21世紀COE融合科学創成ステーション	
科学的知識の伝達・理解・発見 —何ができたか、どうしたら、 「理解した」となるのか?	駒場キャンパス 数理科学研究科棟大講義室 2006.12.3	中島秀人(東京工業大学), 本間栄男(UTCP), 夏目賢一(金沢工業大学), 串田純一(UTCP), 柴田崇(UTCP), 中島秀人(東京工業大学), 福島真人(東京大学), 林衛(富山大学)	21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」	共催: STS Network Japan
李清俊——「恨」と文学 日本語, 韓国語	駒場キャンパス I 18号館コラボレーションルーム1 2006.12.11-13	李清俊, 宮本久雄(総合文化研究科教授), 菅原克也(同), 具正謨(上智大学講師), 黄善英(COE特任研究員)	21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター(UTCP)」	共催: 超域文化科学専攻・比較文学比較文化研究室

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト・参加者	主催者	その他
大学1・2年次における自然科学実験の特色ある取組み 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2006.12.23	兵頭俊夫(東京大学), 藤井研一(大阪大学), 中村博(北海道大学), 秋山豊子(慶應義塾大学), 久我隆弘(東京大学), 村田滋(東京大学), 藤原誠(東京大学), 永田敬(東京大学)	東京大学教養学部附属教養教育開発機構	
東アジア女性哲学ネットワーク第二回会議「東アジア的ジェンダー概念」の可能性と必然性	駒場キャンパス 18号館4Fコラボレーションルーム1・4 2007.1.5-6	北川東子(東京大学), 金恵淑(梨花女子大), 文潔華(香港バプティスト大学), 韓承美(延世大学), 陳昭如(国立台湾大学)	21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」	協賛： 一高記念基金
第20回21世紀COEプログラムセミナー「オートファジー研究の最前線！」 日本語	アドバンストラボ410 2007.1.13	大隈良典(自然科学研究機構), 大島昇(東京医科歯科大学), 阪井康能(京都大学)	21世紀COE融合科学創成ステーション	
第8回シンポジウム(公開) —分子スピン：ナノ磁石から生体スピン系まで— 日本語	駒場キャンパス 数理科学研究科棟大講義室 2007.1.13-14	菅原正(東京大学), 阿波賀邦夫(名古屋大学), 内海英雄(九州大学), 横山利彦(分子研), 古賀登(九州大学), 工位武治(大阪市立大学)	科研費特定領域研究「分子スピン」 スピンとナノ機能班班長 菅原正(相関基礎科学系)	
Workshop Komaba 2007, Recent Developments in Strings and Fields 英語	駒場キャンパス 18号館ホール 2007.2.10-2.11	A. Jevicki (Brown University), I. Klebanov (Princeton University), W. Taylor (Massachusetts Institute of Technology), S. Wadia (Tata Institute of Fundamental Research), T. Eguchi (University of Tokyo), H. Kawai (Kyoto University), N. Sakai (Tokyo Institute of Technology), N. Ishibashi (Tsukuba University), T. Yoneya (University of Tokyo), 他	駒場素粒子論研究室	
国際標準の学部初年次教育実現へ向けて——教員・職員・学生の新しい連携の形 英語・日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2007.3.26	Tom Dingman (ハーバード大学), 山本泰(東京大学)ほか	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部	共催： 東京大学教養学部附属教養教育開発機構 協賛： 大日本印刷(株)
ローマ条約と欧州統合の“父”たち 日本語	駒場キャンパス 学際交流ホール 2007.3.29	森井裕一(東京大学), 上原良子(フェリス学院大学), 八十田博人(大阪大学)	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター	

講演会

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
ジャン＝リュック・ナンシ ー	ストラスブール大学／教授	「無―無神論(A-atheïsme)」について	学際交流ホール 2006.4.15	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター, 共催: 科学研究費基盤(A)プロジェクト「アブラハムの伝統の臨界」
Hayo Krombach	University of London	「キリスト教と仏教との宗教間対話の神学と現象学」 英語	18号館コラボレーションルーム4 2006.4.17	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
Stephen Alomes	Deakin University/Associate Professor	Globalisation and Tradition: Halloween in France, Australia and Japan	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.4.19	アメリカ太平洋地域研究センター
松沼美穂	福岡女子大学／講師	植民地支配をめぐる歴史－記憶－法の攻防――フランスでの昨今の論争から―― 日本語	18号館コラボレーションルーム3 2006.5.12	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター／「ジェノサイド研究の展開」プロジェクト(CGS)との共催
Les Terry	アメリカ太平洋地域研究センター／客員教授	Beaches, Flags, and Australian Multiculturalism	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.5.16	アメリカ太平洋地域研究センター, 共催: 東京大学同文化研究科地域文化研究専攻
ベルナール・フォール	コロンビア大学／教授	Across Fields: Buddhism, Structure, and History 英語	18号館コラボレーションルーム1 2006.5.16,22,29	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
宮崎 勇 石田勇治	インターアクションカウンシル事務局長・元経済企画庁長官(宮崎)／東京大学教授(石田)	ヨーロッパとドイツへの挑戦としてのグローバル化 日本語	18号館ホール 2006.5.17	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
Chilla Bulbeck	Univercity of Adelaide/Professor	Sex and Marriage in Japan and Australia: Comparing Young People's Attitudes to sharing-housework and making reproductive decisions	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.5.24	アメリカ太平洋地域研究センター
Moise Toure	演出家	ダンスとドラマトゥルギー フランス語	18号館4階コラボレーションルーム3 2006.5.24	東京大学教養学部フランス語部会・大学院総合文化研究科表象文化論研究室
Gary Okihiro	Columbia University/Professor	Recent Developments in the U.S.:A View from Hawai'i	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.5.31	アメリカ太平洋地域研究センター
Michael Silverstein	the University of Chicago/Charles F. Grey Distinguished Service Professor of Anthropology, Linguistics and Psychology	Learning to listen ethnographically 英語	14号館4階 2006.5.31	東洋文化研究所・現代人類学研究会

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
アルヴァ・ノエ	カリフォルニア大学バークリー校	Real Presence I, II; Neural Plasticity and Consciousness; Magic Realism and the Limits of Intelligibility; Perception without Representation; Presence in Pictures 英語	18号館コラボレーションルーム1, 3 2006.5.31, 6.2, 6.7, 6.9	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
Daniel Bender	University of Toronto/Assistant Professor	Mapping Civilization: Temperate Workers, Tropical Savages, and the Labour of Empire, 1898-1920	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.6.2	アメリカ太平洋地域研究センター
宮沢章夫	劇作家・演出家(早稲田大学客員教授)	『モーターサイクル・ドンキホルテ』をめぐって	18号館ホール 2006.6.6	東京大学大学院総合文化研究科表象文化論研究室
Richard W. Fox	University of Southern California/Professor	Henry Ward Beecher's Abolitionist Performances: Slave "Auctions" at Plymouth Church in Brooklyn, 1848-1860	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.6.6	アメリカ太平洋地域研究センター, 共催: 上智大学アメリカ・カナダ研究所
ベルナル・フォール	コロンビア大学／教授	The Jewel and the Sword: Symbols of Life and Death in Medieval Japan 英語	本郷キャンパス 法文1号館215教室 2006.6.12	21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」・同「死生学の構築」
Paul Kramer	Johns Hopkins University/Associate Professor	Race-Making and Colonial Violence: The Philippine-American War as Race War	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.6.20	アメリカ太平洋地域研究センター
岡田利規	劇作家・演出家	演劇における言葉と身体	18号館ホール 2006.6.27	東京大学大学院総合文化研究科表象文化論研究室
岩崎勝一	カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授／国際基督教大学教授	Multiple-Grammar Hypothesis: a case study of Japanese passive constructions 英語	10号館3階会議室 2006.6.30	言語情報科学専攻
吉田喜重	映画監督	スクリーンと女たち	学際交流ホール 2006.6.30	東京大学大学院総合文化研究科表象文化論研究室
矢内原美邦	振付家	コンテンポラリーダンスの身体——ニブロールの活動について	18号館ホール 2006.7.4	東京大学大学院総合文化研究科表象文化論研究室
ミハイル・ヤンボリスキー	ニューヨーク大学／教授	Philologization: A Project for a Radical Philology 英語	18号館4階コラボレーション・ルーム1 2006.7.4	21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」
ミハイル・ヤンボリスキー	ニューヨーク大学／教授	映像の起源を問い直す—エイゼンシュテイン, モンタージュ論と「日本」— 英語	立命館大学アート・リサーチセンター多目的ルーム 2006.7.5	立命館大学21世紀COE「京都アート・エンタテインメント創生研究」, 立命館大学映像学部設置委員会, 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」
Michael Roth	ドイツ連邦議会／議員	Perspectives on the European Constitutional Treaty 英語	18号館コラボレーションルーム4 2006.7.10	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
William O. Beeman	Brown University/Professor, Anthropology and Theatre, Speech and Dance Past Director, Middle East Studies	Hierarchy in Language 英語	14号館4階 2006.7.12	文化人類学研究室・現代人類学研究会
渡邊守章	東京大学名誉教授・演出家	『繻子の靴』の余白に—問—テキスト性の遊戯—	18号館コラボレーション・ルーム1 2006.7.14	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター, 東京大学大学院総合文化研究科表象文化論研究室

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
岡田真人	東京大学大学院新領域創成科学研究科 複雑理工学専攻	脳科学と情報科学への統計力学的アプローチ——複雑系理論の基盤技術として 日本語	16号館109 2006.7.15	21世紀COE融合科学創成ステーション
レオラ・バトニツキー	プリンストン大学／教授	Levinas's View of Death and its Relation to Judaism 英語	本郷キャンパス 法文2号館1階113教室 2006.7.21	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
Michael Adas	Rutgers University/Professor	Imperial Alternatives: Pacific Interventions and America's Rise to Global Power	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.8.2	アメリカ太平洋地域研究センター, 共催: 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)「グローバル化時代における『アメリカ化』と『反米主義』の国際的比較研究」
John Ogborn Joan Bliss	ロンドン大学／名誉教授 サセックス大学／名誉教授	自然現象の科学的理解と常識的解釈 英語・日本語	18号館ホール 2006.8.18	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
神谷之康	ATR脳情報研究所／研究員	脳情報デコーディングとその倫理	14号館708 2006.8.22	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
Martin Hanczyc	ECLT: ヨーロッパ生命科学技術開発センター／主任研究員	Lecture 1～4 「生命の起源と進化」 英語	15号館409 2006.8.22・23・29・30	21世紀COE融合科学創成ステーション
滝川洋二	教養教育開発機構／客員教授	理科好きな子どもを育てるためには 日本語	駒場博物館展示室・セミナー室 2006.8.24	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
Fanao Kong	Chinese Academy of Science/Professor	Intense laser chemistry-ionization and dissociation of molecules 英語	16号館827号室 2006.9.4	広域科学専攻関連基礎科学系・高塚和夫
許 祐盛	慶熙大学／教授	'Philosophy' in the whirl of Nationalism	101号館2階 研修室 2006.9.22	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
Eugene Bogomolny	Univ. of Paris-Sud/Professor	Superscars 英語	16号館827号室 2006.9.26	広域科学専攻関連基礎科学系・高塚和夫
許 祐盛	慶熙大学／教授	'Eating Meat and Having Wives' — A Case for Rethinking Politics and Religion	本郷キャンパス 法文1号館112教室 2006.10.2	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
ブルーノ・クレマン	パリ第八大学／教授	「喩とは何か? 擬人法礼讃」	18号館コラボレーションルーム1 2006.10.4	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター・国際哲学コレージュ
Guenther Grewendorf	University of Frankfurt／教授	The Biological Perspective on Language 英語	駒場キャンパス 10号館3階会議室 2006.10.4	21世紀COE「心とことば—進化認知科学的展開」
Guenther Grewendorf	University of Frankfurt／教授	Complementizer Inflection in Germanic Languages 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム 2006.10.5	21世紀COE「心とことば—進化認知科学的展開」

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
Rob Kitchin	National Institute of Regional and Spatial Analysis National University of Ireland, Maynooth/Professor	Soft Cities: Software and the Remaking of the North American City	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.10.6	アメリカ太平洋地域研究センター, 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」
サム・スターン	オレゴン州立大学教授・教育学部長	アメリカの大学における初年次教育の現状 英語	アドミニストレーション棟3階中会議室 2006.10.16	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
金 山椿	西江大学校哲学科／助教授	「天使論」 日本語	18号館コラボレーション・ルーム3 2006.10.16	21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP) 共催：超域文化科学専攻・比較文学比較文化研究室
Stephan Keukeleire	K.U.Leuven／教授	Pitfalls in Analyzing EU Foreign Policy 英語	18号館コラボレーションルーム1 2006.10.17	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
村松真理子	東京大学総合文化研究科／助教授	「天使と恋人—ダンテとその周辺—」	18号館コラボレーションルーム3 2006.10.18	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
坂部 恵	東京大学名誉教授	「あわいの劇としての能」	18号館コラボレーションルーム1 2006.10.23	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
川島啓二	国立教育政策研究所高等教育研究部	事例から見た初年次教育の類型的整理の試み：東大へのインプリケーションの視点から 日本語	101号館1階ピアノ室 2006.10.25	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
Mario Telo	L'Universite Libre de Bruxelles／教授	The European Constitution: Three Models 英語	18号館ホールコラボレーションルーム1 2006.10.27	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
山田礼子	同志社大学教育開発センター／副所長	First-Year Programの可能性：日米の初年次教育の現状と課題 日本語	駒場コミュニケーション・プラザ南館3階交流ラウンジ 2006.10.30	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
Annette Schavan	ドイツ連邦共和国政府／教育研究大臣	グローバル時代における教育と研究 ドイツ語	数理科学研究科棟大講義室 2006.10.31	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部／東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
Tritia Toyota	Asian American Studies Center, UCLA / Visiting Professor at Shih Hsin University, Taiwan	Transnational Lives: Globalized Resistance Among Naturalized Chinese Americans	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.11.14	アメリカ太平洋地域研究センター, 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」
Lane Ryo Hirabayashi	Redress & Community Department of Asian American Studies, UCLA/Professor	Japanese American Resettlement: Through the Lens	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.11.15	アメリカ太平洋地域研究センター, 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」
Hellmut Wollmann	Humboldt-Universitat zu Berlin／教授	German Federalism: a "success story" or doomed to failure? 英語	18号館コラボレーションルーム1 2006.11.20	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
Ke-Li Han	Dalian Institute of Chemical Physics, Chinese Academy of Sciences/Professor	Correlation Quantum Dynamics between Electrons and H ₂ ⁺ , D ₂ ⁺ Molecule with Attosecond Resolution 英語	6号館126号室 2006.11.24	広域科学専攻関連基礎科学系・高塚和夫
崔 璟姫	シカゴ大学／助教授	「抹殺」の進化：朝鮮における総督府の検閲と削除の痕跡	101号館研修室 2006.11.24	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
Anne-Marie Christin	パリ第7大学教授	“Du peintre-écrivain à l'assembleur d'image: Eugène Fromentin et Philippe Clerc” フランス語	18号館コラボレーションルーム3 2006.11.27	東京大学21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP), 比較芸術研究フォーラム(超域文化科学専攻・比較文学比較文化研究室)
張 旭東	ニューヨーク大学	「グローゼーションの時代における中国の近代」	18号館コラボレーションルーム1・4 2006.12.4-6,11,19,20	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
Karen Rosenblum	George Mason University/Associate Professor, 東京大学・日本女子大学／フルブライト招聘教授	Divided Allegiances: American College Life and the Children of Immigrants	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.12.5	アメリカ太平洋地域研究センター, 21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」
Michael Reiterer	駐日欧州委員会代表部／公使	Japan and the European Union: shared foreign policy interests 英語	18号館コラボレーションルーム1 2006.12.6	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
李 清俊	作家	「『恨』とは何か」, 「『恨』と文学」	18号館4Fコラボレーションルーム1 2006.12.11,13	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター, 共催：東京大学比較文学比較文化研究室
David Day	アメリカ太平洋地域研究センター／客員教授	Supplanting Societies: A New Dynamic for Understanding World History	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2006.12.13	アメリカ太平洋地域研究センター, 共催：東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻、21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」
Rachel Ann Merz	スワスモア大学／教授	スワスモア大学における初年次教育の取組 英語	101号館2階研修室 2006.12.13	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
戴 浩一	台湾国立中正大学教授	漢語構詞的兩個認知策略(中国語の語構成における二つの認知ストラテジー) 中国語	18号館4階コラボレーションルーム4 2006.12.15	東京大学21世紀COEプログラム「心と言葉——進化認知科学的展開」
施 其生	中国中山大学教授, 大東文化大学客員教授	漢語方言における“使然”と“非使然”という文法範疇をめぐって	18号館4階コラボレーションルーム4 2006.12.15	東京大学21世紀COEプログラム「心と言葉——進化認知科学的展開」／言語情報科学専攻
崔 賢徳	ドイツ, 韓国通信・研究センター	「世界化, 『対テロ戦争』, 相互文化哲学」	18号館, コラボレーションルーム1 2006.12.18	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
金 相奉	全南大学校	「他者のなかでの自己喪失から豊饒な精神へ—韓国の視点から相互文化哲学を始めるために」	18号館, コラボレーションルーム1 2006.12.18	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
施 其生	中国中山大学教授, 大東文化大学客員教授	中国語の動詞連続構文の再検討——汕頭方言の補文標識をてがかりに	18号館4階コラボレーションルーム1 2006.12.23	東京大学21世紀COEプログラム「心と言葉——進化認知科学的展開」／言語情報科学専攻

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
トーマス・メッツインガー	ヨハネス・グーテンベルグ大学／教授	Consciousness and the Phenomenal Self, The Phenomenal Self and the First-Person Perspective, From Neuroethics to Consciousness Ethics: Future Challenges for Academic Philosophy	18号館4階コラボレーションルーム3 2007.1.9-11	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
B. イェゼルニク A. ベケシュ	リュブリャナ大学／教授	“Europeanisation of the Balkans”(イェゼルニク), 「日本語構文における南の階層モデルの確率論的解釈」(ベケシュ) 英語(イェゼルニク), 日本語(ベケシュ)	18号館コラボレーションルーム1 2007.1.15	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
下條信輔	カリフォルニア工科大学	行為, 意志, 意識—主観経験の神経科学	18号館4階コラボレーションルーム1 2007.1.16, 18, 19	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター, 共催: 東京大学21世紀COE「心とことば—進化認知科学的展開」, 協賛: 中央公論新社
Claus Ascheron	Springer-Verlag編集者	The Nobel Prize Enigma Right and Wrong Decisions, Problems 英語	アドバンストラボ410 大会議室 2007.1.25	21世紀COE融合科学創成ステーション
Nicole Coolidge Rousmaniere	セインズベリー日本藝術研究所	大英博物館のなかの‘Japanese Galleries’ 日本語	101号館2階研修室 2007.1.29	東京大学21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP), 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部美術博物館, 文部科学省科学研究費補助金「観世文庫所蔵能楽関係資料のデジタル画像化と解題目録作成に向けた総合的研究」
Thomas Gregor	University of Tokyo. JSPS postdoctoral fellow	Physical limits and biophysical precision of biological patterning 英語	6号館126/127 2007.2.19	21世紀COE融合科学創成ステーション
ヤンナム・イシマエル	アリゾナ大学／教授	“Selves and Selforganization”	18号館4階コラボレーションルーム3 2007.3.8	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
ハンス・ラダー	アムステルダム自由大学／助教授	“Core notions for the philosophy of scientific experimentation,” “How concepts both structure the world and abstract from it”	18号館4階コラボレーションルーム3 2007.3.8・9	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
アンドリュウ・フィーンバーク	サイモンフレザー大学／教授	“The philosophy of technology from 2002 to 2007: Meaning, being, and technology in Heidegger and Marcuse”	18号館4階コラボレーションルーム3 2007.3.9	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
イラン・パベ	ハイファ大学	“The Ethnic Cleaning and the Struggle over Memory in Palestine”	18号館4階コラボレーションルーム3 2007.3.10	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
長谷川壽一 丹野義彦 松田剛 石倉昇 兵頭俊夫 武田智子	東京大学 東京大学 東京大学 日本棋院 東京大学 東京大学	囲碁の魅力—囲碁で養う考える力 日本語	18号館ホール 2007.3.10	東京大学教養学部附属教養教育開発機構

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
David Farber	Temple University/Professor	Visions of American Empire	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2007.3.10	アメリカ太平洋地域研究センター
Desmond King	Nuffield College/Professor	Visions of American Empire	アメリカ太平洋地域研究センター会議室 2007.3.10	アメリカ太平洋地域研究センター
アリ・ベンマクルーフ	University of Nice-Sophia Antipolis／教授	“Truth and assent in Arabic medieval philosophy”	101号館研修室 2007.3.14	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
マイケル・フリードマン	スタンフォード大学	“Carnap and Quine: Twentieth-Century Echoes of Kant and Hume,” “Newton and Kant on Absolute Space: From Theology to Transcendental”	18号館4階コラボレーションルーム1 2007.3.20・21	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
グラシエラ・デ・ピエリス	スタンフォード大学／助教授	“Hume and Locke on Scientific Methodology: The Newtonian Legacy”	18号館4階コラボレーションルーム1 2007.3.21	21世紀COE共生のための国際哲学交流センター
遠山敦子	新国立劇場運営財団理事長・元文部科学大臣	学びのすすめ 日本語	18号館ホール 2007.3.28	東京大学教養学部附属教養教育開発機構

学外からの評価

受賞など

総合文化研究科

氏名	賞の名称	年月日
風間 洋一	素粒子メダル	2006.3.29
岡山 裕	清水博賞* ¹	2006.6.11
鈴木 賢次郎	06 S. Sleby Award (S. スレイビー賞)* ²	2006.8.10
箕浦 高子	平成18年度 Zoological Science Award	2006.9.23
野崎 歆	講談社エッセイ賞	2006.10.23
村上 郁也	2006年度日本心理学会国際賞奨励賞	2006.11.3
荒井 良雄	人文地理学会賞 (C部門)	2006.11.11
橋本 幸士	第一回素粒子メダル奨励賞	2006.11.14

*¹(備考)『アメリカ二大政党制の確立—再建期における戦後体制の形成と共和党』(東京大学出版会、2005年) に対して

*²(備考) 本賞は、国際図学会が図学 (Geometry and Graphics) に関して優れた教育・研究上の業績を挙げた者 (1名) に、2年に一度開催される図学国際会議の席上授与されるもので、国際図学会の創立時のリーダーである米国プリンストン大学名誉教授 S. Sllaby 教授の名を冠している。鈴木は4人目の受賞者 (今まで、米国2名、オーストリア1名) である。

2006(平成18)年度 科学研究費補助金

(平成19年1月15日現在：継続研究課題含)

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
1	学術創成	山影 進	教授	マルチエージェント・シミュレータによる社会秩序変動の研究	32,100
2	特定領域	米谷 民明	教授	超弦理論の時空構造と対称性	1,400
3	特定領域	山下 晋司	教授	文化資源の生成と利用	8,200
4	特定領域	鹿児島 誠一	教授	高圧縮された有機導体の構造と電子状態	5,200
5	特定領域	菅原 正	教授	有機無機複合型スピン分極ナノ粒子	14,700
6	特定領域	小島 憲道	教授	配位空間を活用したヘテロ分子集合体の構築と特異な光・磁気相乗効果の創出	2,900
7	特定領域	須藤 和夫	教授	ミオシンナノシステムによる細胞内情報制御	16,200
8	特定領域	酒井 邦嘉	助教授	文法処理を中心とする言語の脳内メカニズムの解明	3,400
9	特定領域	渡邊 雄一郎	教授	植物でのRNA情報の移行および発現制御	2,500
10	特定領域	加納 ふみ	助手	セミンタクト細胞系を用いたアグリソーム形成機構の可視化解析	3,000
11	特定領域	柴田 大	助教授	回転する大質量星の重力崩壊に対する現実的かつ一般相対論的シミュレーション	1,800
12	特定領域	前田 京剛	助教授	エキゾチック超伝導体における異常な臨界現象の研究	2,700
13	特定領域	栗柄 源嗣	助教授	光合成循環電子伝達を制御するチトクロム複合体とフェレドキシンとの相互作用解析	3,300
14	特定領域	上村 慎治	助教授	3次元ピコメートル計測法による軸系ダイニン動態の解析	2,400
15	特定領域	奥野 誠	助教授	局所阻害法による鞭毛屈曲運動形成機構の解明	1,400
16	特定領域	増田 茂	教授	分子-電極接合系の準安定原子電子分光	28,200
17	特定領域	佐藤 直樹	教授	相同グループ法による系統プロファイリングを用いた植物遺伝子機能の大規模推定	3,800
18	特定領域	青木 誠志郎	産学官 連携研究員	遺伝子水平伝播による共生系の進化と起源の統合的解析-理論的推定および実験的検証-	3,500
19	特定領域	尾中 篤	教授	ゼオライト極性ナノ空間を分子凝集場とする不安定小炭素分子の反応性制御	2,200
20	特定領域	村田 昌之	教授	ER exit sitesの構造形成・機能発現制御機構の解明	3,300
21	特定領域	栗柄 源嗣	助教授	巨大モーター蛋白質ダイニンのX線による原子レベル構造研究	3,600
22	特定領域	本村 凌二	教授	カンパニア都市とヴィッラ集落をめぐる社会史的研究	16,700
23	特定領域	早川 真一郎	教授	国際的なB2C取引(消費者契約)の法的規律に関する総合的研究	7,400
24	特定領域	福島 孝治	助教授	確率的アルゴリズムの統計力学への応用と開発	4,100
25	特定領域	高塚 和夫	教授	分子超高速動力学過程の理論	7,400
26	特定領域	尾中 篤	教授	ナノ細孔曲面を配位場とする不均一系メタセシス触媒の創製	8,300
27	基盤S	須藤 和夫	教授	ダイニン組換え体発現と、その構造・動態に基づくエネルギー変換機構の解明-生物分子モーター研究の新たなフロンティアの展開-	26,200
28	基盤S	高塚 和夫	教授	ボルン-オッペンハイマー描像を超えた動的分子理論と新しい化学の展開	17,800
29	基盤A	能登路 雅子	教授	アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容	6,100

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
30	基盤A	若林 正丈	教授	脱植民地化諸地域における政治と思想－日本植民地主義と西欧植民地主義の比較と国際環境－	6,100
31	基盤A	佐藤 安信	教授	紛争と開発：平和構築のための国際開発協力の研究	4,400
32	基盤A	植田 一博	助教授	読書の熟達化プロセスの解明とその教育への応用	3,600
33	基盤A	古田 元夫	教授	グローバリゼーション下における地域形成と地域連関に関する比較研究	7,900
34	基盤A	齊藤 文子	助教授	新しい情報技術を利用したオープンリソース型スペイン語教育標準の構築	7,800
35	基盤A	兵頭 俊夫	教授	ボジトロニウム－原子・分子相互作用の研究	6,700
36	基盤A	磯崎 行雄	教授	古生代末2段階大量絶滅の研究：G-L境界とP-T境界	3,600
37	基盤A	跡見 順子	教授	ストレスタンパク質から評価する「適切・適度な運動」の分子基盤の解明と教育への応用－細胞から個体、細胞から人間までを連携するために－	10,300
38	基盤A	大貫 隆	教授	アブラハムの伝統の臨界：三大一神教の哲学、神学・政治論とその外部の地域文化研究	7,300
39	基盤A	恒川 恵市	教授	民主主義体制の諸形態および当該体制の長期的持続における価値規範の役割	8,000
40	基盤A	中井 和夫	教授	「破綻国家」の生成と再生をめぐる学際研究	8,800
41	基盤A	玉井 哲雄	教授	生産性と安全性向上のためのアспект指向ソフトウェア開発に関する研究	11,800
42	基盤A	松岡 心平	教授	観世文庫所蔵能楽関係資料のデジタル画像化と解題目録作成に向けた総合的研究	7,500
43	基盤A	木村 秀雄	教授	南米アンデス山地とアマゾン低地の社会文化的相互関係の人類学的研究	6,200
44	基盤A	丸山 真人	教授	「人間の安全保障」の実体的基礎としての地域経済の自立	4,400
45	基盤B	山本 史郎	教授	18世紀後半以降のイギリスにおけるイングリッシュネス概念の生成に関する文化研究	4,100
46	基盤B	今橋 映子	助教授	比較芸術論の新たな構築－文学と視覚芸術の相関に関する総合的研究	1,600
47	基盤B	廣松 毅	教授	情報通信技術が経済構造へ与える影響に関する定量的分析	3,800
48	基盤B	大築 立志	教授	心理的変動が運動スキルに及ぼす影響に関する脳神経科学的研究	4,100
49	基盤B	河合 祥一郎	助教授	現代舞台芸術の映像資料デジタル・アーカイヴ構築に向けて	3,700
50	基盤B	湯浅 博雄	教授	翻訳の言語態－言語論的視点と文化論的視点から	4,400
51	基盤B	菅原 克也	教授	東アジア近代文学における対欧米意識と相互認識	5,100
52	基盤B	吉川 雅之	助教授	香港におけるリテラシーの変遷と変異に関する社会言語学的研究	1,800
53	基盤B	柴 宜弘	教授	バルカン諸国歴史教科書の比較研究	3,700
54	基盤B	米谷 民明	教授	超弦理論に基づく量子重力統一理論の構築	2,300
55	基盤B	尾中 篤	教授	ナノポーラス物質を基盤とするメタセシス触媒の創製	3,700
56	基盤B	池内 昌彦	教授	シアノバクテリアの新規光受容体と光応答系の機能・構造解析	2,500
57	基盤B	渡邊 雄一郎	教授	ウイルス細胞移行にかかわる複合体VMCの分子解析	2,000
58	基盤B	鈴木 賢次郎	教授	グラフィックス・リテラシー・カリキュラムの開発	1,700
59	基盤B	刈間 文俊	教授	漢字文化圏の「近代」に関する総合的研究	1,000
60	基盤B	三浦 篤	教授	日仏美術交流史研究－ジャポニスム、コラン、日本近代洋画－	1,600
61	基盤B	HONES, Sheila Anne	助教授	18世紀末から20世紀前半までの英米のユートピアニズムの政治批評的研究	2,800
62	基盤B	石井 洋二郎	教授	フランス第三共和制における文学・政治・宗教	2,200
63	基盤B	岩本 通弥	教授	地域資源としての〈景観〉の保全および活用に関する民俗学的研究	4,500
64	基盤B	前田 京剛	助教授	精密ブロードバンドスペクトロスコピーによる量子臨界性の探索と制御	5,100
65	基盤B	小川 桂一郎	助教授	光導波路分光法による有機固体の紫外可視吸収スペクトル	5,100

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
66	基盤B	菅原 正	教授	プロト細胞モデルの創出－膜複製ダイナミクスと内膜上DNA複製ダイナミクスの同期	4,700
67	基盤B	深津 晋	助教授	シリコンを障壁とする高輝度半導体量子ドットのシリコンベース光増幅器への応用	2,900
68	基盤B	川戸 佳	教授	脳海馬神経で合成される脳ステロイドは、シナプス可塑性を急性的に調節する	4,900
69	基盤B	石井 直方	教授	運動と遺伝的特性が筋の無負荷最大速度に及ぼす影響：スラックテストによる検討	6,000
70	基盤B	高橋 哲哉	教授	宗教における時間、超越、倫理に関する哲学的研究	2,200
71	基盤B	CAMPBELL, Robert Braiam	助教授	幕末明治初期の日本文学と「民衆」思考に関する総合比較研究	3,600
72	基盤B	井上 健	教授	近代東アジアにおける異文化同化過程における翻訳の問題	5,200
73	基盤B	西川 杉子	助教授	近世ヨーロッパにおける宗教・政治・商業空間の構造転換	3,500
74	基盤B	丹野 義彦	教授	統合失調症に対する認知行動療法の効果研究と臨床心理士への普及	4,100
75	基盤B	小島 憲道	教授	有機・無機複合錯体による動的スピントロニクス現象とその分子システムへの展開	8,200
76	基盤B	伊藤 元己	教授	植物における多細胞生物への進化の分子遺伝学基盤の解明	6,200
77	基盤B	豊島 陽子	教授	ダイニン分子の作動マシナリー	6,400
78	基盤B	伊藤 元己	教授	ニュージーランドにおける植物の適応放散的種分化の解析	4,200
79	基盤B	近藤 安月子	教授	日本語教育のグローバル・スタンダードの構築にむけて	2,000
80	基盤B	嶋田 正和	教授	マメ科植物とその寄生ノ共生生物における共進化の系統対応解析	3,600
81	基盤B	川島 真	助教授	中国外交研究の再構築－外交史と現代外交研究間の断絶の克服と長期的視野の獲得－	2,200
82	基盤C	内野 儀	教授	グローバリゼーション時代における現代アメリカ演劇の比較演劇学的研究	900
83	基盤C	宮下 志朗	教授	19世紀後半のフランスにおける小説の受容に関する、文化史的研究	500
84	基盤C	田中 伸一	助教授	最適性理論に基づく日英語アクセント体系の共時変異と通時変化に関する統合モデル研究	900
85	基盤C	金久 博昭	教授	発育期における筋腱複合体の形状と機能に関する研究	600
86	基盤C	宮本 久雄	教授	ヘブライ的存在・ハーヤー論を基盤とした「アウシュヴィッツ以後」の新倫理学の構築	900
87	基盤C	安西 信一	助教授	古典主義絵画理論の射程－近世アカデミー的絵画論（特にデュフレノワ）の受容と変容	700
88	基盤C	川中子 義勝	教授	ドイツ近代文学における「予型論」の系譜	700
89	基盤C	上田 博人	教授	スペイン言語彙バリエーションに関する調査とデータベース化	1,200
90	基盤C	池上 俊一	教授	ヨーロッパの中世の音風景	500
91	基盤C	荒井 良雄	教授	インターネット・携帯電話による地域情報発信に関する地理学的研究	600
92	基盤C	遠藤 貢	助教授	アフリカ諸国における「民主化」の帰結：その批判的再検討	800
93	基盤C	木宮 正史	助教授	朝鮮半島から見た北東アジア国際秩序：その形成と変動力学に関する再検討	500
94	基盤C	石田 淳	教授	冷戦終結後の内戦への国際社会による関与・介入に関するゲーム論的分析	500
95	基盤C	蜂巢 泉	助教授	Ia型超新星の進化経路および爆発メカニズムの解明	800
96	基盤C	佐々 真一	助教授	小さな非平衡系における揺らぎ、応答、熱力学	900
97	基盤C	小河 正基	助教授	力学系としてのマンツルの相転移と地球の進化：太古代・原生代境界への応用	700
98	基盤C	村田 滋	助教授	脂質二分子膜を反応場とする光誘起電子移動反応の機構と高効率化に関する研究	500
99	基盤C	川合 慧	教授	状況評価機能の広範囲への適用に関する研究	900
100	基盤C	工藤 和俊	助手	動作シナジーの組織化に関する神経行動科学的研究	500
101	基盤C	岡本 拓司	助教授	第一高等学校旧蔵実験機器・掛図・事務文書等の整理と調査	1,000
102	基盤C	門脇 俊介	教授	哲学的知覚論の再検討	800

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
103	基盤C	丹治 愛	教授	ヴィクトリア朝生体解剖論争の文化研究	600
104	基盤C	田尻 芳樹	助教授	モダニズム文学の身体表象のパラダイムに関する理論構築	800
105	基盤C	伊藤 たかね	教授	語形成の脳内メカニズム－理論言語学と言語脳科学の協働による実証的研究	1,000
106	基盤C	村田 雄二郎	教授	中島雄『随使述作存稿』の研究	500
107	基盤C	長谷川 まゆ帆	助教授	出産の社会史－17～18世紀フランスの産科医の進出と助産婦の制度化を中心に－	800
108	基盤C	酒井 哲哉	教授	戦間期日本における植民政策学の展開とその遺産－国際関係論研究の視点から	400
109	基盤C	柴田 大	助教授	合体する連星中性子星に対する現実的かつ完全に一般相対論的解析	1,600
110	基盤C	箕口 友紀	助手	準安定量子流体の物性	600
111	基盤C	加藤 雄介	助教授	超伝導・超流動体における、時間反転対称性をもつ量子渦の理論	1,000
112	基盤C	福島 孝治	助教授	拡張アンサンブル法の展開とフラストレート系への応用	800
113	基盤C	友田 修司	教授	有機反応活性種の研究とタンパク質化学への展開	600
114	基盤C	松田 良一	助教授	成長因子アレイを用いた幹細胞分化運命の制御	1,000
115	基盤C	石光 泰夫	教授	ロマンティック・パレエ『ジゼル』を復曲する試み	900
116	基盤C	山田 茂	助教授	新たな運動適応機構の解明	2,500
117	基盤C	藤垣 裕子	助教授	科学者の社会的責任論の系譜	900
118	基盤C	信原 幸弘	助教授	基礎行為に関する相互作用主義的観点からの研究	1,000
119	基盤C	村田 純一	教授	感覚・知覚・概念－知覚の「生態学的現象学」の可能性	1,300
120	基盤C	田中 純	助教授	イメージ分析に対する生命形態学の影響をめぐる思想史的研究	1,400
121	基盤C	松村 剛	助教授	中世フランス語版未刊行『金持ちラザロ』の言語地理学的・文献学的語彙研究	1,200
122	基盤C	林 文代	教授	英米文学におけるテクノロジーとメディアの表象に関する研究	1,200
123	基盤C	坂原 茂	教授	日仏名詞限定表現の対照研究	1,400
124	基盤C	藤井 聖子	助教授	話しことは談話における文法的機能語の語用標識化	1,300
125	基盤C	松原 宏	助教授	工場の履歴効果と日本企業の立地転換に関する数量経済地理学分析	1,800
126	基盤C	内田 隆三	教授	探偵小説における言説形式の変容と消費社会の論理	2,500
127	基盤C	土井 靖生	助手	テラヘルツ大規模イメージングデバイスの開発	1,800
128	基盤C	風間 洋一	教授	超弦理論とM理論のダイナミックスおよびその共変的定式化の研究	1,200
129	基盤C	吉岡 大二郎	教授	双極子型量子ホール系の基底状態と輸送現象の研究	900
130	基盤C	永田 敬	教授	電子・負イオンのヘテロ溶媒和構造－溶媒和による安定化の微視的理解を目指して－	2,200
131	基盤C	錦織 紳一	助教授	シアノ架橋金属錯体ホスト包接体の誘電特性と機能性開拓	2,100
132	基盤C	嶋田 正和	教授	ハエの記憶と学習による採餌と繁殖の適応戦略：探索軌跡とカオスの遍歴	2,600
133	基盤C	増田 建	助教授	植物細胞におけるテトラピロール分配・輸送の分子機構	1,600
134	基盤C	田原 史起	助教授	中国中部内陸農村の開発と社会関係資本－湖北・江西村落コミュニティの比較を通じて	1,200
135	基盤C	橋本 毅彦	教授	戦後日本の技術研究組合の研究活動に関する歴史的研究	1,600
136	基盤C	石垣 琢磨	助教授	中高生における妄想的観念および対人信頼感・攻撃性との関連についての実証的研究	1,100
137	基盤C	菊川 芳夫	助教授	2次元および4次元格子上の非可換群カイラルゲージ理論の非摂動的構成及び数値的応用	600
138	基盤C	高橋 英海	助教授	アリストテレス『天界論』および『生成消滅論』のシリア語における伝承の文献学的研究	900
139	萌芽	村松 真理子	助教授	18世紀末革命期ナポリの女性作家ア・フォンセカ・ピーメンタルの文学と思想	500

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
140	萌芽	小島 憲道	教授	疑ハロゲン架橋金混合原子価錯体による2波長同時励起光誘起超伝導の探索	900
141	萌芽	池内 昌彦	教授	好熱性シアノバクテリアのセルロースとセルロース合成酵素の解析	900
142	萌芽	石浦 章一	教授	アミノ酸ホモポリマー沈着による病態の階層モデル	1,200
143	萌芽	矢口 祐人	助教授	米国キリスト教原理主義団体の文化戦略に関する学際的研究	1,300
144	萌芽	アルヴィ なほ子 (宮本なほ子)	助教授	ユートピアと廃墟－18世紀的進歩思想の転換と南半球におけるイギリスの植民地政策	1,100
145	萌芽	伊藤 元己	教授	植物の陸上進出において共生菌類の果たした役割の解明	2,100
146	萌芽	濱崎 裕子	研究拠点形成 特任研究員	霊長類脳梗塞モデルを用いた脳梗塞関連たんぱく質の網羅的解析	1,100
147	萌芽	高橋 泰城	研究拠点形成 特任研究員	社会的認知・経済学的意思決定を制御する神経ホルモンの研究	1,400
148	萌芽	川島 真	助教授	国際連盟における中国外交と日中関係－中国外交档案による「リットン史観」の克服－	1,400
149	若手A	村上 郁也	助教授	人間の視覚情報処理の階層性および並列性とその相互作用に関する心理物理学的研究	7,500
150	若手A	栗柄 源嗣	助教授	複合体結晶構造解析で明らかにする高等植物に特有な光還元力分配システムの構造基盤	6,000
151	若手A	増原 英彦	助教授	アスペクト指向言語の基礎モデルとその応用	1,700
152	若手A	久保 啓太郎	助手	パフォーマンス向上および障害予防の観点からみた腱組織の可塑性に関する研究	8,900
153	若手A	鳥井 寿夫	助教授	コヒーレント分子波の生成および制御	7,300
154	若手A	金井 崇	助教授	GPUクラスタによる3DCGのための並列コンピューティングに関する研究	2,100
155	若手B	金子 知適	助手	アルゴリズムに応じた知識獲得手法の研究	600
156	若手B	原 和之	助教授	二十世紀における「分析」の歴史：精神分析・現象学・分析哲学と言語の「存在」	900
157	若手B	内山 融	助教授	経済学専門家の政策決定過程における役割に関する比較研究	1,000
158	若手B	岡山 裕	助教授	民主主義と専門家統治の緊張関係：アメリカ独立行政委員会の形成過程の総合的研究	600
159	若手B	藤井 宏次	助手	QCD熱力学系の素励起モードとプラズマ生成シグナルの理論的研究	500
160	若手B	牛山 浩	助手	比較的大きな系におけるプロトン移動反応の量子・半古典ダイナミクス	900
161	若手B	広瀬 友紀	助教授	文理解および産出における、視覚情報と韻律情報の役割についてのvisual world paradigmを用いた実験的検討	1,400
162	若手B	瀬屋 光男	助手	低酸素環境トレーニングを伴う持久性選手のパフォーマンスと生理反応の季節変動	1,400
163	若手B	鍾 非	助教授	地方政府は民間中小企業の成長を促進しているのか－中国上海市のサンプル調査分析	500
164	若手B	有田 伸	助教授	経済危機後の韓国における労働市場と階層構造の変容に関する研究	500
165	若手B	堺 和光	助手	厳密解の手法を用いた1次元量子系の輸送特性および動的性質に関する研究	900
166	若手B	関谷 亮	助手	ナノサイズの空孔を持つ水素結合型超分子包接体の機能性物質への応用展開	600
167	若手B	北野 晴久	助手	マイクロ波電気伝導度の実空間イメージングによる強相関物質のマクロ相分離の研究	1,300
168	若手B	昆 隆英	助手	AAA型分子モーター、ダイニンの作動メカニズム解明	1,400
169	若手B	角 忠理	研究拠点形成 特任研究員	コオロギの歌の進化に及ぼすメスの選好性の影響	1,300
170	若手B	藤原 誠	助手	シロイヌナズナの葉緑体分裂開始機構の解明	1,200
171	若手B	神崎 素樹	助手	自律神経系へのノイズ刺激による力調節機能の向上とその生理学的メカニズムの解明	2,200
172	若手B	飯嶋 裕治	助手	和辻哲郎の倫理学・思想史研究に関する比較哲学的考察	1,000
173	若手B	松本 和子	助教授	共時的・通時的分析を用いた言語衰退の研究－消滅の危機に瀕した「バラオ日本語」	1,300

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
174	若手B	渡邊 日日	講師	社会的知識としての人類学：ロシア民族学・ロシア社会学・社会人類学の総合化の試み	1,300
175	若手B	近藤 隆祐	助手	一軸性延伸法の開発とその有機導体研究への適用	1,800
176	若手B	猪野 和佳	助手	トポロジカル・オーダーを用いた量子コンピューティング	1,300
177	若手B	吉川 豊	助手	フォトリック結晶光微小共振器を用いた単一原子検出	1,900
178	若手B	柴尾 晴信	助手	社会性アブラムシのフェロモン認識と社会行動の発現メカニズム	2,800
179	若手B	本瀬 宏康	助手	分化誘導因子xylogenの輸送機構・作用機構の解明	3,200
180	若手B	水澤 直樹	助手	光合成酸素発生反応の分子機構に関する研究	2,800
181	若手B	箕浦 高子	助手	収縮環におけるアクチン細胞骨格のダイナミクス	2,000
182	若手B	加納 ふみ	助手	mRNAの翻訳制御を司る凝集体・ストレスグラニュールの形態形成機構	1,900
183	若手B	星野 崇宏	講師	準実験と調査観察研究における因果効果の推定と教育評価への応用	1,900
184	若手B	小松 輝久	研究拠点形成 特任研究員	粗視化した軌道情報に基づく非平衡現象の有効記述	1,400
185	若手B	坂山 英俊	助手	シャジクモ藻類Nitella属の全系統関係の解明	1,500
186	若手 (スタートアップ)	小野 正嗣	助手	現代フランス語圏文学を読む。(1)カリブ海、北および西アフリカ	1,390
187	若手 (スタートアップ)	鈴木 建	助手	天体表面の擾乱による恒星風駆動機構の理論的解明と、惑星形成などの諸問題への応用	1,270
188	特別研究員 奨励費	野田 直紀	DC1	コヒーレントな運動をする分子モーターの3次元的動態の研究	900
189	特別研究員 奨励費	山本 典史	PD	遷移状態理論を越えた「新しい化学反応論」	1,100
190	特別研究員 奨励費	荒原 邦博	PD	ブルーストにおける絵画の受容論的研究－第三共和制下の美術旅行・美術館・展覧会－	700
191	特別研究員 奨励費	荒原 山紀子	PD	フローベールと地質学－19世紀フランス文学と科学の大衆化運動の文献学的資料研究－	700
192	特別研究員 奨励費	石田 雅樹	PD	公的／私的領域の言説構成の批判的検証と、それに基づく現代政治倫理の再構築	700
193	特別研究員 奨励費	沖本 幸子	PD	日本中世芸能の身体－今様・白拍子・猿楽－	1,100
194	特別研究員 奨励費	神長 斉子 (大野)	PD	メディア研究による19世紀ロシア文学の大衆化過程の解明	700
195	特別研究員 奨励費	菅原 山紀子 (川口)	PD	推論的な言語理解の概念的枠組みを提示する学際的理論の構築	1,100
196	特別研究員 奨励費	園部 裕子	PD	フランスにおける国民国家・福祉国家と社会的権利の変容過程：女性移住者の連帯を例に	1,100
197	特別研究員 奨励費	多湖 淳	PD	集団正当化をめぐる国際政治の実証研究 理念重視と手続重視の二つの正当化に注目して	900
198	特別研究員 奨励費	中島 聡子	PD	十六世紀スペインにおける重婚、移動、絆	1,100
199	特別研究員 奨励費	星野 靖二	PD	近代日本に見る宗教の位相と宗教者達の自己定位との相互変容	1,100

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
200	特別研究員 奨励費	眞崎 裕子 (神島)	PD	国境を越える社会正義論の倫理的根拠に関する研究	1,100
201	特別研究員 奨励費	山上 紀子	PD	芸術と社会－オディロン・ルドンの作品研究－	1,100
202	特別研究員 奨励費	渡邊 暁	PD	現代ラテンアメリカにおける地方政治の役割に関する比較研究	1,100
203	特別研究員 奨励費	前田 啓一	PD	極超新星とガンマ線バーストの爆発機構及び高赤方偏移における天体形成・進化の研究	1,100
204	特別研究員 奨励費	荒木 光典	PD	DIB候補である非直線炭素鎖分子の高感度・高分解能レーザー分光	1,100
205	特別研究員 奨励費	池田 真志	DC1	小売・サービス産業による生産・流通システムの再編成に関する地理学的研究	900
206	特別研究員 奨励費	五野井 郁夫	DC1	トランスナショナルな市民社会による規範形成の理論的考察：重債務帳消し運動を事例に	900
207	特別研究員 奨励費	坂口 菊恵	DC1	女性の性行動に対する個人差に関する内分泌学的背景の検討	900
208	特別研究員 奨励費	薩 日娜	DC1	近代日本における西洋数学の受容、及びその中国への影響	500
209	特別研究員 奨励費	杵掛 啓子 (藤澤)	DC1	幼児における社会関係の調整とその多元的理解：行動学的手法を用いて	900
210	特別研究員 奨励費	山形 伸二	DC1	衝動性の認知的・生物学的・発達のメカニズムの検討	900
211	特別研究員 奨励費	與那覇 潤	DC1	近代東アジア世界の「血縁」表象システムとアイデンティティ・ポリティクスの研究	900
212	特別研究員 奨励費	佐久間 寿人	DC1	テラヘルツ顕微鏡による量子ホール素子からのサイクロトロン発光イメージング	900
213	特別研究員 奨励費	関口 雄一郎	DC1	一般相対論の数値流体シミュレーションによるブラックホールの形成	900
214	特別研究員 奨励費	安原 望	DC1	シリコンベース量子構造におけるキャリアダイナミクスとデバイス機能化に関する研究	800
215	特別研究員 奨励費	小島 健介	DC1	ネットワーク制御した心筋細胞拍動リズム形成ダイナミクスの1細胞計測	900
216	特別研究員 奨励費	原本 悦和	DC1	両生類初期胚におけるノーダル関連遺伝子の機能解析	900
217	特別研究員 奨励費	小林 寛基	DC1	マウスの腎形成におけるWntシグナル及びSall遺伝子の分子機構の解析	900
218	特別研究員 奨励費	杉森 絵里子	PD	アウトプットモニタリングエラーに事前反復呈示や二重課題が及ぼす影響	900
219	特別研究員 奨励費	小笠原 菜穂子 (田邊)	PD	近世中期上方文化史の研究－京都東山文化圏における文人ネットワークを中心に－	1,100

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
220	特別研究員 奨励費	佐々木 淳	PD	対人恐怖症や統合失調症等にみられる自我漏洩感の維持プロセスの解明と治療法の開発	1,100
221	特別研究員 奨励費	坂本 浩也	PD	ブルーストと第一次世界大戦：戦時社会の表象に関する生成論的・歴史的研究	700
222	特別研究員 奨励費	池田 和弘	PD	世代間倫理の実践的理論構築：近代社会における未来記述の意味論的解明	900
223	特別研究員 奨励費	大竹 弘二	PD	カントと両大戦間期の国際政治思想：正戦論と国際連盟をめぐるドイツ精神史	700
224	特別研究員 奨励費	笠間 直穂子	PD	規範と芸術フランス19世紀前半における国語教育と文学	700
225	特別研究員 奨励費	香西 豊子	PD	ドネーションに関する歴史社会学的研究	1,100
226	特別研究員 奨励費	郷原 佳以	PD	「無形イメージ」による文学的想像力の研究：モーリス・ブランショと現代文学論の帰趨	700
227	特別研究員 奨励費	須藤 温子	PD	パラノイアと権力の諸相－シュレーバー、ヴァイニンガー、カネッティ	700
228	特別研究員 奨励費	乗松 亨平	PD	ロシア19世紀リアリズム文学におけるカフカス（コーカサス）植民地の表象	700
229	特別研究員 奨励費	長谷川 絹子	PD	古代ローマ家族の研究：苦悩する家族関係と社会	700
230	特別研究員 奨励費	濱崎 加奈子	PD	香道の美学－新たな日本芸道思想の地平のために	1,100
231	特別研究員 奨励費	原田 義也	PD	20世紀ウクライナ詩文学におけるナショナル・アイデンティティ	700
232	特別研究員 奨励費	鈴木 多聞	PD	戦争の終結と戦後体制の形成－統帥権から第九条へ－	1,100
233	特別研究員 奨励費	福永 美和子	PD	戦後ドイツ政治と司法を通じた「過去の克服」	700
234	特別研究員 奨励費	三村 太郎	PD	論証の登場する場－中世イスラーム世界における数学的諸学の正当をめぐって	1,000
235	特別研究員 奨励費	衛藤 稔	PD	超重力理論を用いた余剰次元模型におけるソリトンと超対称性の自発的破れ	900
236	特別研究員 奨励費	金野 純	PD	現代中国社会における政治動員・大衆運動とプロレタリア文化大革命	900
237	特別研究員 奨励費	佐藤 靖	PD	米国におけるシステム工学の興隆とその我が国への導入に関する研究	700
238	特別研究員 奨励費	高橋 労太	PD	重力レンズと偏光で探るブラックホール時空構造とダークマターの正体	1,100
239	特別研究員 奨励費	山下 雄史	PD	生体分子のダイナミクスにおける量子効果の基礎理論と生体機能への応用	1,100

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
240	特別研究員 奨励費	後藤 一成	PD	レジスタンス運動による内分泌と成長因子局所分泌に関する活性機序解明と処方への応用	1,100
241	特別研究員 奨励費	竹田 篤史	PD	植物のRNAiおよび植物ウイルスのRNAi抑制に関する機能プロテオミクス解析	1,100
242	特別研究員 奨励費	田中 亜路	PD	セミンタクト細胞とGFP可視化解析を用いた小胞体ストレス応答機構の解明	1,100
243	特別研究員 奨励費	森田 千鶴子 (山室)	PD	戦略的細胞死とCAD1機能に着目した植物免疫機構の全容解明	1,100
244	特別研究員 奨励費	阿部 真弓	PD	帰還と超越：未来主義と形而上絵画を中心とする二十世紀イタリア美術研究	500
245	特別研究員 奨励費	但馬 亨	DC2	17-18世紀のヨーロッパ代数学の変容について	800
246	特別研究員 奨励費	猪狩 弘美	DC2	ホロコーストの生き残りと戦後社会-「過去」との取り組みを中心に-	500
247	特別研究員 奨励費	池田 朋子	DC2	イラン石油産業国有化紛争1948-54-国際紛争としての脱植民地化-	900
248	特別研究員 奨励費	伊東 剛史	PD	立ち現れる巨大娯楽空間-19世紀英国における「文化」の制度化と公共性-	900
249	特別研究員 奨励費	小澤 英実	DC2	フェミニズム・ジェンダー理論から「恐怖の表象」を分析する、アメリカ地域文化研究	900
250	特別研究員 奨励費	門田 岳久	DC2	資源化された宗教と喚起される信心-巡礼産業の民俗学的研究	900
251	特別研究員 奨励費	桐生 裕子	DC2	19世紀後半ポヘミア農村社会におけるアソシエーションの生成・展開過程	500
252	特別研究員 奨励費	紺野 茂樹	PD	社会思想史上における「共苦」概念の諸形態・影響・可能性の追究	500
253	特別研究員 奨励費	坂本 さやか	PD	ミシュレにおける視覚の問題	500
254	特別研究員 奨励費	櫻井 文子	PD	日常性の中の科学-19世紀フランクフルトにおける自然科学結社と政治文化	900
255	特別研究員 奨励費	清水 一浩	DC2	ヴァルター・ベンヤミンの「瞬間の歴史哲学」の構築：超越論哲学の徹底化とその帰趨	500
256	特別研究員 奨励費	鈴木 敦命	PD	共感能力の認知・神経基盤	900
257	特別研究員 奨励費	相馬 雅代	DC2	初期環境による認知機能の個体差：鳥類の音声学習をモデルとした研究	900
258	特別研究員 奨励費	高橋 悠介	PD	金春禅竹の能楽論とその宗教的背景に関する研究	900
259	特別研究員 奨励費	田中 大介	DC2	現代日本における死の産業化：葬儀産業からみる死の変容と動態	900

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
260	特別研究員 奨励費	崔 真碩	DC2	帝国日本／植民地朝鮮の文化史：1930年代の文学と思想を中心に	900
261	特別研究員 奨励費	長縄 宣博	PD	ロシア帝国末期におけるムスリム社会と国家制度との相互関係（1905-1917）	500
262	特別研究員 奨励費	信岡 朝子	PD	動物・未開・子供－20世紀日米における人と自然の「境界」に関する文化表象	700
263	特別研究員 奨励費	三倉 康博	DC2	『トルコへの旅』とオスマン帝国	500
264	特別研究員 奨励費	横山 義志	DC2	フランスにおける近代俳優術の成立	500
265	特別研究員 奨励費	若松 大祐	DC2	戦後中国の思想的課題とそれに対する人々の取り組み：官製の修史と個人の自叙を中心に	900
266	特別研究員 奨励費	高橋 聡	PD	クーロン3体系の量子カオスと化学結合の本質の解明	900
267	特別研究員 奨励費	本條 晴一郎	DC2	聴覚系における動力学の応答の普遍的機構の解明	900
268	特別研究員 奨励費	關 祐威	PD	超臨界二酸化炭素中における固体塩基の触媒作用	500
269	特別研究員 奨励費	寺本 央	DC2	振動緩和と構造転移ダイナミクスの量子力学的研究	900
270	特別研究員 奨励費	大間 陽子	PD	ホモポリアミノ酸領域の性質・機能と構造の解析	900
271	特別研究員 奨励費	高橋 良典	DC2	細胞質タイニンのATP加水分解活性と運動活性の関係の解明	900
272	特別研究員 奨励費	田川 美穂	DC2	プログラム可能なDNAナノデバイスの構築	900
273	特別研究員 奨励費	成川 礼	PD	糸状性シアノバクテリアにおける新奇センサーPASドメインの同定	900
274	特別研究員 奨励費	本間 幹啓	DC2	アフリカツメガエル胚の初期発生におけるアクチビン応答遺伝子の探索と解析	900
275	特別研究員 奨励費	荒川 裕美	DC1	青年期における妄想的観念の発生メカニズムに関する研究	900
276	特別研究員 奨励費	稲村 一隆	DC1	アリストテレスを通じた知慮：倫理的知性の再生	500
277	特別研究員 奨励費	植原 亮	DC1	自然化された認識論と懐疑論：クワイン、ストラウド、ソウザらの議論をめぐって	200
278	特別研究員 奨励費	小黑 麻美	DC1	分子シャペロンからみた運動の生理学的効果－機械的刺激効果・代謝促進効果－	900
279	特別研究員 奨励費	北村 朋史	DC1	セーフガード制度の妥当基盤－国際経済法秩序における自由化概念の現代的意味－	900

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
280	特別研究員 奨励費	古泉 達矢	DC1	戦間期香港、台湾の阿片政策と国際関係	800
281	特別研究員 奨励費	高橋 雄介	DC1	パーソナリティと精神病理の認知的・生物学的メカニズムの検討	900
282	特別研究員 奨励費	田部 智子 (京極)	DC1	GATT/WTO体制における繊維貿易の位置付け	800
283	特別研究員 奨励費	東 健太郎	DC1	戦後政治家と象徴天皇制の関係に関する政治史的研究	900
284	特別研究員 奨励費	李 艶麗	DC1	近代初期中日文壇における都市知識人の状況と思想	900
285	特別研究員 奨励費	大橋 健良	DC1	マイクロ波伝導度スペクトル測定法の開発とそれを用いた高温超伝導体のゆらぎの研究	900
286	特別研究員 奨励費	辻 晶弘	DC1	ゲージ／重力対応におけるデュアリティの研究とそのクォークの閉じ込めへの応用	900
287	特別研究員 奨励費	三塚 由浩	DC1	Plane-wave背景時空の行列理論を用いたM理論の解析	900
288	特別研究員 奨励費	片山 健太	DC1	膜脂質に注目したオルガネラ膜構築の分子機構に関する研究	900
289	特別研究員 奨励費	鈴木 郁郎	DC1	構成的アプローチによる神経回路の可変性の研究	900
290	特別研究員 奨励費	最上 聡文	DC1	組み換え体とFRET法を用いた、ダイニンすべり運動を引き起こす構造変化の検出	900
291	特別研究員 奨励費	竹峰 義和	PD	テオドル・W・アドルノの亡命期のメディア理論のアクチュアルな射程	500
292	特別研究員 奨励費	櫻井 孝平	DC1	アスペクト指向プログラミング言語の言語拡張に対する新たな枠組みの導入	1,000
293	特別研究員 奨励費	佐藤 昌直	PD	病原体抵抗性遺伝子を介した抵抗性のシステムレベルでの解析および新規遺伝子同定	1,200
294	特別研究員 奨励費	井上 彰	PD	正義と平等に関する倫理学的研究－社会福祉の哲学的基礎－	800
295	特別研究員 奨励費	西山 達也	PD	哲学的問題としての「翻訳」：ハイデガーの思想とそのフランスにおける受容の研究	800
296	特別研究員 奨励費	門林 岳史	PD	共通感覚の系譜学－その認識論的、美学的ならびに政治的射程についての総合的研究	800
297	特別研究員 奨励費	山本 成生	PD	中性・ルネサンス時代における音楽家の社会的身分とその組織構造	1,200
298	特別研究員 奨励費	原 大地	PD	詩形式の現代性－フランス19世紀における散文詩の展開	1,200
299	特別研究員 奨励費	土屋 和代	PD	日米の福祉政策における人種とジェンダー：1960・70年代のコミュニティ政策	800

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
300	特別研究員 奨励費	三輪 光嗣	PD	ゲージ理論との双対性に基づいた超弦理論の非摂動論的定式化の研究	1,200
301	特別研究員 奨励費	伊藤 洋	PD	生物群集の再帰的な放散と絶滅における生態的要因の理論解析	800
302	特別研究員 奨励費	瀧ノ上 正浩	DC2	自律的に動作するDNAナノデバイスのための核酸分子オシレータの開発	1,000
303	特別研究員 奨励費	金山 浩司	DC2	スターリン期ソヴィエト連邦における物理学の制度史的・思想史的解明	600
304	特別研究員 奨励費	倉田 明子	DC2	19世紀華南における社会変動と基督教、後期太平天国における洪仁?の活動を中心に	600
305	特別研究員 奨励費	倉田 徹	DC2	中国大陆と香港の関係、特に中国政治の民主化における香港の役割の研究	600
306	特別研究員 奨励費	橋本 一径	DC2	指紋を中心とする身元確認技術の歴史の総合的研究-「登録される身体」の誕生	600
307	特別研究員 奨励費	森元 庸介	DC2	17世紀末から18世紀前半のフランスにおける藝術と道徳混合感情の主題を基点に	600
308	特別研究員 奨励費	木内 久美子	DC2	サミュエル・ベケットにおける「翻訳行為」-バイリンガリズムとジャンル横断の帰趨	600
309	特別研究員 奨励費	藏本 龍介	DC2	ミャンマー都市部における社会変動と仏教実践の変容に関する文化人類学的研究	1,000
310	特別研究員 奨励費	高野 さやか	DC2	司法制度と地域社会：インドネシア・メダン市の地方裁判所における民事紛争処理の諸相	1,000
311	特別研究員 奨励費	金山 準	DC2	20世紀史における「暴力」と「革命」：ジョルジュ・ソレルを通じて	1,000
312	特別研究員 奨励費	福田 潤一	DC2	アメリカの同盟システムにおける「階層性」の研究	600
313	特別研究員 奨励費	野田 恵子	DC2	ヘテロセクシズムと近代家族-十九世紀イギリスにおける法制度の変容を中心に	600
314	特別研究員 奨励費	南後 山和	DC2	戦後日本における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究	1,000
315	特別研究員 奨励費	吉田 純	DC1	金属錯体をゲスト、液晶・無機層状物質をホストとするホスト・ゲスト化合物の創製	1,000
316	特別研究員 奨励費	宮内 裕貴	DC1	言語における規範性をめぐる議論を手がかりとしたConventionの概念の分析	200
317	特別研究員 奨励費	白肌 邦生	DC1	科学技術研究者の研究動機付けと新事業創出意欲の研究	600
318	特別研究員 奨励費	鶴見 太郎	DC1	シオニズムの歴史社会学-東方ユダヤ人と西欧ユダヤ人の差異と相互関係に注目して	600
319	特別研究員 奨励費	岡田 謙介	DC1	心理データ解析における共分散構造分析（及びその関連モデル）の適合度指標の改善	1,000

	研究種目	研究代表者	職	研究課題目	配分額(千円)
320	特別研究員 奨励費	弓削 達郎	DC1	電気伝導系を舞台とした非平衡統計力学の研究	1,000
321	特別研究員 奨励費	森前 智行	DC1	マクロ量子系におけるマクロ量子コヒーレンスの研究	1,000
322	特別研究員 奨励費	土畑 重人	DC1	アミエアリにおける複数レベル淘汰と社会構造：利己者と利他者の拮抗的共存	1,000
323	特別研究員 奨励費	今村 謙士	DC1	ダイニンにおける長大なコイルドコイル構造を介した情報伝達機構	1,000
324	特別研究員 奨励費	團野 宏樹	DC1	脊椎動物の中樞神経系の前後軸形成を制御するWnt経路の標的遺伝子の探索と解析	1,000
325	特別研究員 奨励費	斎藤 拓也	DC1	カントにおける権利と政治－自然法論転換のラディカリズム	1,000
326	特別研究員 奨励費	吉田 丈人	講師	個体群動態の進化生物学：藻類－動物プランクトン系における実験的研究	3,000
327	特別研究員 奨励費	黒住 眞	教授	脱儒から脱亜へ－日本近世・近代の思想変化と東アジア思想構図の再構成－	700
328	特別研究員 奨励費	廣野 喜幸	助教授	近代東アジアの身体観と医学思想－日本と朝鮮の比較の観点から	800
329	特別研究員 奨励費	高塚 和夫	教授	時間分解光電子分光法の多次元分子理論への拡張とプロトン移動の直接観測への応用	1,200
330	特別研究員 奨励費	増原 英彦	助教授	表現力の高いポイントカットと役割モデルによるアスペクト指向リファクタリングの改善	900
331	特別研究員 奨励費	小宮山 進	教授	量子ホール電子系における端状態の位相干渉性とその制御	1,200
332	特別研究員 奨励費	清水 明	教授	非平衡状態におけるゆらぎと多体量子系のエンタングルメント	800
333	特別研究員 奨励費	エリス 俊子	教授	村上春樹の文学テキストにおけるジェンダーの問題：現代日本文化における日常性の分析を中心に	600
334	特別研究員 奨励費	池上 高志	助教授	言語の普遍項と類型学のためのくりかえし学習パラダイムの開発	800
335	特別研究員 奨励費	信原 幸弘	助教授	探索行動の知覚経験に基づく感覚様相の解明	800
336	特別研究員 奨励費	金子 邦彦	教授	細胞サイズのホメオスタシスの理論：細胞の成長と分裂の調整のしくみ	800
337	特別研究員 奨励費	並木 頼寿	教授	愛国主義教育と少数民族－中国の国家統合下に於ける少数民族社会－	300
338	特別研究員 奨励費	池上 高志	助教授	身体性に基づいた新しい音楽理論の研究	700
339	特別研究員 奨励費	金子 邦彦	教授	枯菌の細胞集団の確率的遺伝子発現と閾値ダイナミクスの解析	700
合計					763,660

2006(平成18)年度 21世紀COEプログラム研究拠点形成費補助金

(平成19年1月15日現在)

	拠点リーダー	職	プログラム名称	配分額(千円)
1	小林 康夫	教授	共生のための国際哲学交流センター	81,800
2	浅島 誠	教授	融合科学創成ステーション	174,870
3	長谷川 壽一	教授	心とことば－進化認知科学的展開	111,220
合計				367,890

2006(平成18)年度 厚生労働科学研究費補助金

				(平成19年1月15日現在)
	主任研究者	職名	研究課題	交付額(千円)
1	松田 良一	助教授	ナンセンス変異型筋ジストロフィーのリードスルー薬物による治療法の確立	9,482
2	石浦 章	教授	筋強直性ジストロフィーの病態解明とRNAを介した治療	16,000
合計				25,482

2006(平成18)年 寄附金

平成18年1月1日～平成18年12月31日(受入決定分)

受入番号	寄附者	金額	職	受入教員	研究テーマ
1	京都大学(若杉桂輔・移し換え)	294,000	助教授	若杉桂輔	
2	京都大学(財団法人住友財団・移し換え)	784,000	助教授	若杉桂輔	
3	東京大学美術博物館 委員長 池田信雄	7,596	委員長	池田信雄	
4	財団法人光科学技術研究振興財団	1,000,000	助手	生嶋健司	
5	財団法人中山隼雄科学技術文化財団	3,100,000	助教授	開 一夫	社会的認知の発達とテレビゲーム：発達認知神経科学的アプローチ
6	三菱ウェルファーマ株式会社	1,000,000	教授	石浦章一	
7	財団法人放送文化基金	2,400,000	助教授	開 一夫	乳幼児のテレビ映像理解に関する発達認知神経学的研究
8	株式会社ベネッセコーポレーション	55,000,000	学部長	木畑洋一	寄付研究部門「教養教育社会連携(ベネッセコーポレーション)研究部門」
9	財団法人土木研究センター	440,000	助手	清野聡子	
10	橘 隆志	2,000,000	特任教授	橘 隆志	
11	ドイツ学術交流会東京事務所	14,564,350	センター長	木畑洋一	
12	財団法人ライフサイエンス振興財団	1,000,000	教授	久保田俊一郎	
13	財団法人セコム科学技術振興財団	1,000,000	助手	神崎素樹	
14	村田雄二郎(財団法人交流協会)	1,000,000	教授	村田雄二郎	近現代中国と東アジアの公共性
15	神崎素樹(財団法人明治安田厚生事業団)	1,000,000	助手	神崎素樹	高齢者の立位平衡機能低下に及ぼす力学的補償機構の解明
16	財団法人第一住宅建設協会	1,400,000	教授	荒井良雄	少子高齢化における地方中核都市の人口構造の特質と住宅市場の将来像－ライフコースアプローチによる分析－
17	株式会社ビデオリサーチ	1,200,000	講師	星野崇宏	
18	松本和子(財団法人りそなアジア・オセアニア財団)	920,000	助教授	松本和子	ミクロネシアにおける言語消滅の研究－パラオの日本語を中心に－
19	村田雄二郎(財団法人トヨタ財団)	5,000,000	教授	村田雄二郎	市場経済下の現代チベット－宗教復興と文化教育
20	財団法人骨粗鬆症財団	800,000	助手	神崎素樹	加齢に伴う骨強度の低下が立位バランス能力に及ぼす影響
21	星野崇宏(財団法人稲盛財団)	1,000,000	講師	星野崇宏	実験が行えない状況での因果効果の推定法の開発と教育プログラム評価への応用
22	医療法人はまなか皮膚科クリニック	500,000	教授	久保田俊一郎	
23	株式会社セルガレージ	1,200,000	教授	石井直方	
24	柴尾晴信(財団法人風戸研究奨励会)	1,000,000	助手	柴尾晴信	アブラムシにおける階級分化と社会制御－化学シグナルを介した階級の認識と兵隊分化の調節機構－
25	財団法人日産科学振興財団	10,000,000	助教授	村上郁也	人と機械の自然な共生を目指す認知科学研究：楽しく安全なクルマ生活のために
26	アメリカンライフインシュアランスカンパニー	5,500,000	教授	三谷 博	

受入番号	寄附者	金額	職	受入教員	研究テーマ
27	九州建設コンサルタント株式会社	300,000	助手	清野聡子	河口干潟の水環境と生態系に関する研究
28	古河機械金属株式会社	1,000,000	助教授	栗栖源嗣	
29	三共株式会社	1,000,000	教授	黒田玲子	
30	Human Frontier Science Program Organization	13,368,375	教授	石浦章一	
31	有限会社自然療法研究所	5,000,000	助教授	山田 茂	
32	花王株式会社	1,200,000	教授	跡見順子	近代東アジアにおける知の生産と転換
33	村田雄二郎（独立行政法人国際交流基金）	1,454,700	教授	村田雄二郎	
34	三谷 博	415,800	教授	並木頼寿	
35	昭和電工株式会社	1,000,000	教授	尾中 篤	
36	財団法人漢方医薬研究振興財団	3,000,000	教授	渡辺雄一郎	
37	財団法人旭硝子財団	1,500,000	助教授	増原英彦	植物の維管束分化を誘導するxylogenの構造と輸送機構の解析
38	財団法人旭硝子財団	1,500,000	助手	本瀬宏康	
39	三共株式会社	500,000	教授	尾中 篤	
40	東京大学美術博物館 委員長 池田信雄	3,884	委員長	池田信雄	
41	財団法人医薬資源研究振興会	500,000	助教授	若杉桂輔	
42	財団法人リバーフロント整備センター	1,800,000	助手	清野聡子	中部地方の環境変遷における自然と人為の関係の国際発信の研究
43	株式会社ビデオリサーチ	1,000,000	教授	繁榊算男	
44	神崎素樹（財団法人石本記念デサントスポーツ科学振興財団）	1,000,000	助手	神崎素樹	
45	小林康夫（財団法人小西国際交流財団）	1,000,000	教授	小林康夫	
46	ドイツ学術交流会東京事務所	12,001,970	センター長	木畑洋一	
47	財団法人リバーフロント整備センター	2,200,000	助手	清野聡子	木曽川流域の水循環研究による科学的啓発活動の研究
48	大日本印刷株式会社	5,000,000	研究科長	木畑洋一	
49	ナノカーボンテクノロジーズ株式会社	500,000	教授	松尾基之	
50	財団法人サントリー文化財団	500,000	教授	橋本毅彦	
51	久保田俊一郎	500,000	教授	久保田俊一郎	
52	株式会社SRA先端技術研究所	1,000,000	教授	玉井哲雄	新たな中国近現代リベラリズム研究の創成
53	株式会社朝日出版社	349,800	助教授	斎藤文子	
54	株式会社竹中工務店	1,000,000	助手	棚屋光男	
55	東京大学美術博物館 委員長 池田信雄	407,411	委員長	池田信雄	
56	橋 隆志（立花 隆）	1,000,000	特任教授	橋 隆志	
57	村田雄二郎（財団法人三菱財団）	1,000,000	教授	村田雄二郎	プロフィリンによる収縮環形成制御機構の解明
58	公益信託医用薬物研究奨励富岳基金	250,000	助教授	山田 茂	
59	日産化学工業株式会社	500,000	教授	菅原 正	
60	公益信託成茂動物科学振興基金	500,000	助手	箕浦高子	

受入番号	寄附者	金額	職	受入教員	研究テーマ
61	小林寛道	1,500,000	－	スポーツ・身体運動部会	
62	財団法人日本棋院	4,750,000	学部長	木畑洋一	「教養教育への囲碁の活用」寄付研究部門
63	株式会社日能研	4,250,000	学部長	木畑洋一	「教養教育への囲碁の活用」寄付研究部門
64	財団法人大川情報通信基金	1,000,000	助手	工藤和俊	
65	東ソー株式会社	500,000	教授	尾中 篤	
66	三共株式会社	1,000,000	教授	黒田玲子	
67	東京大学美術博物館 委員長 池田信雄	7,887	委員長	池田信雄	
68	倉田博史	300,000	助教授	倉田博史	
69	財団法人ホクト生物科学振興財団	500,000	助教授	若杉桂輔	
70	財団法人住友財団	600,000	助教授	佐々真一	特異振動法にもとづくガラス転移の理論
71	財団法人住友財団	1,400,000	助手	吉川 豊	フォトリック結晶微小共振器を用いた単一原子検出
72	北海道大学(川島真・移し換え)(財団法人JFE21世紀財団)	1,108,066	助教授	川島 真	
73	北海道大学(川島真・移し換え)(財団法人サントリー文化財団)	700,000	助教授	川島 真	
74	医療法人はまなか皮膚科クリニック	300,000	教授	久保田俊一郎	
75	ピューラック・ジャパン株式会社	250,000	助教授	八田秀雄	
76	イタリア文化会館	3,664,000	学部長 (助教授)	木畑洋一 村松真理子)	
77	三共株式会社	500,000	教授	尾中 篤	
78	自然科学博物館委員長長谷川寿一	7,887	委員長	長谷川寿一	
79	ドイツ学術交流会東京事務所	9,353,125	センター長	木畑洋一	
80	久保啓太郎(財団法人三井住友海上福祉財団)	800,000	助手	久保啓太郎	
81	財団法人医科学応用研究財団	1,000,000	教授	跡見順子	
82	松原宏(財団法人とうきゅう環境浄化財団)	810,000	助教授	松原 宏	
合計		210,662,851			

2006(平成18)年 寄附金(数理学研究科)

平成18年1月1日～平成18年12月31日(受入決定分)					
受入番号	寄附者	金額	職	名前	研究テーマ
1	欧州連合 (EU)	5,027,376	教授	斎藤 毅	
2	新日本製鐵株式会社	1,500,000	助教授	山本昌宏	
3	欧州連合 (EU)	4,467,900	教授	斎藤 毅	
合計		10,995,276			

2006(平成18)年 受託研究

平成18年1月1日～平成18年12月31日(受入決定分)

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル
1	武田薬品工業株式会社	八田秀雄	2,000,000	運動時の乳酸を中心とする糖代謝にビタミンB1が与える影響
2	独立行政法人日本学術振興会	石田勇治	11,050,000	平和構築に向けた知の展開（ジェノサイド研究の展開）
3	独立行政法人日本学術振興会	山田広昭	8,450,000	文学・芸術の社会的媒介機能（文学・芸術の社会統合的機能の研究）
4	独立行政法人科学技術振興機構	陶山 明	26,260,000	DNAエンコード技術による生体情報分析法
5	独立行政法人科学技術振興機構	清水 明	650,000	多体量子系としての量子計算機の分析
6	独立行政法人科学技術振興機構	北野晴久	650,000	固有ジョセフソン接合と超伝導共振器を用いた量子状態制御の研究
7	独立行政法人医薬基盤研究所	浅島 誠	18,000,000	(1)「ES細胞から分化誘導した膵臓系に及ぼす機能ゲノムに関する試験研究 (2)「機能ゲノム解析のためのマウスES細胞からの分化・誘導に関する試験研究」
8	独立行政法人科学技術振興機構	酒井邦嘉	4,680,000	脳機能計測・双生児研究による言語獲得メカニズムの解明
9	独立行政法人科学技術振興機構	久我隆弘	2,600,000	原子ボーズ凝縮体と光双極子ポテンシャルを使った原子量子回路の開発
10	独立行政法人科学技術振興機構	川戸 佳	39,000,000	脳スライス中で可視化した神経シナプスの自動解析
11	独立行政法人科学技術振興機構	浅島 誠	10,000,000	器官再生の研究
12	独立行政法人科学技術振興機構	陶山 明	936,000	位置情報を利用した分子メモリ
13	日本中央競馬会	八田秀雄	3,000,000	サラブレッドの乳酸代謝及び乳酸輸送担体に関する研究
14	独立行政法人科学技術振興機構	上村慎治	1,690,000	レーザー暗視野顕微鏡を使った新しい振動解析システムの構築とモーター分子振動の解析
15	独立行政法人科学技術振興機構	前田京剛	1,371,500	高温超伝導ジョセフソン接合回路のダイナミクスの研究
16	独立行政法人科学技術振興機構	豊島陽子	2,340,000	ダイニン・微小管系の運動と振動性の解析
17	三重県	松尾基之	600,000	環境シミュレーションモデルの開発－英虞湾底質中の形態別鉄の解析－
18	独立行政法人科学技術振興機構	小宮山進	8,320,000	赤外－サブミリ波領域の光子検出器開発と走査顕微鏡の開拓
19	独立行政法人日本学術振興会	磯崎行雄	676,000	地球環境の歴史と生命の誕生
20	独立行政法人科学技術振興機構	池上高志	3,300,000	アートによる複雑系科学の表現モデルの開発
21	国立精神・神経センター	石浦章一	3,500,000	筋強直性ジストロフィーの発症機序と治療法の開発
		松田良一	3,500,000	Mdxマウスおよびストップコドン読み越え活性測定用トランスジェニックマウスを用いた薬物治療に関する研究
22	株式会社富士通研究所	玉井哲雄	1,000,000	ソフトウェアの高信頼化に関する研究
23	マイクロ化学プロセス技術研究組合	尾中 篤	3,999,450	「ナノ空孔反応場と分子触媒の協働作用技術の開発」、及び、「ナノ空孔反応場と分子触媒の協働作用技術への協奏的反応場の適用」
24	独立行政法人科学技術振興機構	小宮山進	1,300,000	テラヘルツ検出器と顕微鏡の開拓
25	独立行政法人情報通信研究機構	小宮山進	24,747,030	ICTによる安全・安心を実現するためのテラヘルツ波技術の研究開発
26	独立行政法人科学技術振興機構	信原幸弘	3,710,200	社会的影響の観点から見た神経科学研究
合計			187,330,180	

2006(平成18)年 共同研究

平成18年1月1日～平成18年12月31日(受入決定分)

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル
1	アドバンスソフト株式会社	川戸 佳	0	神経スパイン自動画像処理ソフトの開発
2	株式会社コンボン研究所	真船文隆	3,150,000	溶液中中金クラスター表面の局所高温高圧場を反応場とする化学反応の解明
3	株式会社デンソー	菅原 正	3,000,000	導電性が付与された有機磁性材料の二次電池への適用化検討
4	独立行政法人科学技術振興機構	金子邦彦	4,660,000	生命システムの理論研究
5	アドバンスソフト株式会社	川戸 佳	0	神経スパイン自動画像処理ソフトの開発
6	独立行政法人科学技術振興機構	黒田玲子	22,068,800	カイロモルフォロジー基盤技術開発研究
7	独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構	柳原 大	2,000,000	遺伝子改変による生理機能変化の解析
8	財団法人国際超電導産業技術研究センター	前田京剛	0	微細化による高温超電導ジョセフソン接合高性能化の研究
9	アステラス製薬株式会社	村田昌之	49,992,600	細胞内操作に基づく分子動態解析技術の研究開発
10	財団法人微生物化学研究会	松田良一	2,343,000	抗菌物質によるナンセンス突然変異の克服
11	株式会社デンソー	深津 晋	1,000,000	Si系導波路型光エミッタの研究
12	トヨタ自動車株式会社	真船文隆	3,000,000	ナノ粒子を用いたレーザブレイクダウン閾値に関する共同研究
13	社団法人バイオ産業情報化コンソーシアム	陶山 明	2,999,850	機能性RNA解析のための支援技術・ツールの開発
14	株式会社博報堂	植田一博	750,000	認知プロセスを考慮した情報コンテンツデザインの研究
15	日本電信電話株式会社	加藤恒昭	1,000,000	動向情報のマルチモーダル要約技術に関する研究
16	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	石井直方	0	加圧トレーニング法の地上検証実験
17	キリンビール株式会社	浅島 誠	1,000,000	腎発生期に発現する創薬標的候補遺伝子の探索
18	株式会社豊田中央研究所	豊島陽子	1,000,000	生体分子モーターの再構築によるアクチュエータ機能の検証
19	大正製薬株式会社	浅島 誠	5,000,000	幹細胞脱分化因子の探索
20	独立行政法人製品評価技術基盤機構	池内昌彦 佐藤直樹 和田 元	0	<i>Spirulina platensis</i> NIES39株のゲノム解析に係る共同研究
21	フィールファイン株式会社	石井直方	567,000	トライアングルアセスメントに基づいたメタホリックシントローム対策プログラムの研究開発
合計			103,531,250	

* 金額欄は委託団体の負担分のみ

2006(平成18)年 共同研究(数理科学研究科)

平成18年1月1日～平成18年12月31日(受入決定分)

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル
1	東京電力株式会社	儀我美一 山本昌宏	6,860,000	配管内面部分減肉時の外面電位を近似する数学的手法に関する研究
2	独立行政法人科学技術振興機構	河東泰之	420,000	量子通信路の可逆性と情報理論的・幾何学的保存量の評価
3	新日本製鐵株式會社	山本昌宏	7,425,600	固定エネルギー削減のための非定常伝熱逆問題センシング技術の研究開発
合計			14,705,600	

* 金額欄は委託団体の負担分のみ

2006(平成18)年度の役職者

研究科長・学部長および専攻・系長・学科長

研究科長・学部長	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から
副研究科長・副学部長(評議員)	小島 憲道	平成19年2月15日まで
	西中村 浩	平成19年2月16日から
副研究科長・副学部長	西中村 浩	平成19年2月15日まで
	長谷川壽一	平成19年2月16日から
副研究科長・副学部長(事務部長)	宮川 雅雄	
総長特任補佐	黒田 玲子	
研究科長特任補佐	浅島 誠	
	池田 信雄	
	小寺 彰	
総長補佐	生越 直樹	
研究科長・学部長補佐	岡本 拓司	
	齋藤 希史	平成18年9月30日まで
	清水 剛	平成18年10月1日から
言語情報科学専攻長	伊藤たかね	
超域文化科学専攻長	高田 康成	
地域文化研究専攻長	大貫 隆	
国際社会科学専攻長	高橋 直樹	
広域科学専攻長	菅原 正	
生命環境科学系長	長谷川壽一	平成19年2月15日まで
	久保田俊一郎	平成19年2月16日から
相関基礎科学系長	山崎 泰規	
広域システム科学系長	嶋田 正和	
超域文化科学科長	北川 東子	
地域文化研究学科長	村田雄二郎	
総合社会科学科長	後藤 則行	
基礎科学科長	小宮山 進	
広域科学科長	松尾 基之	
生命・認知科学科長	池内 昌彦	

総合文化研究科・教養学部内の各種委員長・議長・代表など

総務委員会	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から

前期運営委員会	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から

前期教務電算委員会	陶山 明	
後期運営委員会	後藤 則行	
総合文化研究科教育会議	伊藤たかね	
教務委員会	陶山 明	
財務委員会	小島 憲道	平成19年2月15日まで
	長谷川壽一	平成19年2月16日から

教育研究経費委員会	須藤 和夫	
入試委員会	早川眞一郎	
広報委員会	石井 直方	
情報基盤委員会	川合 慧	
ネットワーク専門委員会	佐藤 俊樹	
教育研究評価委員会	遠藤 泰樹	
図書委員会	鹿見島誠一	
学生委員会	松原隆一郎	平成18年9月まで
	佐藤 直樹	平成18年10月から

三鷹国際学生宿舎運営委員会	中澤 英雄	平成18年9月まで
	増田 茂	平成18年10月から

建設委員会	小島 憲道	平成19年2月15日まで
	長谷川壽一	平成19年2月16日から

教養学部報委員会	増田 茂	
社会連携委員会	三谷 博	
環境委員会	下井 守	
知的財産室	小宮山 進	
共用スペース運用委員会	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から

研究棟管理運営委員会	奥野 誠	
国際連携委員会	西中村 浩	
国際交流・留学生委員会	中西 徹	
駒場インターナショナルオフィス運営委員会	高田 康成	
防災委員会	木畑 洋一	平成19年2月15日まで

	小島 憲道	平成19年2月16日から
--	-------	--------------

奨学委員会	上田 博人	
学生相談協議会	中西 徹	
進学情報センター運営委員会	竹内 信夫	
学生相談所運営委員会	繁榊 算男	

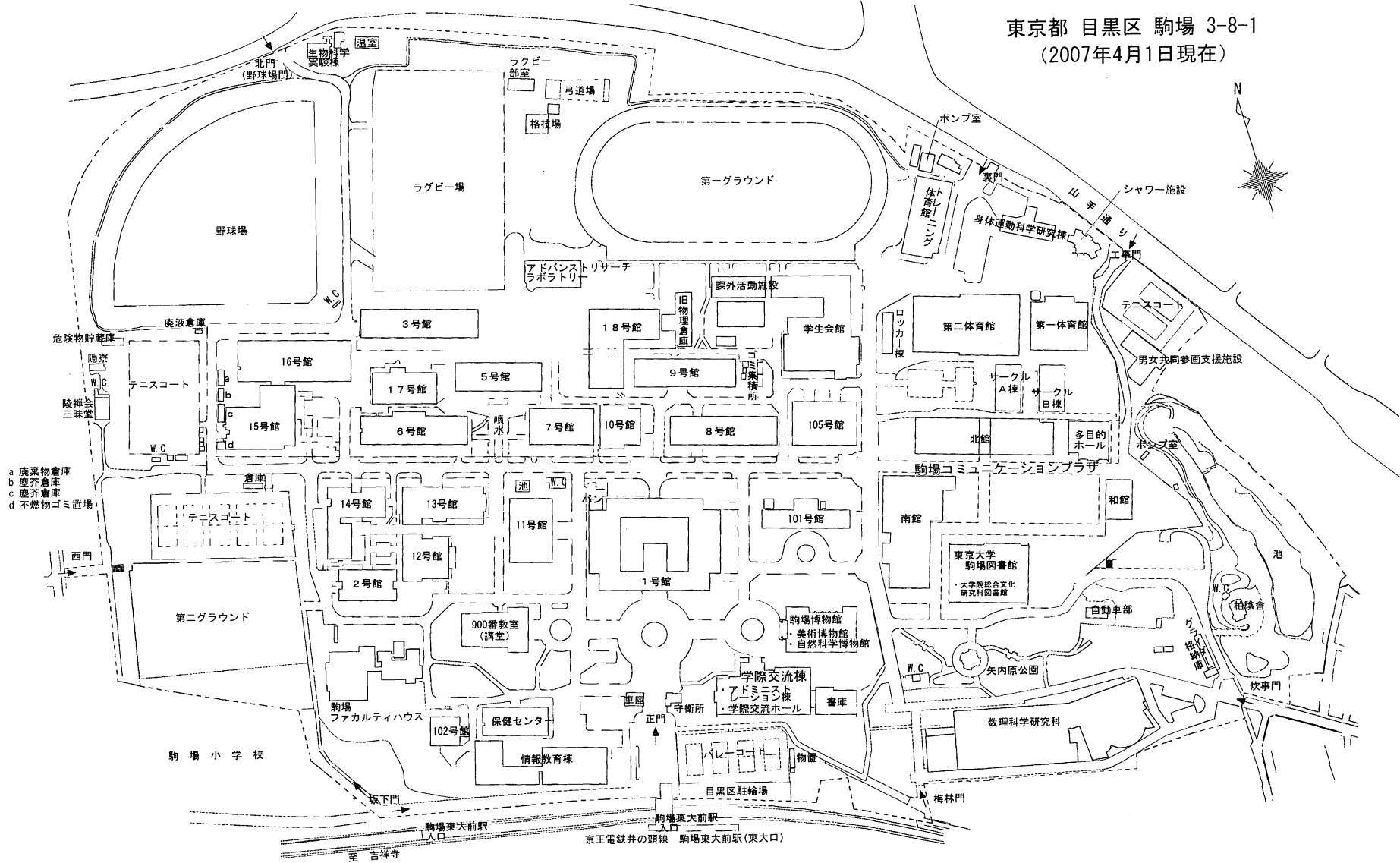
ハラスメントに関する相談員	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から
教養教育開発室運営委員会	永田 敬	
放射線安全委員会	渡邊雄一郎	
放射線施設運営委員会	川戸 佳	
核燃料物質調査委員会	菅原 正	
ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会		
	大築 立志	
遺伝子組換え生物等実験安全委員会	石浦 章一	
実験動物委員会	松田 良一	
研究用微生物委員会	村田 昌之	
化学物質安全管理委員会	池内 昌彦	
石綿問題委員会	小島 憲道	平成19年2月15日まで
	長谷川壽一	平成19年2月16日から
学友会評議員	山内 昌之	
文化施設運営委員会	安達 裕之	
美術博物館委員会	池田 信雄	
自然科学博物館委員会	長谷川壽一	
学際交流ホール運営委員会	岩佐 鉄男	
オルガン委員会	吉岡大二郎	
TA委員会	小島 憲道	平成19年2月15日まで
	長谷川壽一	平成19年2月16日から
スペース・コラボレーションシステム運営委員会		
	鈴木 英夫	
アメリカ太平洋地域研究センター運営委員会	能登路雅子	
共通技術室運営委員会	小宮山 進	
情報倫理審査会	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から
駒場ファカルティハウス運営委員会	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から
男女共同参画支援委員会	蜂巢 泉	
駒場地区衛生委員会	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から
駒場地区苦情処理委員会	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から
部会主任およびその他の前期教育担当グループ責任者		
英語	山本 史郎	
ドイツ語	幸田 薫	
フランス語	松浦 寿輝	

中国語・朝鮮語	ラマール・クリスティーン	
ロシア語	浦 雅春	
スペイン語	竹村 文彦	
古典語・地中海諸言語	村松真理子	
法・政治	恒川 恵市	
経済・統計	中西 徹	
社会・社会思想史	山脇 直司	
国際関係	石田 淳	
歴史学	並木 頼壽	
国文・漢文学	小森 陽一	
文化人類学	山下 晋司	
哲学・科学史	門脇 俊介	平成18年8月31日まで
	山本 巍	平成18年9月1日から
心理・教育学	繁桝 算男	
人文地理学	荒井 良雄	
物理	吉岡大二郎	
化学	尾中 篤	
生物	佐藤 直樹	
情報・図形	丹羽 清	
宇宙地球	磯崎 行雄	
関連自然	小宮山 進	
スポーツ・身体運動	石井 直方	
外国語委員会委員長	山本 史郎	
人文科学委員会委員長	荒井 良雄	
社会科学委員会委員長	丸山 真人	
前期課程数学委員会委員長	野口順次郎	
センターなど		
アメリカ太平洋地域研究センター		
センター長	能登路雅子	
教養教育開発機構		
機構長	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から
ドイツ・ヨーロッパ研究センター		
センター長	木畑 洋一	
複雑系生命システム研究センター		
センター長	金子 邦彦	
保健センター駒場支所		
支所長	上原誉志夫	
共通技術室		
室長	小島 憲道	平成19年2月15日まで
	長谷川壽一	平成19年2月16日から
学生相談所		
所長	木畑 洋一	平成19年2月15日まで
	小島 憲道	平成19年2月16日から

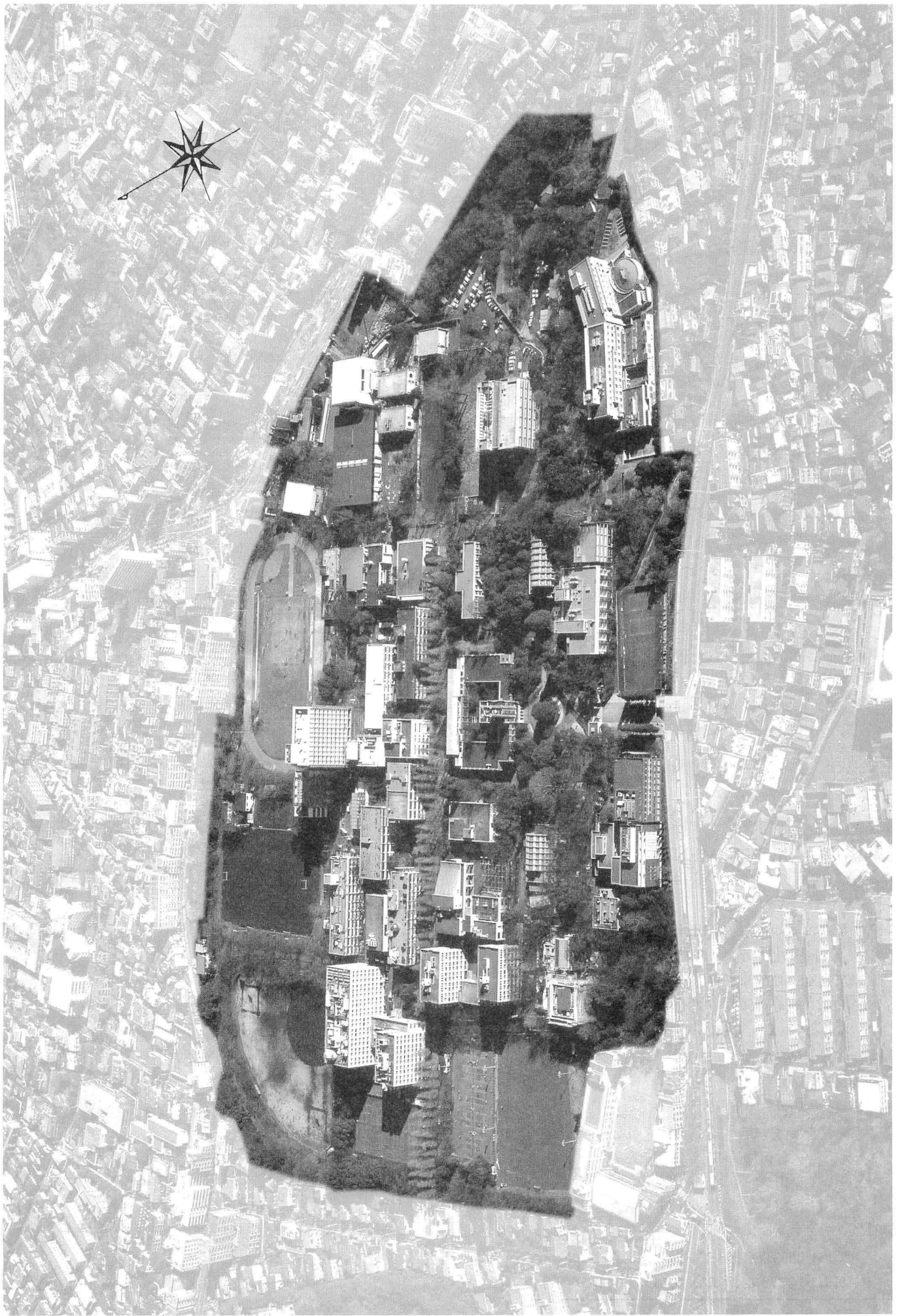
事務部		經理課長	根岸 邦次
		教務課長	新妻 智子
事務部長	宮川 雅雄	學生課長	根岸 茂
総務課長	紺野 鉄二	図書課長	酒井 清彦

キャンパス配置図

東京都 目黒区 駒場 3-8-1
(2007年4月1日現在)



駒場 I キャンパスの現状。平面図(2007年)



駒場Ⅰキャンパスの現状。航空写真

[駒場]2006 SUPPLEMENT

平成19年3月31日 発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科

研究科長 小島 憲道

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6004 (ダイヤルイン)

<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/>

編集：広報委員会 活字媒体ワーキング・グループ

広報委員長：石井 直方

編集委員長：内野 儀

編集委員：池上 俊一 伊藤 元巳

久保田俊一郎 斎藤 兆史

柴田 寿子 清水 剛

関口 英子 松下 信之

制作：メディアフロント

〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-41-2-506

TEL 03-3373-6521 FAX 03-3373-6527

